

子どもの育ちをめぐる現状等に関するデータ集

文部科学省

目次

1 家族・世帯

(世帯の構成)

- 1-1 出生数及び合計特殊出生率の年次推移……………p 2
- 1-2 児童の有無・人数別世帯数(割合)の推移……………p 3
- 1-3 児童のいる世帯における世帯類型別割合の推移……………p 4
- 1-4 父母の有無・同居別居別に見た児童の状況……………p 5

(勤労・所得・子育て費用)

- 1-5 父母とも同居している世帯の就労状況(共働き・片働き等)……………p 6
- 1-6 児童のいる世帯の1世帯当たり平均所得金額……………p 7
- 1-7 生活保護の保護率の推移(0～14歳)……………p 8
- 1-8 1ヶ月にかかる養育費(平成16年11月)……………p 9
- 1-9 幼児・児童・生徒一人当たりの学習費年額……………p 10

(その他)

- 1-10 児童相談所における児童虐待相談処理件数……………p 11

2 家庭の教育力

(家庭の教育力に関する意識)

- 2-1 家庭の教育力低下に対する認識
家庭の教育力低下についての実感
(単純集計・世帯別集計)……………p 13・14
家庭の教育力が低下している理由……………p 15
- 2-2 親の意識
どうい親でありたいか……………p 16
家庭教育で心がけていること……………p 17・18
- 2-3 親の子どもへの期待(国際比較)……………p 19

(子育て・家庭教育の実践)

- 2-4 育児・家事時間、子どもと接する時間
夫婦の育児・家事時間(国際比較)……………p 20
父母が子どもと接する時間(国際比較)……………p 21
父母の仕事からの帰宅時間……………p 22
- 2-5 子どもとの接し方・一緒にすること
未就学児の父母の子どもとの接し方……………p 23
子どもたちとよく一緒にすること……………p 24
- 2-6 一週間のうち、家族そろって食事をする
日数……………p 25

2-7 父母と子どもたちとの会話時間(一週間あたり)……………p 26

2-8 家で手伝いをしている子どもの割合(小・中学生)……………p 27

2-9 しつけの状況

父母の子育て役割分担:しつけをする……………p 28

父母のしつけについてどう思っているか……………p 29

父母から言われること(国際比較)……………p 30

(子育ての負担、不安、悩み)

2-10 子育てに対する思い(子育てを楽しんでいるか、
つらいと感じるか)……………p 31

2-11 負担に思うこと、不安・悩みの内容・理由

負担に思うことや悩みの種類(未就学児の親)……………p 32

不安や悩みの理由(未就学児のいる母親・父親)……………p 33

不安や悩みの種類(18歳未満の子供を持つ親)……………p 34

3 学校教育

(学校教育に関する意識)

3-1 学校生活への満足感……………p 36

3-2 学校で身につけたいこと(小学生、中学・高校生)……………p 37・38

3-3 学校で身につけてほしいこと(保護者・教員)……………p 39

(児童生徒の問題行動等)

3-4 校内における暴力行為発生件数の
推移……………p 40

3-5 いじめの認知件数の推移……………p 41

3-6 不登校児童生徒数の推移……………p 42

3-7 高等学校中途退学者の推移……………p 43

(教育活動の状況)

3-8 道德教育

道德の時間についての児童生徒

のうけとめ……………p 44

道德の時間で使用する教材……………p 45

諸外国の学校における道德教育……………p 46

3-9 学校における体験活動の実施状況……………p 48

3-10 学校における読書活動の取組状況……………p 49

4 地域の教育力

(地域の教育力等に関する意識、経験)

- 4-1 地域の教育力低下に対する認識……………p 51
- 4-2 地域が果たすべき役割……………p 52
- 4-3 地域で力を入れるべきこと……………p 53
- 4-4 家の人や学校の先生以外の大人から注意
された経験……………p 54・55

(大人の活動・意識等)

- 4-5 地域活動への大人の参加
過去1年間の地域活動への参加率……………p 56
地域の活動などへの参加を妨げる理由……………p 57
- 4-6 現在の近所つきあいの程度……………p 58
- 4-7 現在の世相に関する意識(暗いイメージ)……………p 59

(子どもの活動等)

- 4-8 小・中学生の放課後・休日の過ごし方
放課後・休日に過ごす場所……………p 60
放課後・休日に一緒に過ごす相手……………p 61

4-9 家族以外の異なる世代の人々との交流……………p 62

4-10 ボランティア活動等の参加状況……………p 63

4-11 青少年団体等への加入状況……………p 64

5 子ども

(生活習慣)

- 5-1 22時以降に就寝する幼児・24時以降に就寝
する中学2年生の割合……………p 66
- 5-2 平日の起床時間の状況(未就学児、小・中学
生)……………p 67
- 5-3 朝食
朝食を食べないことがある割合……………p 68
朝食を食べなかった理由……………p 69
「朝食欠食」と「体のだるさ」の関係……………p 70
朝食と学力調査の正答率の関係……………p 71

(放課後の活動等)

5-4 帰宅時間の状況……………p 72

5-5 学校から帰宅後の遊ぶ時間……………p 73

5-6 平日の学校以外における読書時間の状況
(小・中学生)……………p74

(メディアとのかかわり等)

5-7 多様なメディアとのかかわり
自由時間の過ごし方……………p75
なくてはならないもの……………p76

5-8 平日にテレビ、ビデオ・DVDを視聴する時間
(未就学児、小・中学生)……………p77

5-9 ゲーム、インターネット、携帯電話
平日にテレビゲームやインターネットをする
時間(未就学児、小・中学生)……………p78
インターネット利用率・携帯電話(PHS含む)
の所持率……………p79
携帯電話の利用状況(少年一般・非行少年)……………p80

5-10 自然体験、奉仕体験、生活体験等の有無
(小・中学生)……………p81・82

5-11 自然体験の状況
自然体験について「ほとんどしたことがない」
割合(平成10・17年)……………p83
自然体験と道徳観・正義感の関係……………p84

(意識)

5-12 自己評価・自己肯定感
幸せ感の状況……………p85
自己肯定感につながる経験・意識の状況
(小・中学生)……………p86
自己に対する意識(国際比較)……………p87

5-13 規範意識
規範に関わる意識・行動の状況(小・中学
生)……………p88
どういう行動をとるか(中学生)……………p89
してはいけないと思うこと(国際比較)……………p90

5-14 価値観
大切なことと思うこと……………p91
生活意識・生活の目標……………p92
生活の中で重要なこと(国際比較)……………p93

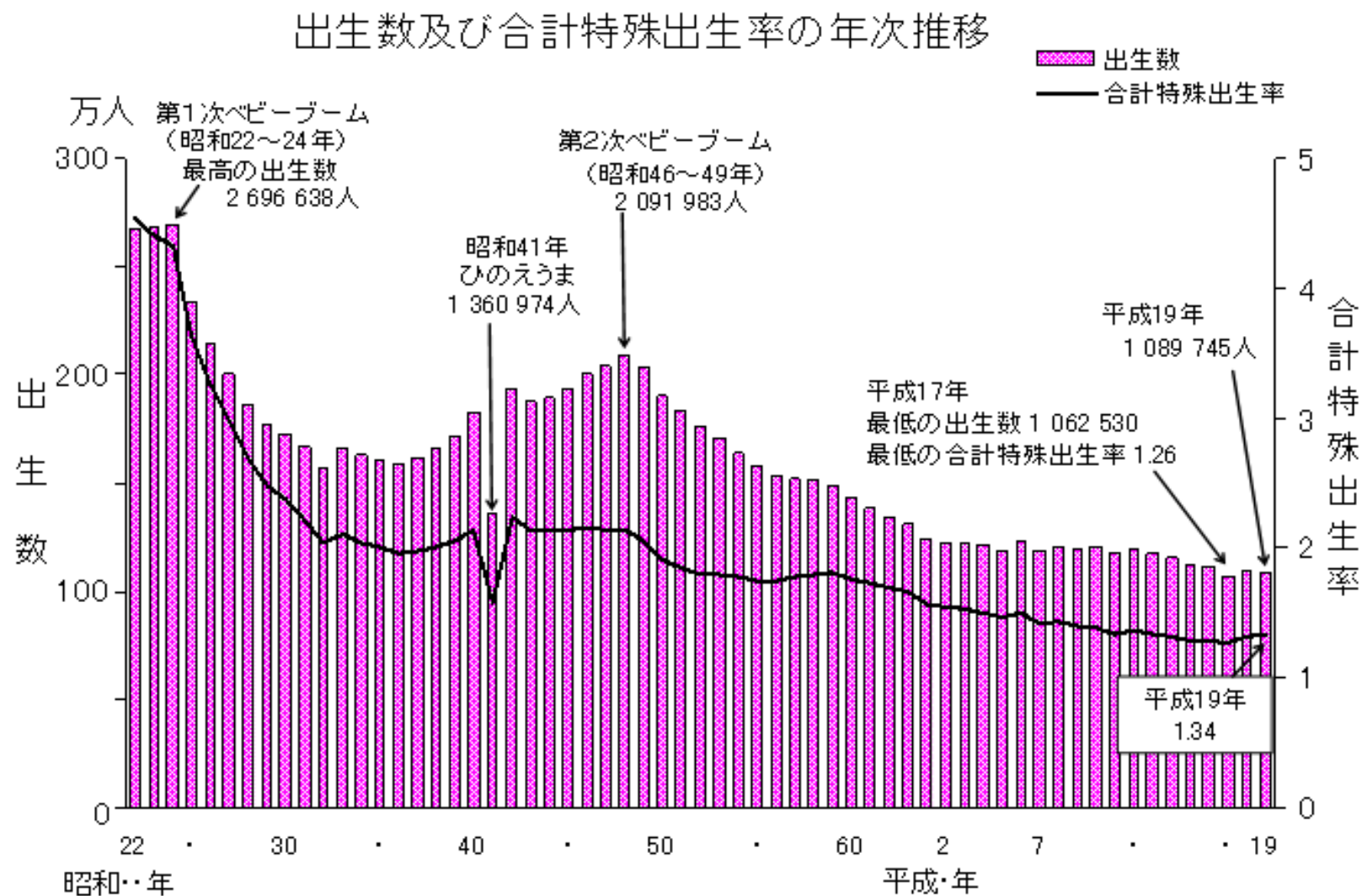
5-15 大人になることへの思い・将来の希望
将来の夢や目標を持っているか(小・中
学生)……………p94
早く大人になりたいか/なりたくない理由……………p95
人生目標(国際比較)……………p96
将来どのような仕事に就きたいか……………p97
将来の夢(国際比較)……………p98

6 その他

6-1 刑法犯少年・触法少年の推移……………p100・101

1 家族·世帯

1-1 出生数及び合計特殊出生率の年次推移



厚生労働省「人口動態統計」(平成19年)

合計特殊出生率とは、その年次の15～49歳までの女子の年齢別出生率を合計したもので、1人の女子が仮にその年次の年齢別出生率で一生の間に生むとしたときの子どもの数に相当する。

1-2 児童の有無・人数別世帯数（割合）の推移

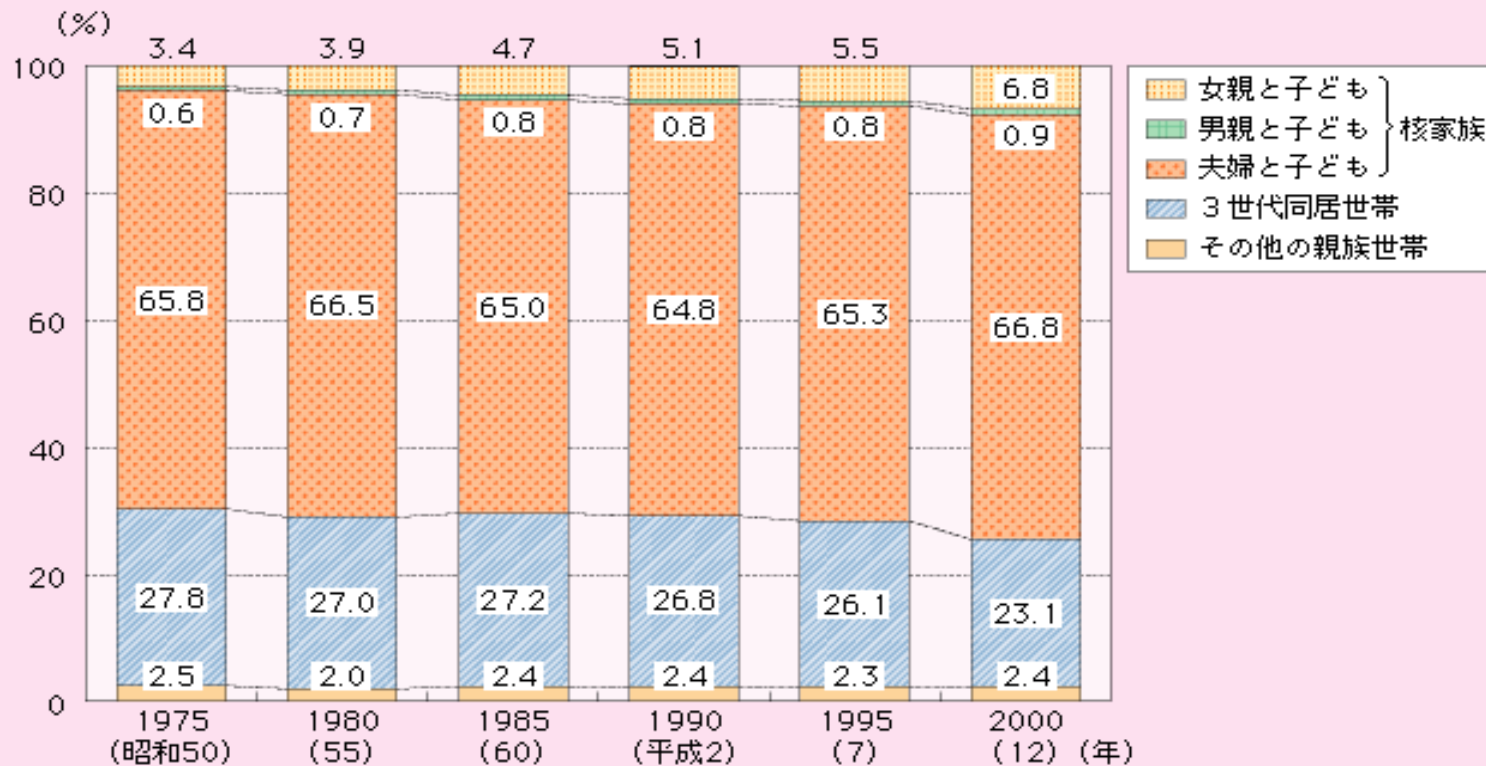
児童のいる世帯の全世帯数に占める割合は、3割弱。
児童のいる世帯の平均児童数は、1.7人強。

年次	総数	児童のいる世帯					児童のいない世帯	児童のいる世帯の平均児童数
		総数	1人	2人	3人	4人以上		
		推計数（単位：千世帯）						（単位：人）
平成12年（2000）	45,545 (100%)	13,060 (28.0%)	5,485 (12.0%)	5,588 (12.3%)	1,768 (3.9%)	219 (0.5%)	32,485 (71.3%)	1.75
13（2001）	45,664 (100%)	13,156 (28.8%)	5,581 (12.2%)	5,594 (12.2%)	1,750 (3.8%)	231 (0.5%)	32,508 (71.2%)	1.75
14（2002）	46,005 (100%)	12,797 (27.8%)	5,428 (11.8%)	5,471 (11.9%)	1,683 (3.7%)	214 (0.5%)	33,208 (72.2%)	1.74
15（2003）	45,800 (100%)	12,947 (28.3%)	5,540 (12.1%)	5,596 (12.2%)	1,611 (3.5%)	200 (0.4%)	32,853 (71.7%)	1.73
16（2004）	46,323 (100%)	12,916 (27.9%)	5,510 (11.9%)	5,667 (12.2%)	1,533 (3.3%)	206 (0.4%)	33,407 (72.1%)	1.73
17（2005）	47,043 (100%)	12,366 (26.3%)	5,355 (11.4%)	5,323 (11.3%)	1,480 (3.1%)	208 (0.4%)	34,677 (73.7%)	1.72
18（2006）	47,531 (100%)	12,973 (27.3%)	5,648 (11.9%)	5,552 (11.7%)	1,577 (3.3%)	196 (0.4%)	34,558 (72.7%)	1.72

資料：厚生労働省「平成18年国民生活基礎調査」

1-3 児童のいる世帯における世帯類型別割合の推移

ひとり親家庭の割合が増加傾向にある(昭和50年～平成12年)。



資料：総務省統計局「国勢調査」より内閣府で作成

注1：児童とは、18歳未満の親族(子ども)のことである。

注2：3世代同居世帯とは、「夫婦・子どもと両親との世帯」、「夫婦・子どもと片親との世帯」、「夫婦・子ども・親と他の親族との世帯」、「夫婦・子どもと他の親族との世帯」の合計と定義する。

1-4 父母の有無・同居別居別にみた児童の状況

約1割の児童は、母若しくは父がいない又は同居していない状況にある(平成16年)。

父母の有無・同居別	平成6年	平成11年	平成16年
	児童数の構成割合	児童数の構成割合	児童数の構成割合
父母ともいる	95.4%	94.7%	92.6%
父母とも同居	92.8%	91.9%	89.5%
父同居・母別居	0.4%	0.4%	0.6%
父別居・母同居	2.1%	2.2%	2.4%
父母とも別居	0.1%	0.1%	-
母がいない	0.8%	0.9%	1.2%
父同居	0.7%	0.9%	1.2%
父別居	0.1%	-	-
父がいない	3.8%	4.4%	6.0%
母同居	3.6%	4.4%	6.0%
母別居	0.2%	-	0.0%
父母ともいない	0.1%	0.0%	0.1%

注) 「総数」には「不詳」を含む。

平成16年度調査対象世帯数: 1376世帯

資料: 厚生労働省 平成16年度全国家庭児童調査

1-5 父母とも同居している世帯の就労状況 (共働き・片働き等)

父母とも就労している(共働き)の世帯の構成割合は増加傾向にある。

父母の就労状況	平成6年	平成11年	平成16年	
	世帯数の構成割合	世帯数の構成割合	世帯数の構成割合	1世帯当たり平均児童数
総数	100.0%	100.0%	100.0 %	1.80人
父母とも就労している(共働き)	49.1%	51.6 %	54.3%	1.81人
父が就労している	49.2%	47.7%	43.6%	1.79人
母が就労している				
(片働き)	0.2%	0.4%	0.7%	1.25人
父母は就労していない	0.3%	0.3%	0.2%	2.00人
不詳	1.1%		1.2%	

注) 「就労している(働いている)」とは、「会社・団体等の役員」、「一般常雇者」、「1年未満の契約の雇用者」、「自営業・その他」のこと。

1-6 児童のいる世帯の1世帯当たり平均所得金額等

児童のいる世帯1世帯当たりの平均所得金額は、児童が1人の世帯で年間約668万円、児童が2人の世帯で年間約733万円、児童が3人以上の世帯では年間約816万円となっている。

児童の有無 児童数	1世帯当たり 平均所得金額	1世帯当たり 平均可処分所得金額	世帯人員1 人当たり平均 所得金額	有業人員1人 当たり平均稼 働所得金額	平均 世帯人員	平均 有業人員
児童のいる世帯	718.0万円	579.6万円	165.7万円	363.5万円	4.33人	1.80人
1人	667.6万円	541.1万円	182.6万円	340.0万円	3.66人	1.79人
2人	732.8万円	595.4万円	164.2万円	390.8万円	4.46人	1.73人
3人以上	815.5万円	643.5万円	139.3万円	353.7万円	5.85人	2.04人

(参考1)

児童のいない世帯	507.8万円	403.9万円	235.3万円	297.3万円	2.16人	1.21人
----------	---------	---------	---------	---------	-------	-------

(参考2)

総数	563.8万円	448.5万円	205.9万円	320.6万円	2.74人	1.36人
----	---------	---------	---------	---------	-------	-------

注) :所得は、平成17年1年間の所得である。

(厚生労働省「平成18年国民生活基礎調査」)

1-7 生活保護の保護率の推移（0～14歳）

平成18年における被保護率（0～14歳）は、平成7年の2倍近くとなっている。

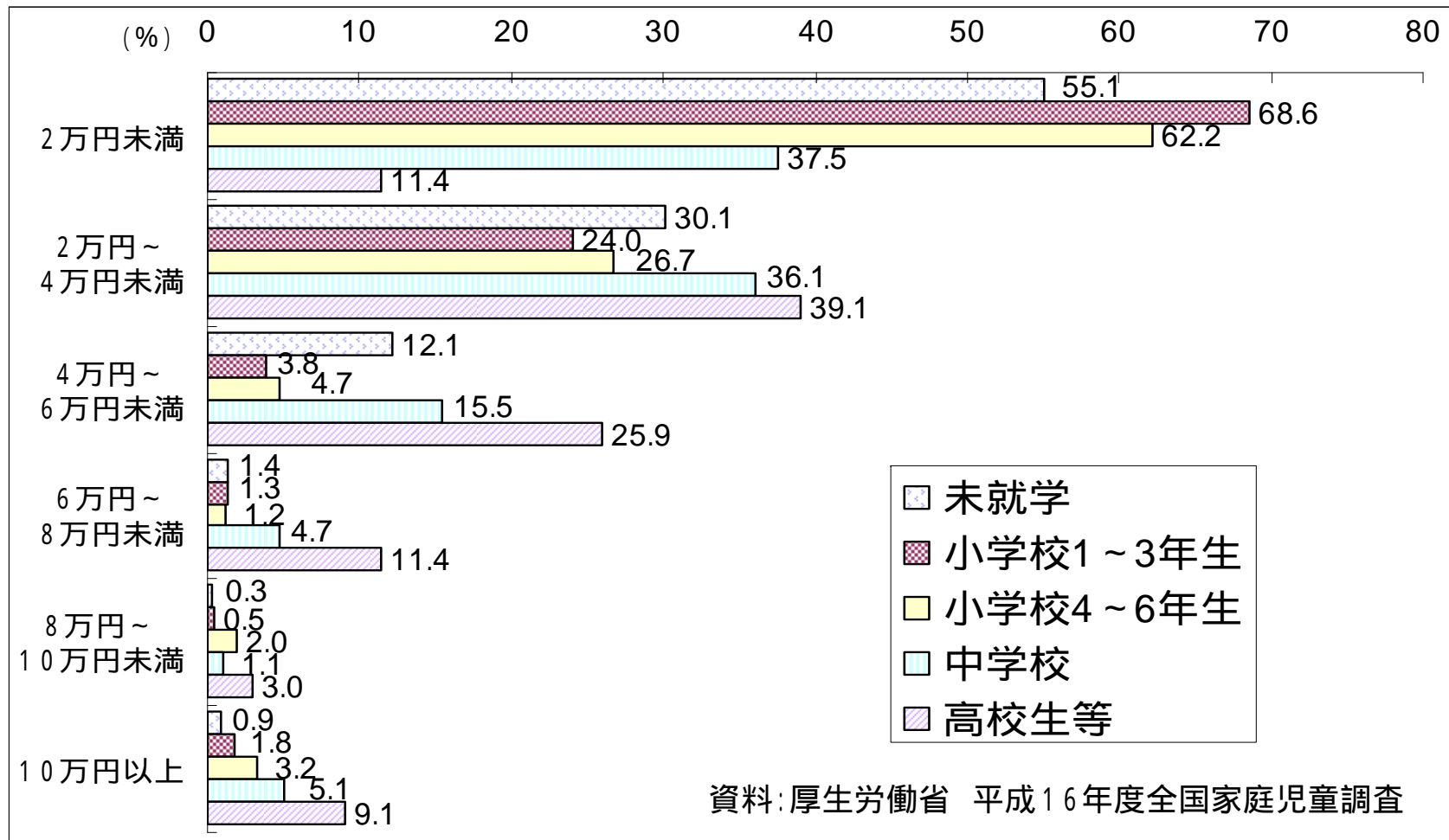
	0～14歳の保護率	【参考】 全年齢の保護率
平成7年	5.55 ‰	6.82 ‰
平成12年	6.96 ‰	8.13 ‰
平成17年	10.36 ‰	11.22 ‰
平成18年	10.41 ‰	11.54 ‰

各年7月1日現在

厚生労働省「被保護者全国一斉調査結果報告書」

1-8 1ヶ月にかかる養育費（平成16年11月）

18歳以下の子どもの養育費は、概ね子どもの年齢が上がるほど高額になる。



注) 1. 「高校生等」とは「高校生」、「各種学校・専修学校・職業訓練校の生徒」の合計である。

2. 養育費とは教育費、保育料、医療費、小遣いの合計である。

1-9 幼児・児童・生徒一人当たりの学習費年額

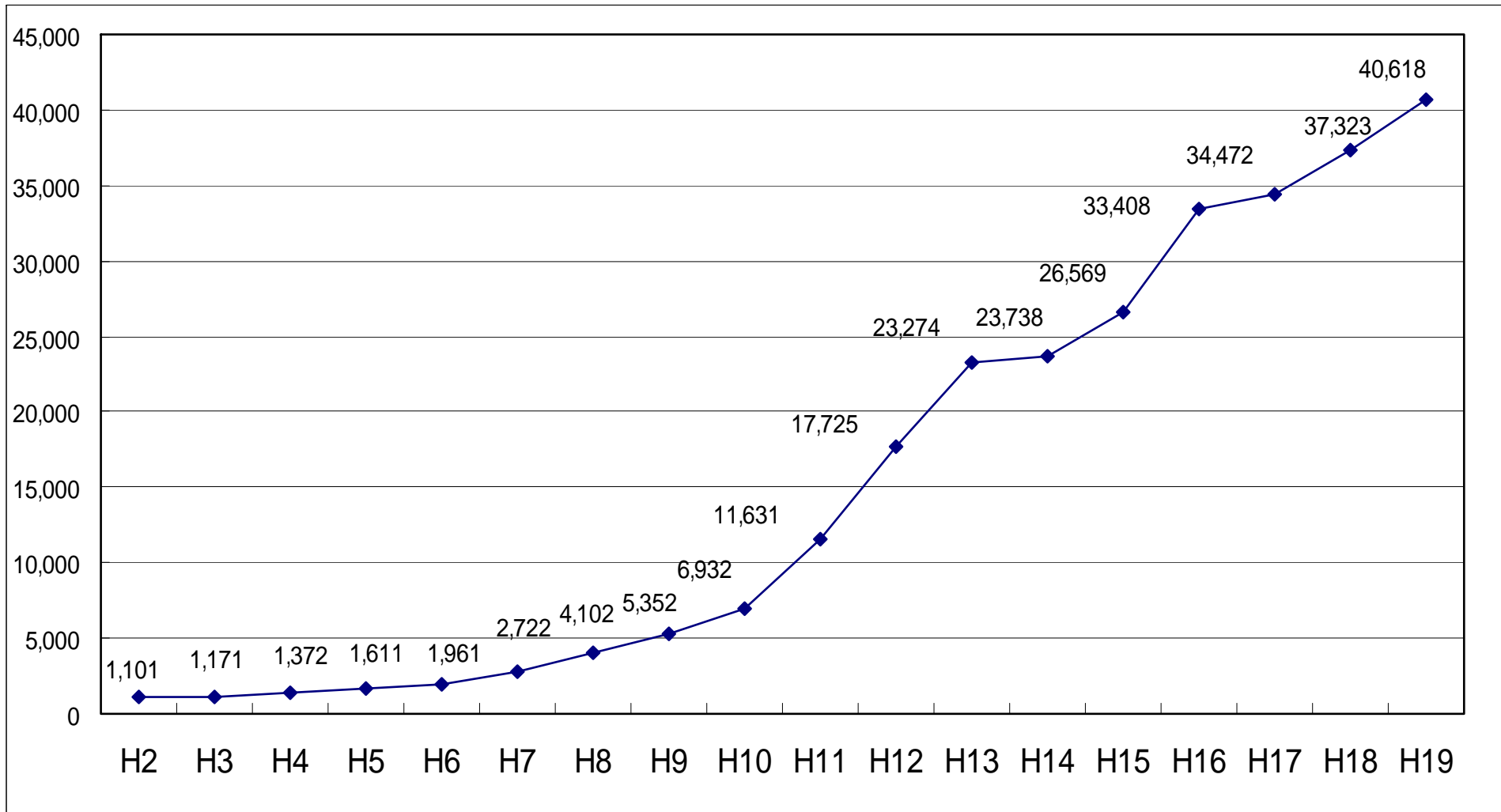
1年間にかかる子どもの1人当たりの学習費総額は、公立小学校の児童で約33万円、公立中学校の生徒で約47万円、公立高校の生徒で約52万円、また、私立高校の生徒では約105万円となっている。

区分		学習費総額	(単位:円)		
			学校教育費	学校給食費	学校外活動費
幼稚園	公立	251,324円	133,346円	14,390円	103,588円
	私立	538,406円	368,392円	25,153円	144,861円
小学校	公立	334,134円	56,655円	40,937円	236,542円
	私立	1,373,184円	780,001円	30,843円	562,340円
中学校	公立	471,752円	133,183円	36,563円	302,006円
	私立	1,269,391円	957,893円	7,254円	304,244円
高等学校 (全日制)	公立	520,503円	343,922円	-	176,581円
	私立	1,045,234円	785,289円	-	259,945円

注) 「学校外活動費」とは、家庭内学習費、学習塾費、体験活動費、芸術文化活動費等の合計である。

1-10 児童相談所における児童虐待相談処理件数

児童虐待相談処理件数は年々増加しており、特にこの10年で急増した。



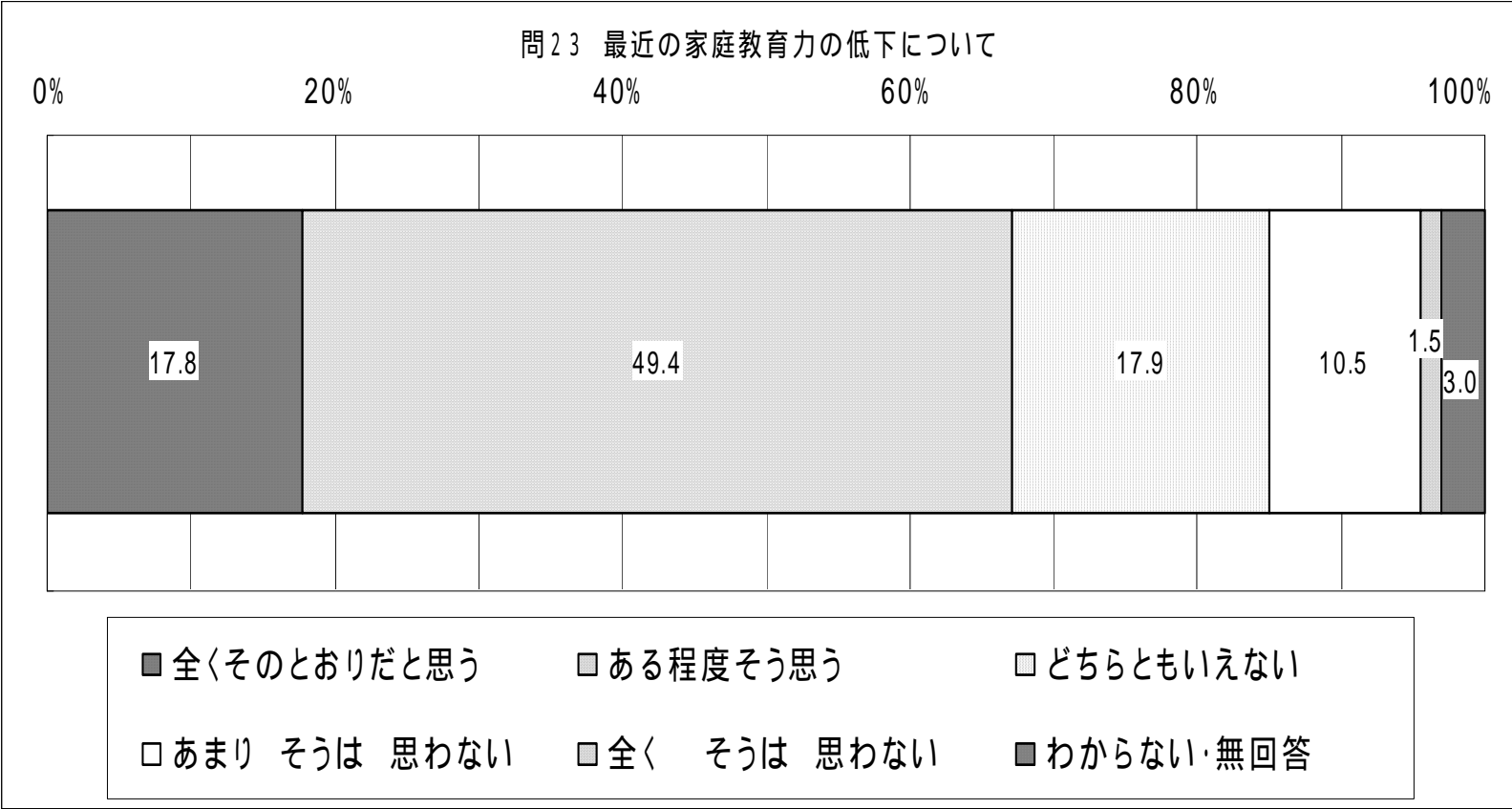
2 家庭の教育力

【2-1 家庭の教育力低下に対する認識】

家庭の教育力低下についての実感

1) 単純集計

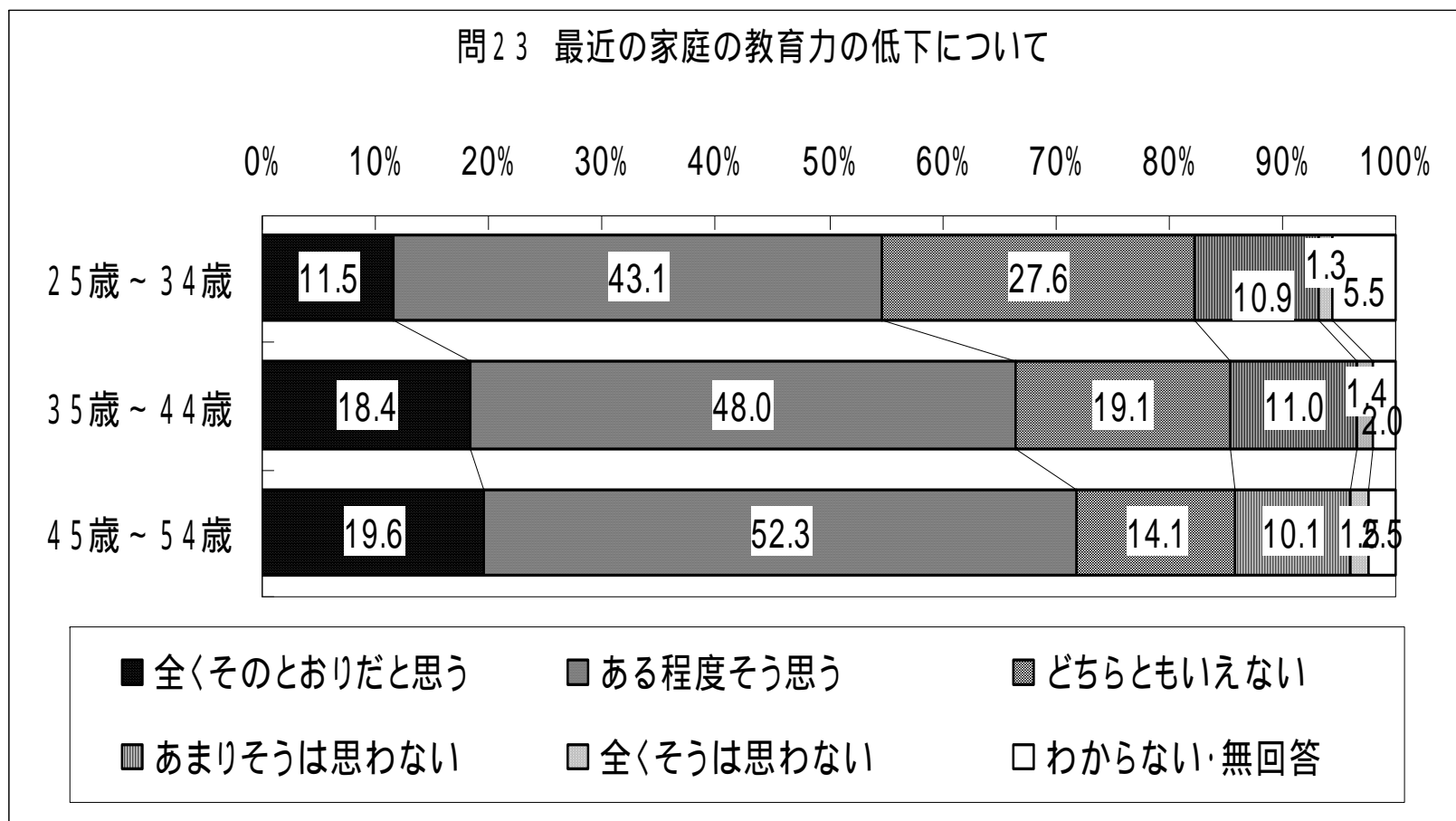
約7割の親が家庭の教育力が低下していると実感。



文部科学省委託研究「家庭の教育力再生に関する調査研究」(平成13年度)
調査対象:子どもと同居する親のうち、25～54歳の男女3,859人

2) 世代別集計

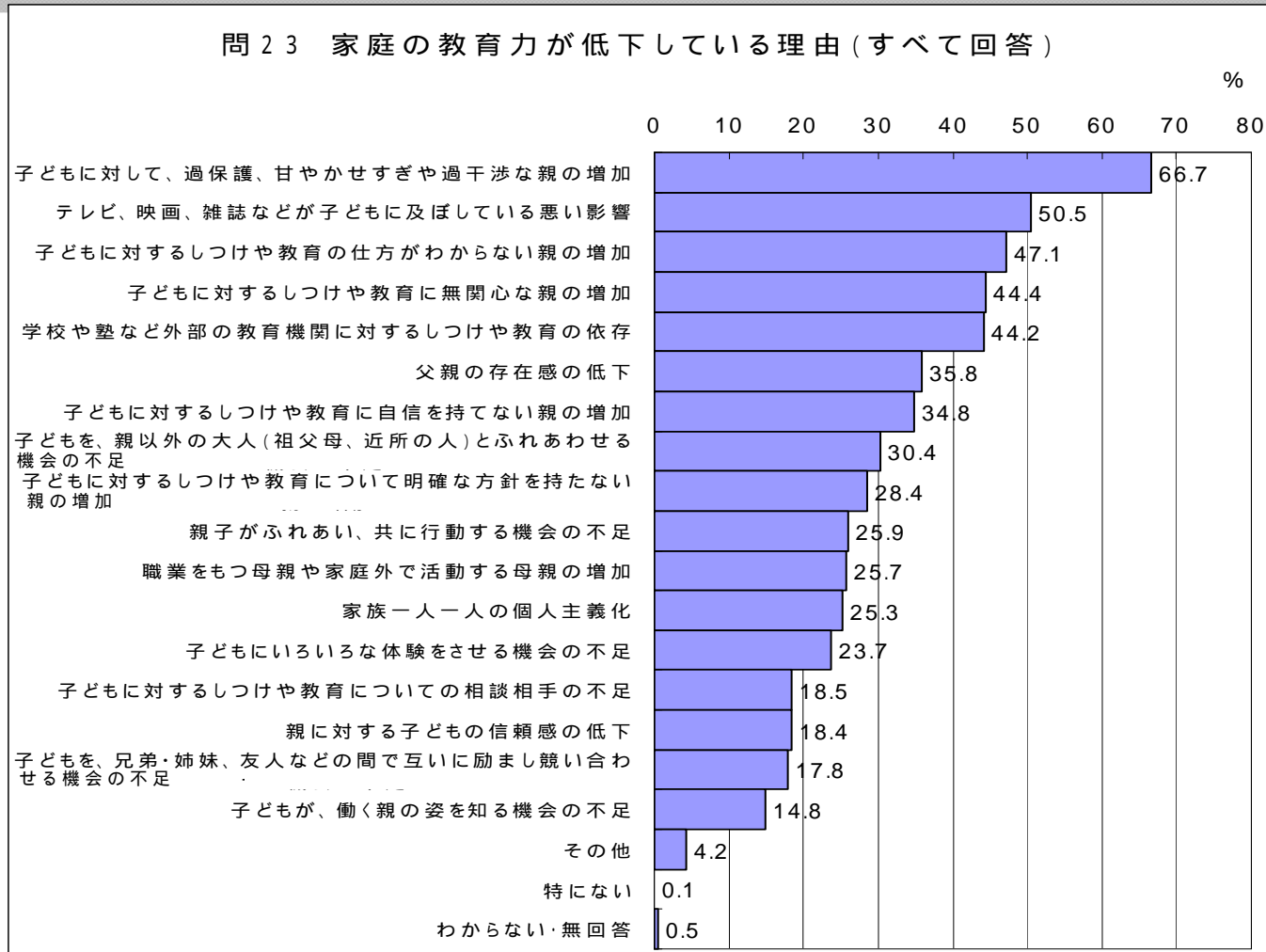
年齢の高い世代の方が家庭の教育力低下を実感する割合が多い。



【2-1 家庭の教育力低下に対する認識】

家庭の教育力が低下している理由

家庭の教育力低下を感じる理由として、過保護、甘やかせすぎや過干渉な親の増加を挙げるものが最も多い。



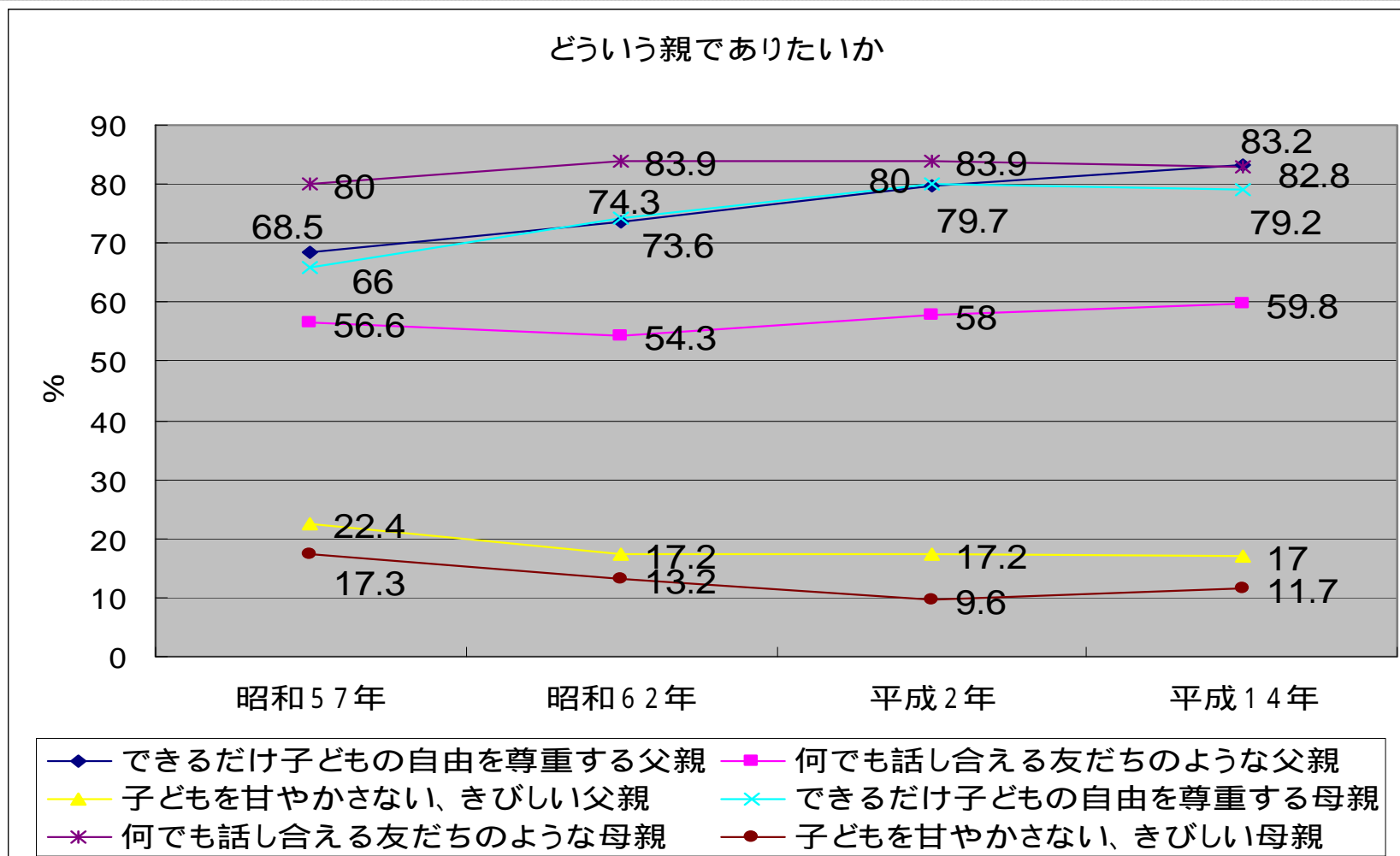
文部科学省委託研究「家庭の教育力再生に関する調査研究」(平成13年度)

調査対象:子どもと同居する親のうち、25～54歳の男女3,859人

【2-2 親の意識】

どういった親でありたいか

できるだけ子どもの自由を尊重する親でありたいと考えている保護者が増えている。

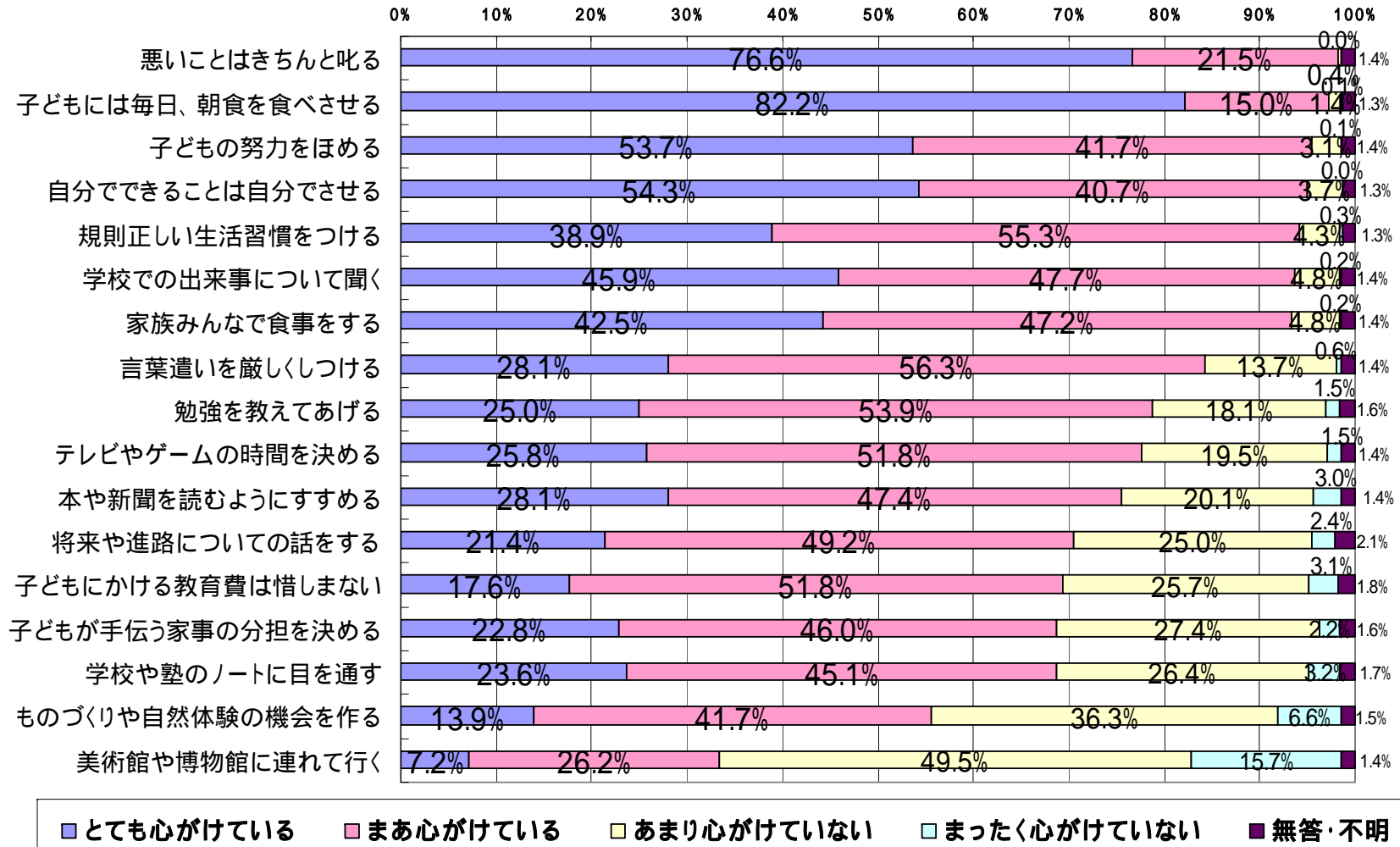


NHK放送文化研究所「中学生・高校生の生活と意識調査」(平成15年)

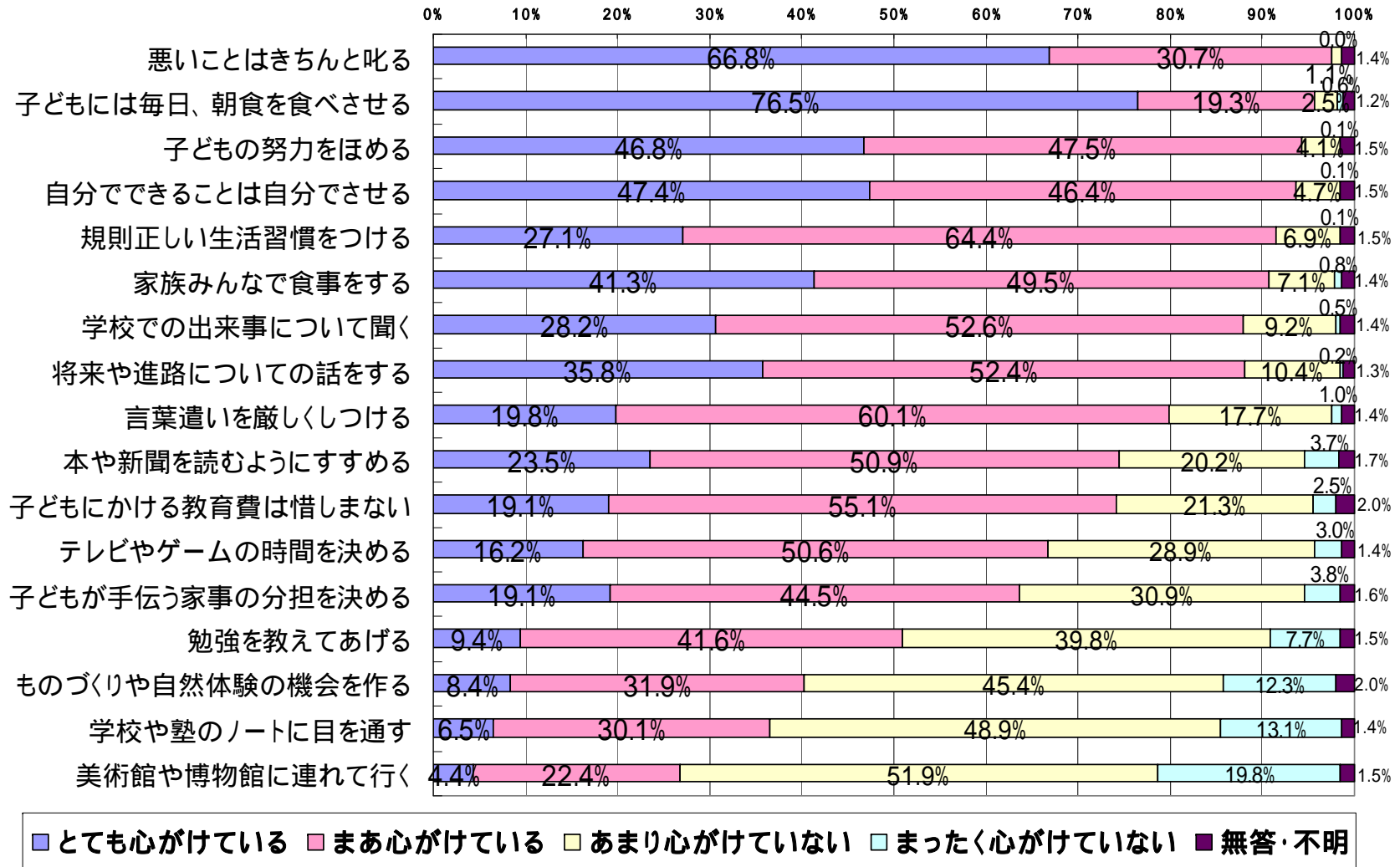
【2-2 親の意識】

家庭教育で心がけていること

家庭教育で心がけていること(小学生保護者)



家庭教育で心がけていること(中学生保護者)



文部科学省「義務教育に関する意識調査」(平成17年度)

調査対象は、全国の小1～中3生をもつ保護者6,742人

2-3 親の子どもへの期待(国際比較)

親の子どもへの期待「強く期待する」割合

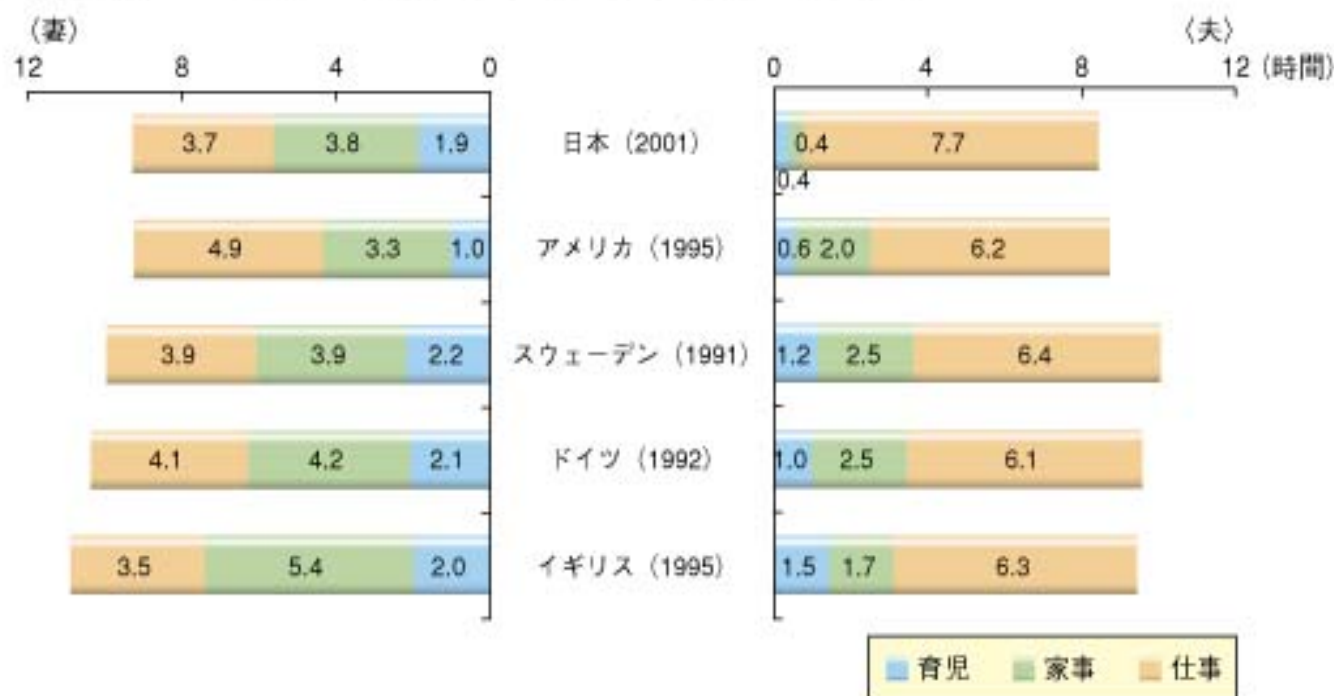
	日本	アメリカ	フランス	スウェーデン	韓国	タイ
1位	自分の意見をハッキリ言う (69.3%)	困っている人を助ける(79.6%)	親の言うことを素直に聞く (80.1%)	困っている人を助ける(80.6%)	自分の人生の目標を持つ (64.2%)	男らしく、女らしくする(59.5%)
2位	他人と協調できる (67.9%)	親の言うことを素直に聞く (75.2%)	自分の人生の目標を持つ (74.7%)	他人と協調できる (78.2%)	自分の意見をハッキリ言う(59.0%)	他人と協調できる(53.6%)
3位	困っている人を助ける(67.3%)	学校で良い成績を取る(72.7%)	学校で良い成績をとる(70.1%)	自分の人生の目標を持つ (74.2%)	他人と協調できる(55.8%)	親の言うことを素直に聞く (52.5%)
4位	自分の人生の目標を持つ (56.6%)	他人と協調できる(72.1%)	他人と協調できる(64.2%)	自分の意見をハッキリ言う (70.2%)	リーダーシップがとれる (54.9%)	困っている人を助ける(43.8%)
5位	男らしく、女らしくする(35.1%)	自分の人生の目標を持つ (69.8%)	自分の意見をハッキリ言う (54.3%)	親の言うことを素直に聞く (59.6%)	困っている人を助ける(54.6%)	リーダーシップがとれる (38.9%)
6位	親の言うことを素直に聞く (29.6%)	リーダーシップがとれる (65.6%)	困っている人を助ける(48.8%)	学校でよい成績をとる(45.9%)	男らしく、女らしくする(46.7%)	自分の人生の目標を持つ (38.6%)
7位	リーダーシップがとれる (21.4%)	自分の意見をハッキリ言う (65.0%)	男らしく、女らしくする(39.2%)	リーダーシップがとれる (21.7%)	親の言うことを素直に聞く (36.6%)	自分の意見をハッキリ言う (35.2%)
8位	学校でよい成績を取る (11.9%)	男らしく、女らしくする(62.2%)	他人との競争に勝てる (36.1%)	男らしく、女らしくする(11.5%)	他人との競争に勝てる (29.5%)	学校でよい成績をとる(28.9%)
9位	他人との競争に勝てる (11.5%)	他人との競争に勝てる (33.6%)	リーダーシップがとれる (33.6%)	他人との競争に勝てる(8.4%)	学校で良い成績をとる(21.5%)	他人との競争に勝てる (21.6%)

【2-4 育児・家事時間、子どもと接する時間】

夫婦の育児・家事時間(国際比較)

各国に比べ夫婦の育児時間の差が大きい。

育児期にある夫婦の育児、家事及び仕事時間の各国比較



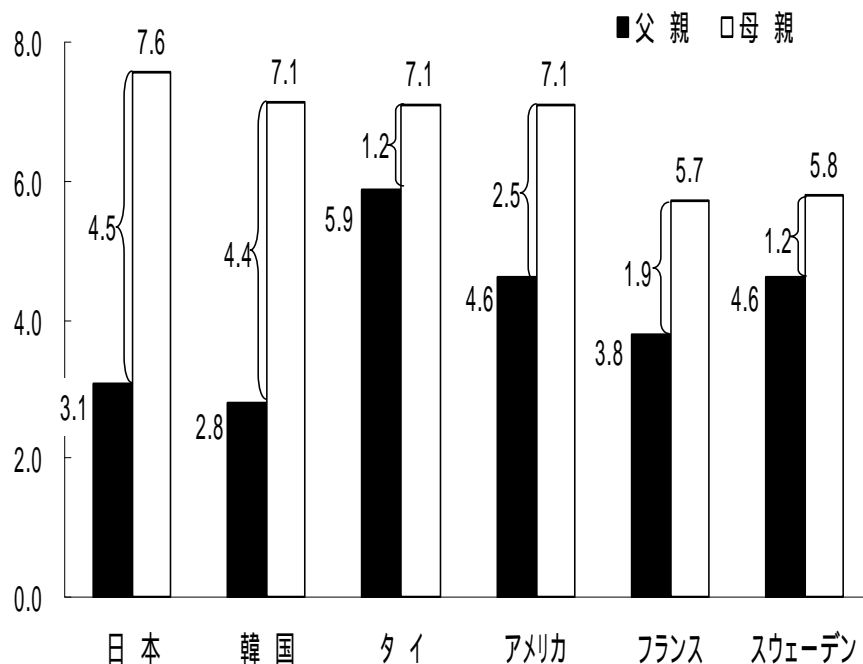
- (備考) 1. OECD [Employment outlook 2001]、総務省「社会生活基本調査」(平成13年)より作成
2. 5歳未満(日本は6歳未満)の子供のいる夫妻の育児、家事労働及び稼働労働時間
3. 妻はフルタイム就業者(日本は有業者)の値、夫は全体の平均値
4. 「家事」は、日本以外については[Employment outlook 2001]における「その他の無償活動」
5. 日本については「社会生活基本調査」における「家事」、「介護・看護」及び「買い物」の合計の値であり、日本以外の「仕事」は、[Employment outlook 2001]における「稼働労働」の値

【2-4 育児・家事時間、子どもと接する時間】

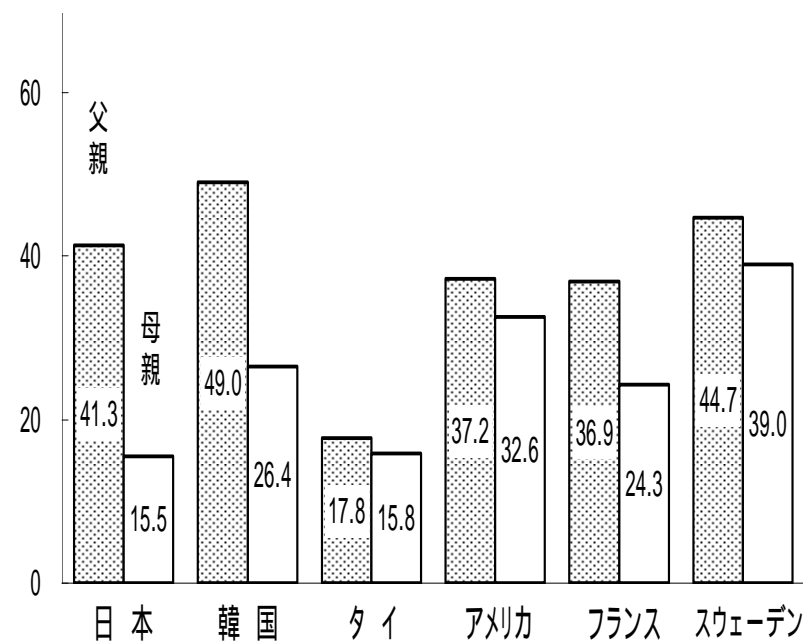
父母が子どもと接する時間(国際比較)

日本の父親は、1日平均3.1時間しか子どもと一緒に過ごしていない。
(父親と母親の接触時間の差が4時間台と大きい。)

父親が子どもと接する時間(国際比較)



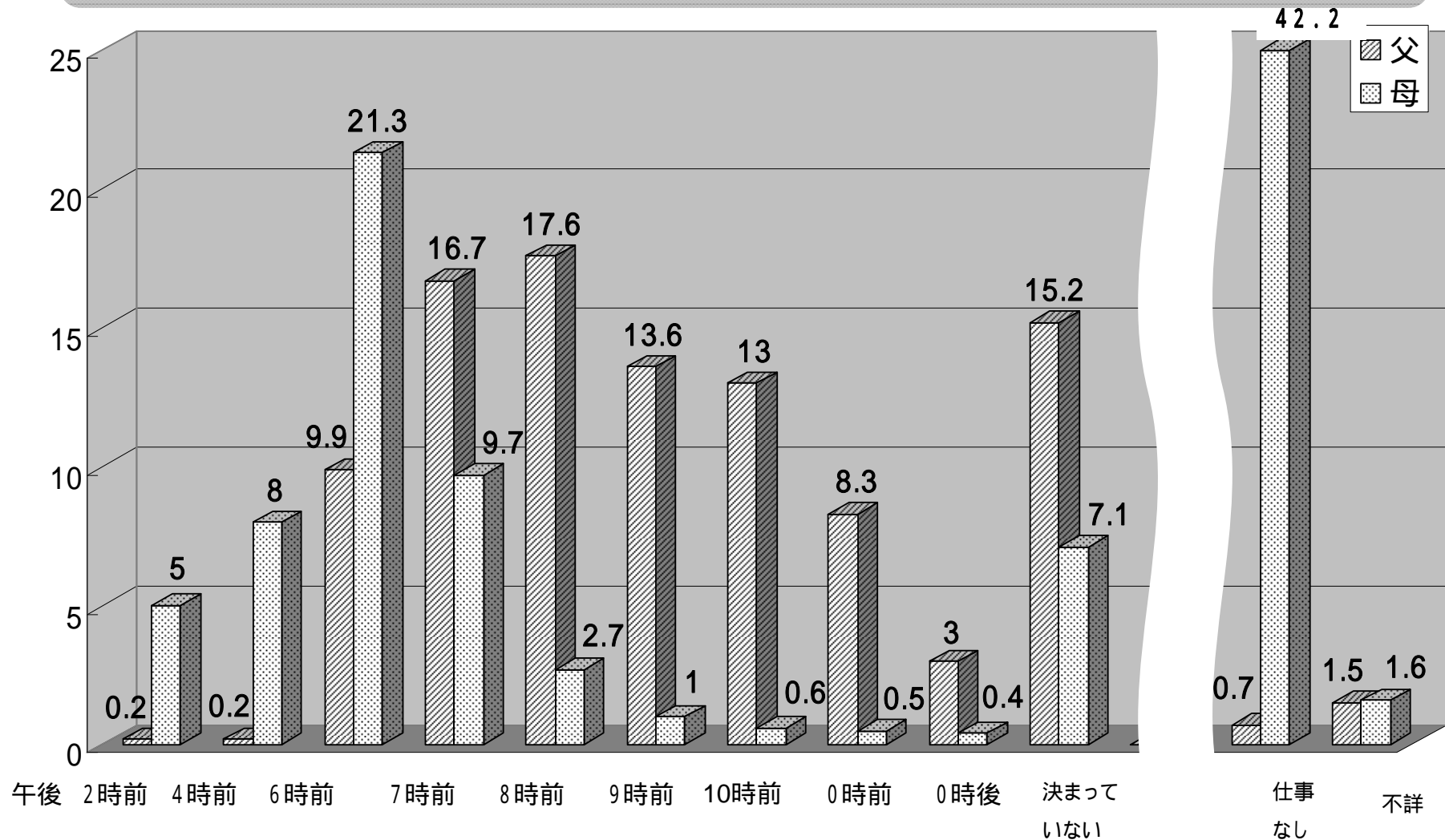
「子どもと接する時間が短い」と考える父親の割合(国際比較)



【2-4 育児・家事時間、子どもと接する時間】

父母の仕事からの帰宅時間

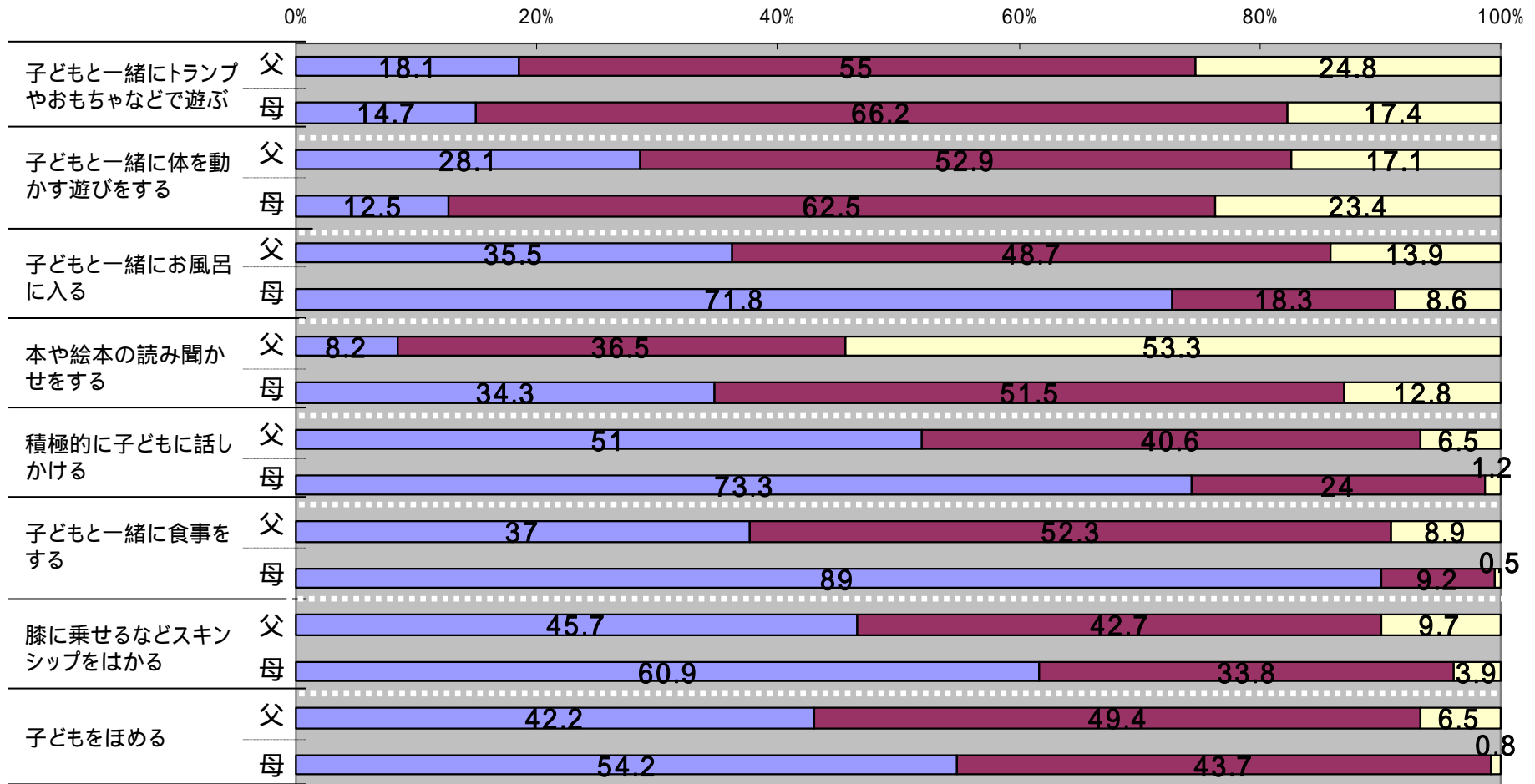
父母の仕事からの帰宅時間の状況については、父では「8時前」が17.6%と最も多く、母では「6時前」が21.3%と最も多い。



【2-5 子どもとの接し方・一緒にすること】

未就学児の父母の子どもとの接し方

子どもと一緒にすることのうち、「トランプやおもちゃなどでの遊び」、「体を動かす遊び」は、父の方が「よくしている」が、その他の育児等は、いずれも母の方が「よくしている」。



■ よくしている

■ できるだけするようにしている

□ していない

厚労省「第6回21世紀出生児縦断調査」
(平成18・19年)

【2-5 子どもとの接し方・一緒にすること】

子どもたちとよく一緒にすること

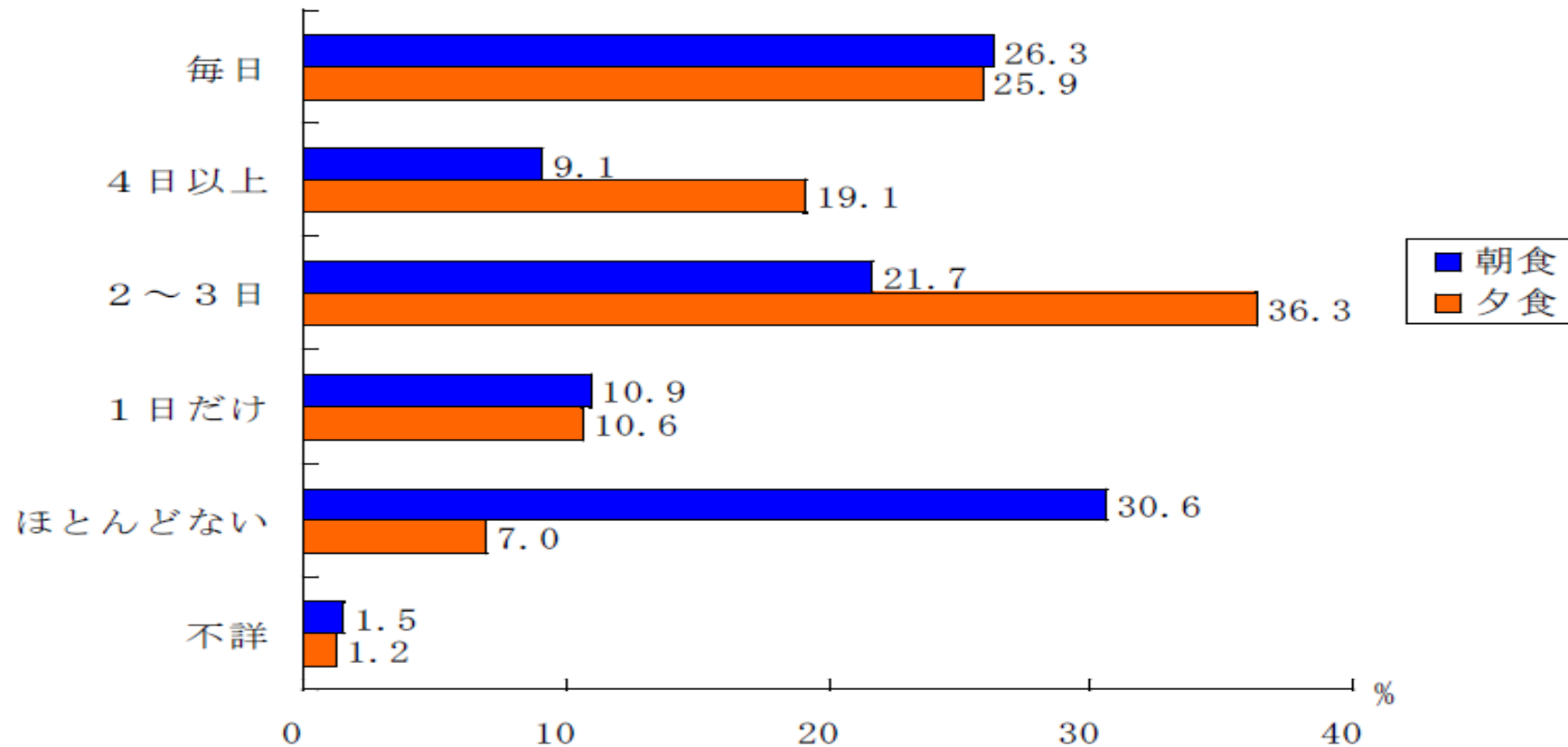
「デパートやスーパーへ買い物に行く」が86.4%と最も多い。

一緒にすること	総数	未就学	小学校 1～3年生	小学校 4～6年生	中学生	高校生 等	就職・ その他
デパートやスーパーなどへ買い物に行く	86.4	93.9	89.5	88.6	81.2	71.0	37.5
テレビを見て、話し合ったりする	75.7	64.8	79.9	80.6	83.7	77.0	62.5
外へ出て、食事をする	62.7	65.0	67.7	61.9	61.5	54.3	37.5
勉強を見てやる	53.4	42.4	82.7	68.9	48.3	27.4	-
室内でゲームやごっこ遊びをする	50.4	81.0	62.1	45.8	24.3	9.5	25.0
散歩やボール遊びなどをする	49.5	80.6	56.0	44.4	23.8	14.8	-
家業の手伝いをさせ、一緒に仕事をする	42.3	36.0	52.0	50.2	42.7	32.5	50.0
お話を聞かせたり、本を読んでその感想を話し合ったりする	42.0	74.5	51.8	29.9	16.7	8.8	-
ケーキ作りや料理をする	39.6	36.4	47.1	47.7	40.4	26.2	-
旅行やハイキング、魚釣りなどに出かける	36.0	33.6	46.8	44.2	32.0	22.7	-
絵を描いたり、物をつくったり編み物などをする	32.1	54.5	36.8	27.1	14.0	8.5	12.5
音楽を聞いたり、演奏や合唱・カラオケをする	31.0	37.5	30.9	31.3	27.2	21.8	12.5
映画や観劇、音楽会へ行く	30.7	20.3	38.2	40.4	32.6	29.3	-
家族会議を開いて、一緒に仕事をする	13.6	9.8	16.4	19.4	13.6	11.4	-
一緒にスポーツクラブに入るなど計画的にスポーツをする	11.1	7.5	15.5	17.3	10.9	6.0	-
その他	4.3	6.1	2.8	3.5	3.3	4.4	-
特に一緒にすることはない	5.2	1.2	3.0	4.0	7.9	14.5	25.0
不詳	0.8	0.3	0.9	1.6	0.6	1.3	

2-6 一週間のうち、家族揃って食事をする日数

家族揃って一緒に朝食を食べる日数は、「ほとんどない」が30.6%と最も多く、
家族揃って一緒に夕食を食べる日数は、「2～3日」が36.3%と最も多い。

一週間のうち、家族そろって一緒に食事（朝食及び夕食）をする日数（平成16年）

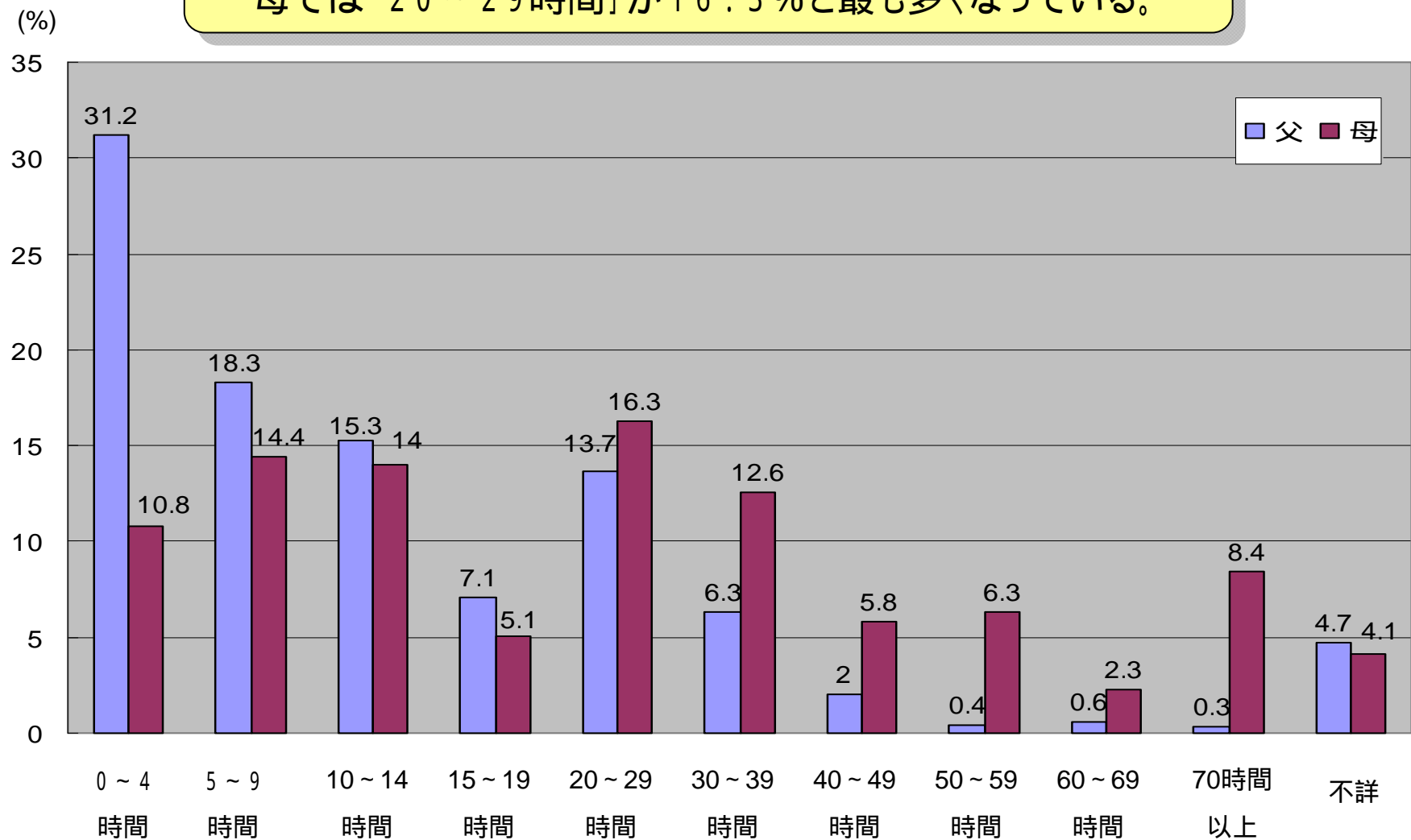


調査対象総数: 1376世帯

厚労省「平成16年度全国家庭児童調査」

2-7 父母と子どもたちとの会話時間（1週間あたり）

父では「0～4時間」が31.2%と最も多く、
母では「20～29時間」が16.3%と最も多くなっている。

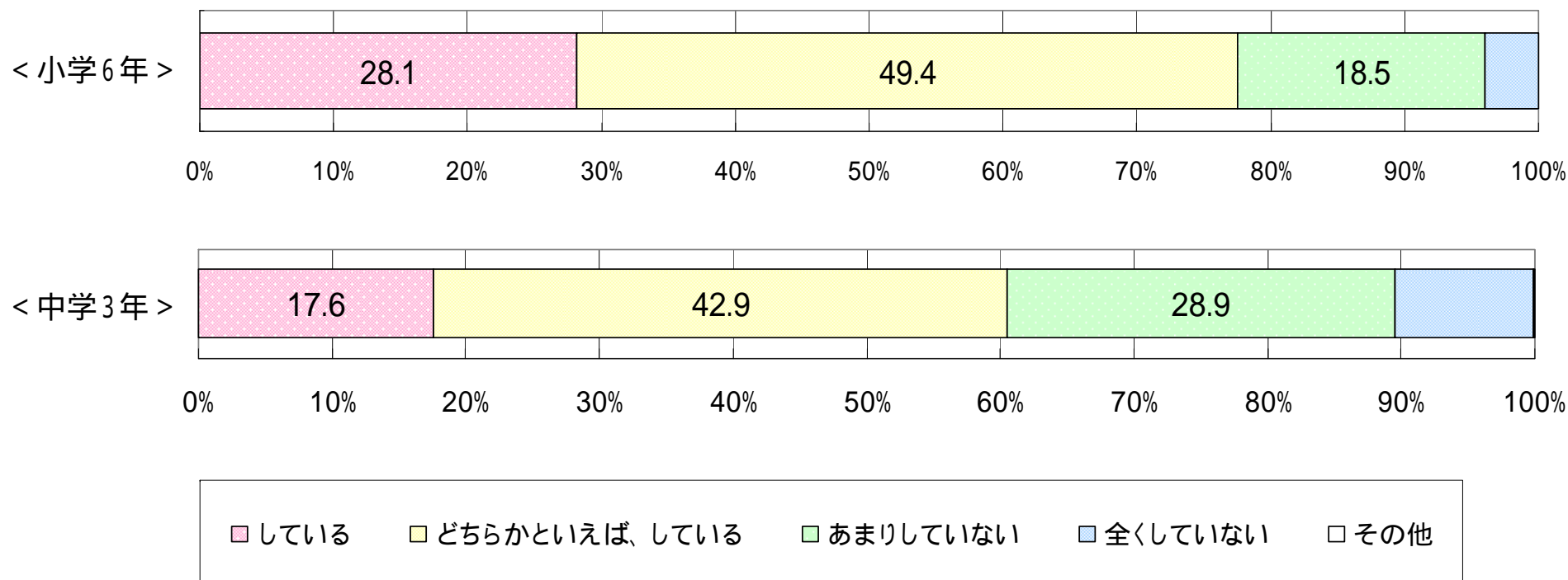


調査対象総数: 父 1,223人 / 母 1,323人

厚労省「平成16年度全国家庭児童調査」

2-8 家で手伝いをしている子どもの割合（小・中学生）

家で手伝いを「している」とする割合は、小学6年で28.1%、中学3年で17.6%、
「どちらかといっている」とする割合は、小学6年で49.4%、中学3年で42.9%

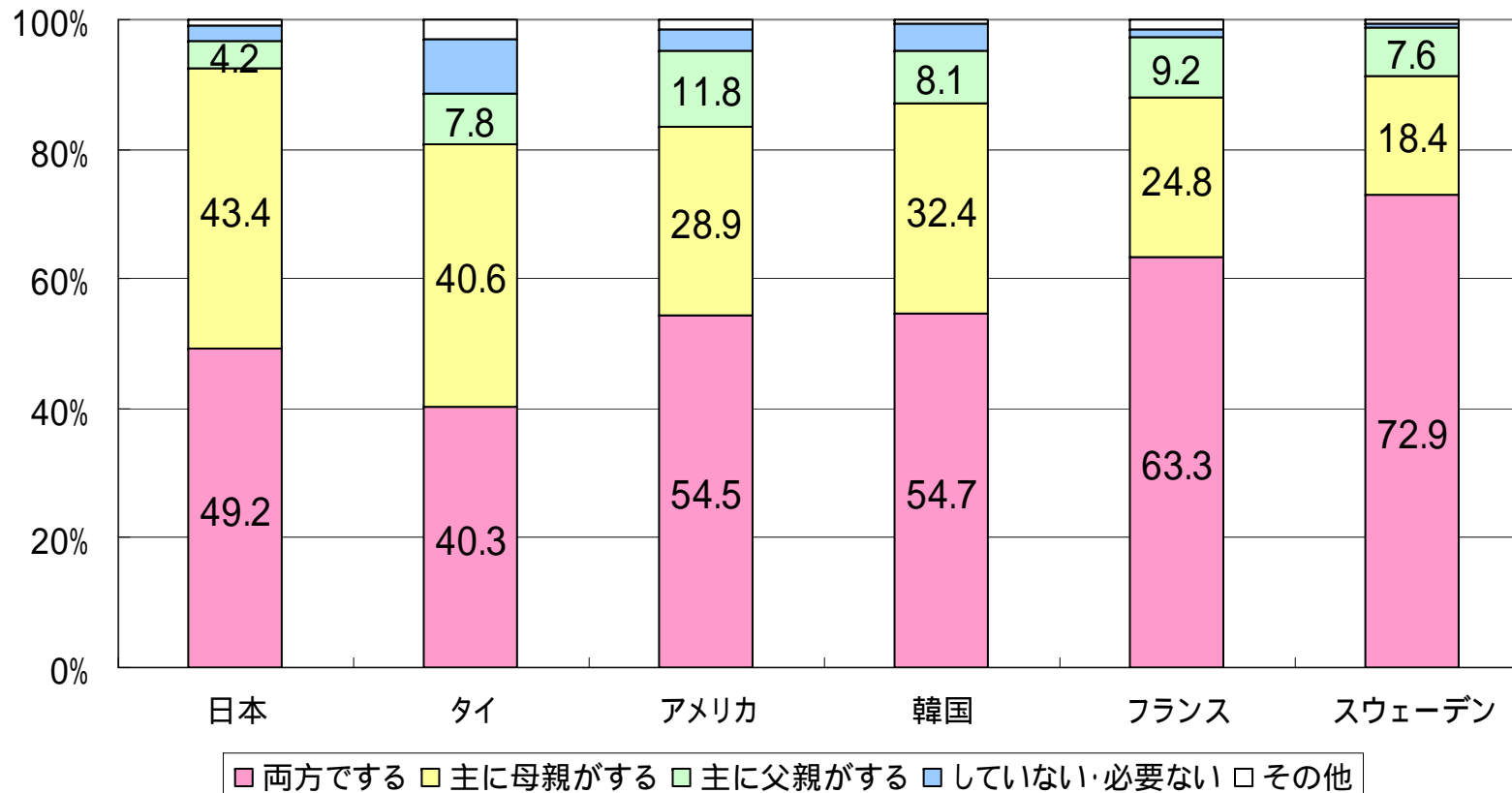


資料：文部科学省 平成20年度 全国学力・学習状況調査

【2-9 しつけの状況】

父母の子育て役割分担：しつけをする

日本では、子どものしつけについて、主に母親が担う傾向にある。



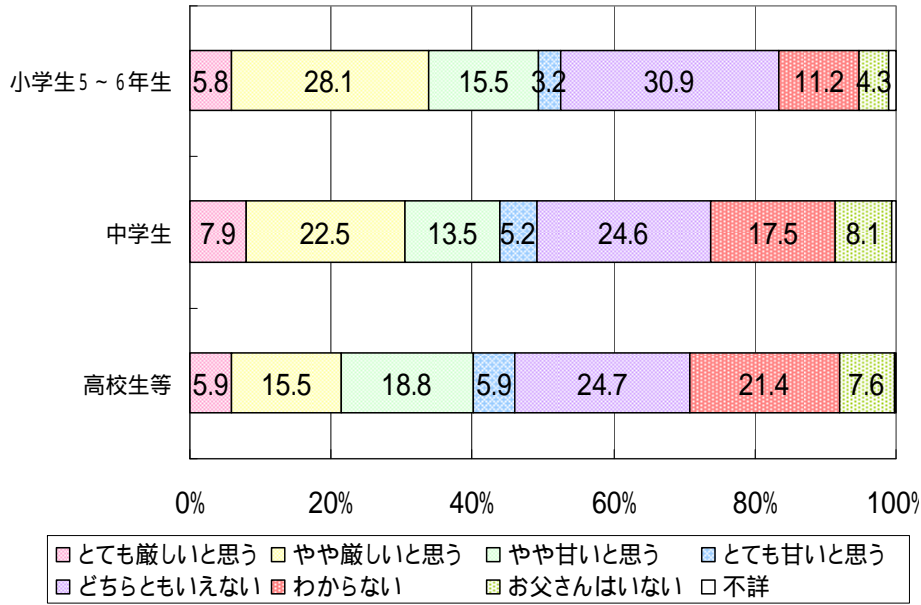
資料；(独)国立女性教育会館 「平成16年度・17年度家庭教育に関する国際比較調査報告書」

【2-9 しつけの状況】

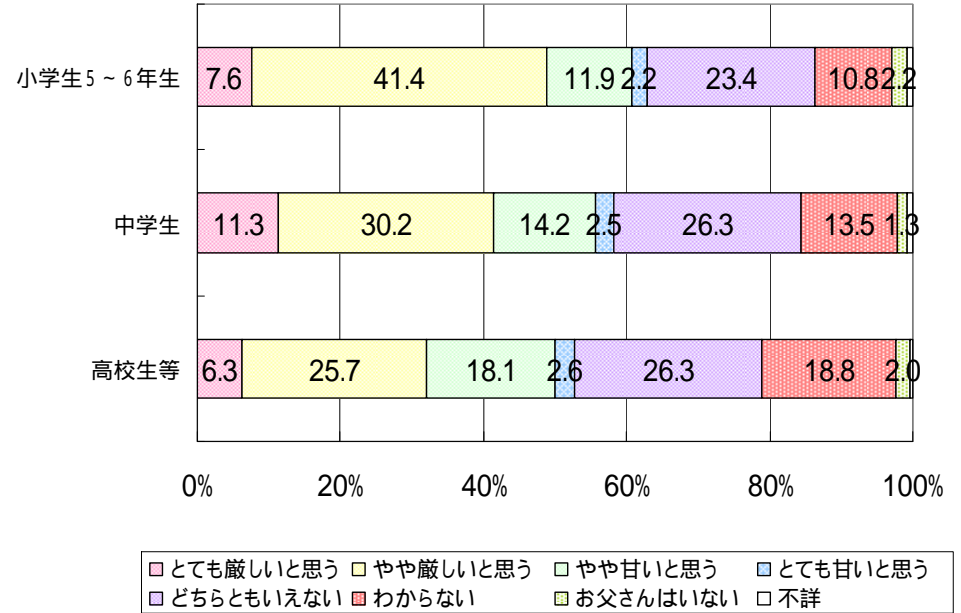
父母のしつけについてどう思っているか

父母のしつけについて子どもがどう思っているかの状況を見ると、父では「どちらともいえない」が、母では「やや厳しいと思う」が最も多い。

【父親】



【母親】

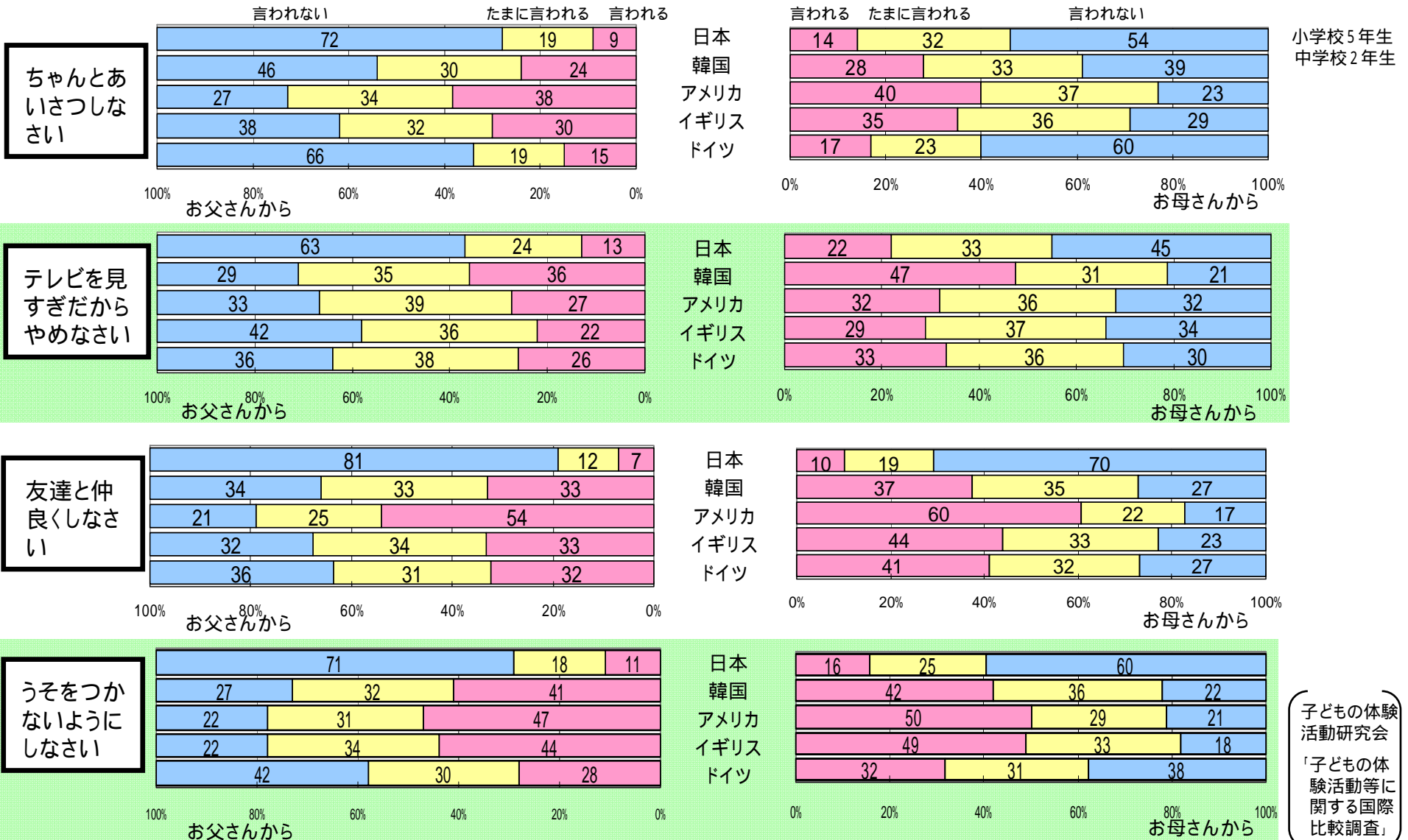


資料:厚生労働省 平成16年度全国家庭児童調査

【2-9 しつけの状況】

父母から言われること（国際比較）

日本の子どもは、生活規律や社会のルールについて、保護者から直接しつけられることが少ない。

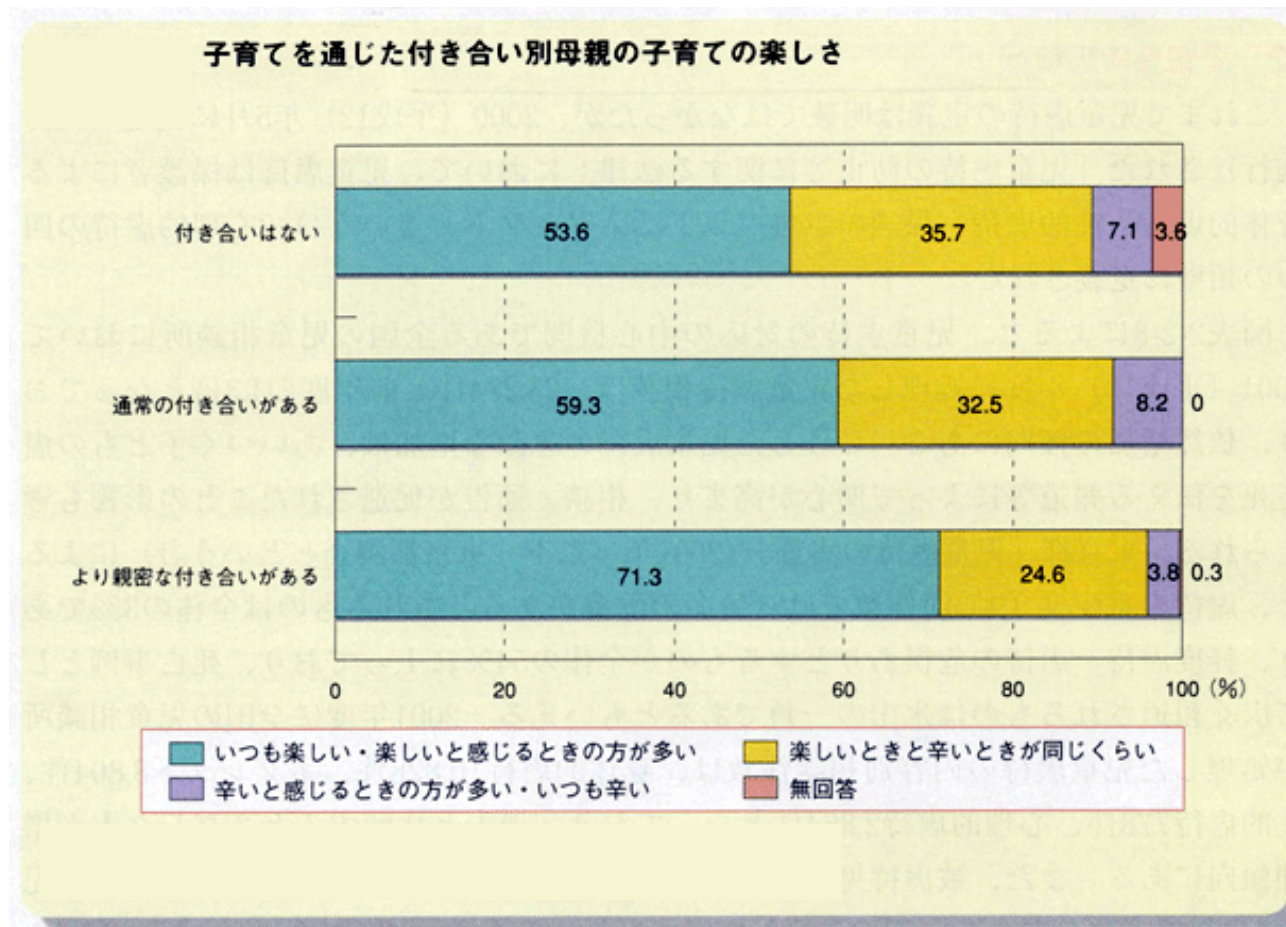


小学校5年生
中学校2年生

子どもの体験活動研究会
「子どもの体験活動等に関する国際比較調査」

2-10 子育てに対する思い (子育てを楽しんでいるか、辛いと感じるか)

子育てを通じた付き合いが多いほうが「子育てを楽しんでいるときが多い」傾向。



【2-11 負担に思うこと、不安・悩みの内容・理由】

負担に思うことや悩みの種類（未就学児の親）

「自分の時間が持てない」は2歳時以降減少、
「子育てで出費がかさむ」は3歳時以降増加し、5歳時点では最も多い悩みとなっている。

↑ 前年度比1ポイント以上増
→ 前年度比増減1ポイント未満
↓ 前年度比1ポイント以上減

(単位：%)	0歳		1歳		2歳		3歳		4歳		5歳	
	第1回調査	第2回調査	第3回調査	第4回調査	第5回調査	第6回調査	第1回調査	第2回調査	第3回調査	第4回調査	第5回調査	第6回調査
負担に思うことや悩みがある	79.8	↑ 85.7	→ 86.3	→ 87.0	↓ 82.4	→ 82.6						
子育てで出費がかさむ	33.7	↓ 26.4	↓ 25.4	↑ 31.2	↑ 33.8	↑ 42.3						
自分の自由な時間が持てない	56.5	↑ 64.6	↓ 59.4	↓ 53.4	↓ 41.8	↓ 37.8						
子育てによる身体の疲れが大きい	40.2	↓ 39.7	↓ 32.1	↓ 30.5	↓ 24.0	→ 24.2						
気持ちに余裕をもって子どもに接することができない	・	・	・	23.0	↑ 26.2	↓ 23.9						
子どもが言うことを聞かない	・	・	21.9	↑ 27.5	↓ 23.0	↓ 19.3						
仕事や家事が十分にできない	11.8	↑ 15.8	↑ 19.8	→ 19.9	↓ 17.0	→ 16.4						
しつけのしかたが家庭内で一致していない	・	・	9.2	↑ 11.7	→ 11.2	→ 11.5						
子どもを一時的にあずけたいときにあずけ先がない	・	・	12.0	→ 11.1	→ 10.5	→ 10.6						
子どもについてまわりの目や評価が気になる	・	・	5.0	↑ 8.2	→ 7.6	→ 8.5						
子どもの成長の度合いが気になる	・	・	7.0	→ 7.5	→ 7.2	→ 7.8						
目が離せないのが気が休まらない	・	34.1	↓ 22.7	↓ 15.1	↓ 8.7	↓ 6.5						
配偶者が育児に参加してくれない	・	・	6.0	→ 6.7	→ 6.1	→ 6.4						
しつけのしかたがわからない	・	・	8.6	↓ 7.3	↑ 7.8	↓ 6.0						
子どもが急病のとき診てくれる医者が近くにいない	・	・	3.4	→ 3.4	→ 3.7	→ 3.9						
子どもが病気がちである	3.3	↑ 6.3	↓ 4.0	→ 3.8	→ 4.4	→ 3.5						
子どもをもつ親同士の関係がうまくいかない	・	・	1.2	→ 1.6	→ 2.1	→ 2.6						
子どもが保育所・幼稚園に行きたがらない	・	・	・	2.5	→ 2.4	→ 1.5						
子どもを好きになれない	・	・	0.3	→ 0.4	→ 0.5	→ 0.4						
その他	6.0	↓ 3.9	→ 3.0	→ 3.4	→ 3.1	→ 3.5						
負担に思うことや悩みは特にない	19.7	12.2	13.0	12.1	15.5	15.6						
不詳	0.5	2.1	0.7	2.1	2.1	1.8						

注) 1. 第1回調査から第6回調査まで回答を得た者を集計。
2. 「仕事や家事が十分にできない」は、第1回調査、第2回調査では「仕事が十分にできない」である。

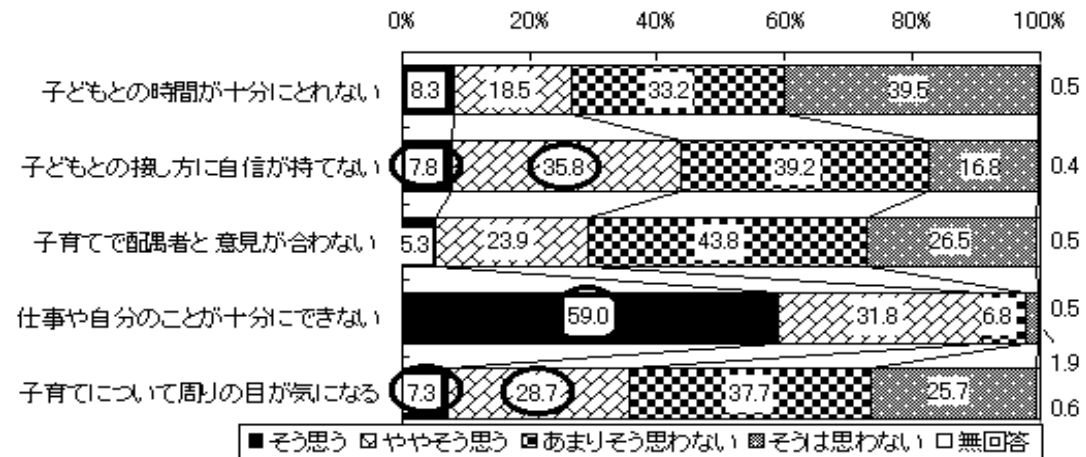
資料：厚生労働省 21世紀出生児縦断調査 (平成13～19年)

【2-11 負担に思うこと、不安・悩みの内容・理由】

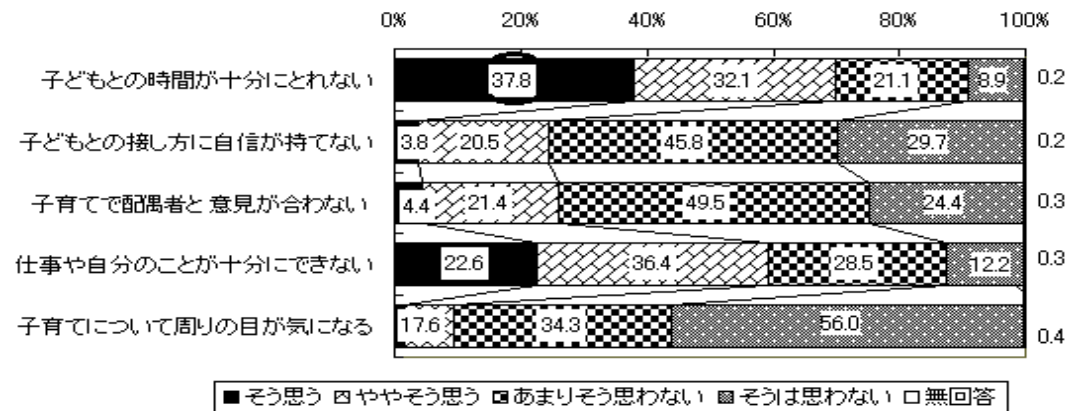
不安や悩みの理由(未就学児の親)

子育ての不安・悩みの理由は、母親では「仕事や自分のことが十分にできない」が、父親では「子どもとの時間が十分にとれない」が、第一位。

【母親】



【父親】



調査対象：未就学児を持つ2,000世帯の父母(父親2,000名、母親2,000名)

UFJ総合研究所「子育て支援策等に関する調査研究」(平成15年度)

【2-11 負担に思うこと、不安・悩みの内容・理由】

不安や悩みの種類（18歳未満の子どもを持つ親）

親の不安・悩みとしては、小学校低学年以下については「しつけに関すること」が、小学校高学年以上では「勉強や進学に関すること」が最も多い。

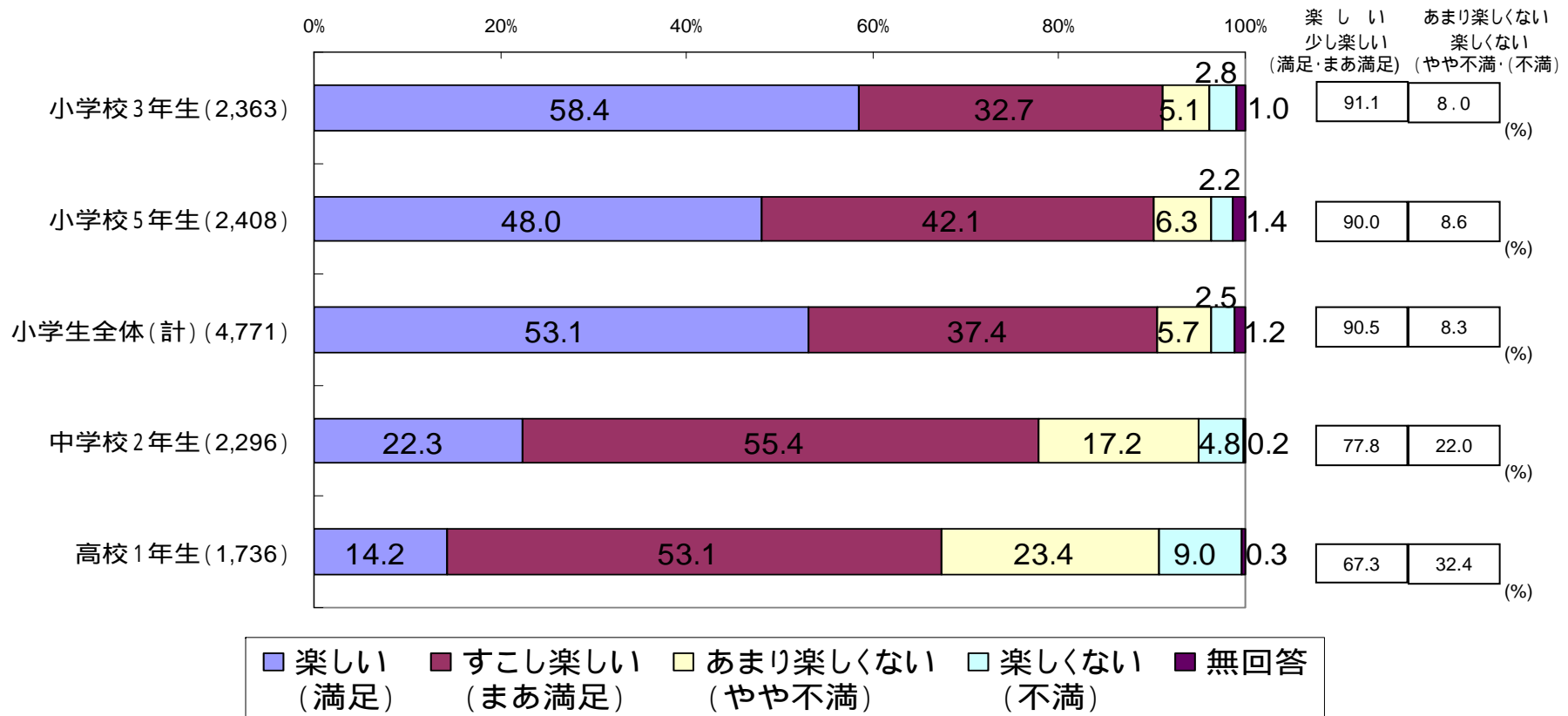
不安や悩みの種類	未就学	小学校1～3年生	小学校4～6年生	中学校	高校生等
子どものしつけに関すること	59.5	58.8	53.0	46.4	34.7
子どもの健康に関すること	35.4	29.7	32.7	27.6	24.9
子どもの勉強や進学に関すること	30.8	57.1	61.4	74.5	69.4
子どもの就職に関すること	5.7	11.7	15.2	25.1	35.6
子どもの性格や癖に関すること	49.1	51.1	38.3	32.8	21.1
子どもの暴力や非行に関すること	4.2	5.9	6.5	5.9	2.8
子どものいじめに関すること	9.6	16.6	14.3	9.6	6.3
子どもの友人に関すること	15.6	24.4	22.2	17.2	10.7
子どもの性に関すること	3.5	7.5	8.9	10.9	9.5
子どもが保育園や幼稚園、学校に行くのを嫌がること	6.6	4.9	6.3	7.3	5.4
子どもの育て方について、自信が持てないこと	24.8	22.7	20.3	21.3	13.2
子どものことに関して、家族が協力してくれないこと	8.3	9.8	8.4	6.7	7.9
家の近所の環境がよくないこと	6.9	6.1	7.0	5.9	4.7
その他	1.9	0.5	0.5	0.4	-
特に不安や悩みはない	17.1	14.5	16.4	14.4	19.9

注) 「高校生等」とは「高校」、「各種学校・専修学校・職業訓練校」の合計である。

3 学校教育

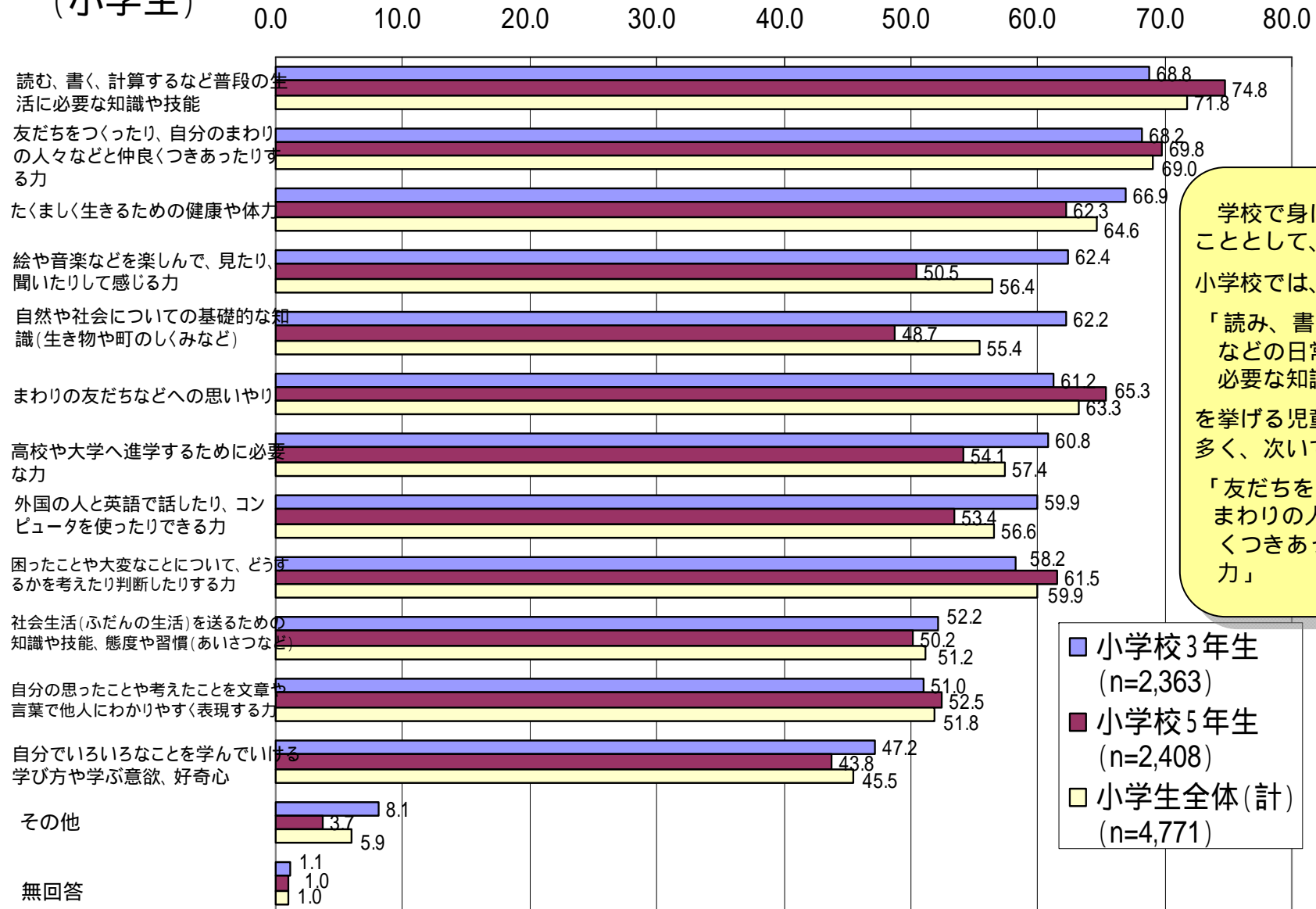
3-1 学校生活への満足感

学校生活の満足度について、「楽しい(満足)」と感じている者が、小学校(3・5年)では53.1%、中学校(2年)では、22.3%、高校(1年)では、14.2%と、学校段階によって差がある。



3-2 学校で身に付けたいこと

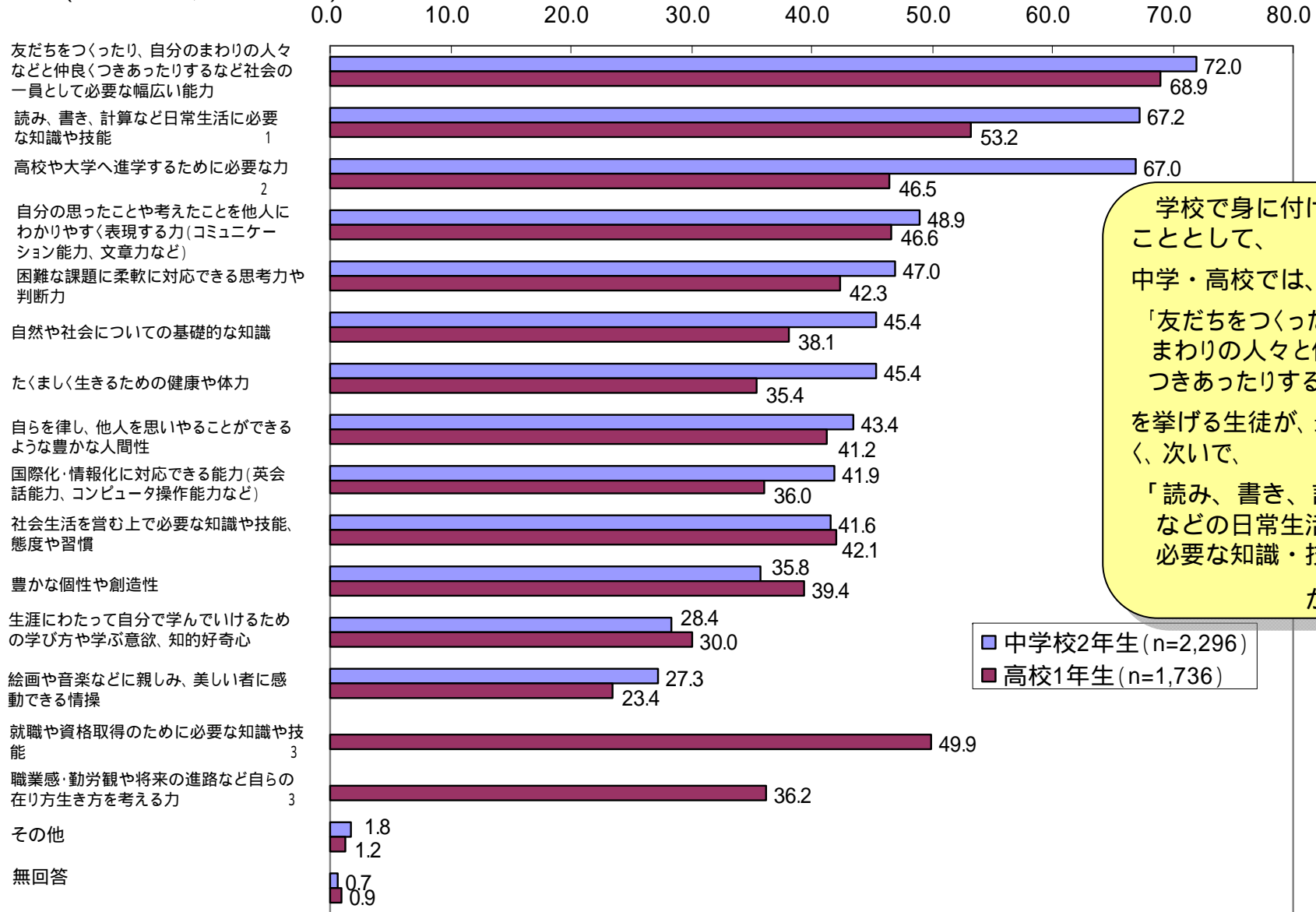
(小学生)



学校で身に付けたいこととして、小学校では、「読み、書き、計算などの日常生活に必要な知識・技能」を挙げる児童が、最も多く、次いで、「友だちをつったり、まわりの人々と仲良くつきあったりする力」が続く。

■ 小学校3年生 (n=2,363)
 ■ 小学校5年生 (n=2,408)
 □ 小学生全体(計) (n=4,771)

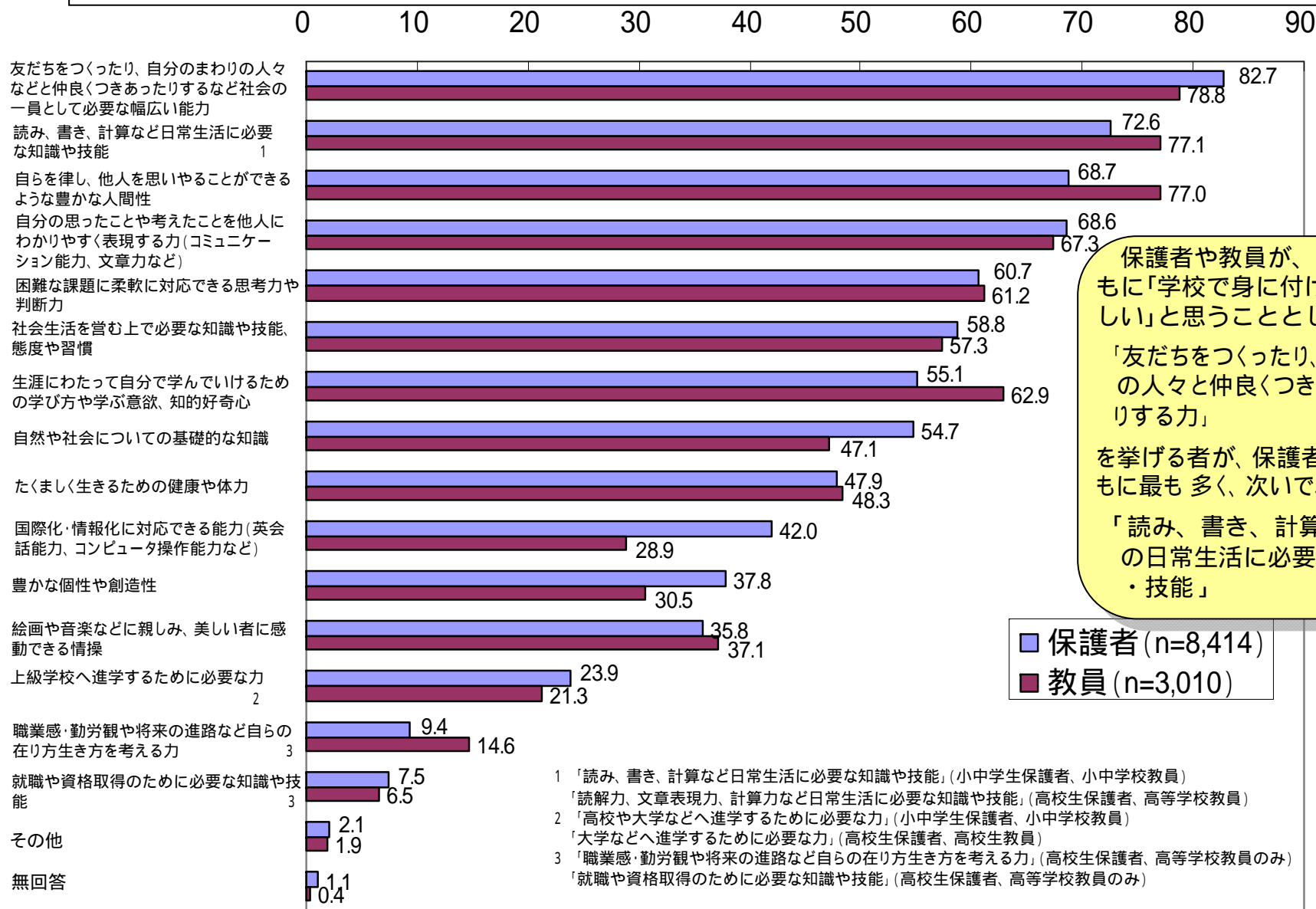
(中学生、高校生)



学校で身に付けたいこととして、
 中学・高校では、
 「友だちをつくったり、まわりの人々と仲良くつきあったりする力」
 を挙げる生徒が、最も多く、次いで、
 「読み、書き、計算などの日常生活に必要な知識・技能」
 が続く。

1 「読み、書き、計算など日常生活に必要な知識や技能」(中学生)
 「読解力、文章表現力、計算力など日常生活に必要な知識や技能」(高校生)
 2 「高校や大学などへ進学するために必要な力」(中学生)
 「大学などへ進学するために必要な力」(高校生)
 3 「職業感・勤労観や将来の進路など自らの在り方生き方を考える力」(高校生のみ)
 「就職や資格取得のために必要な知識や技能」(高校生のみ)

3-3 学校で身に付けてほしいこと（保護者・教員）



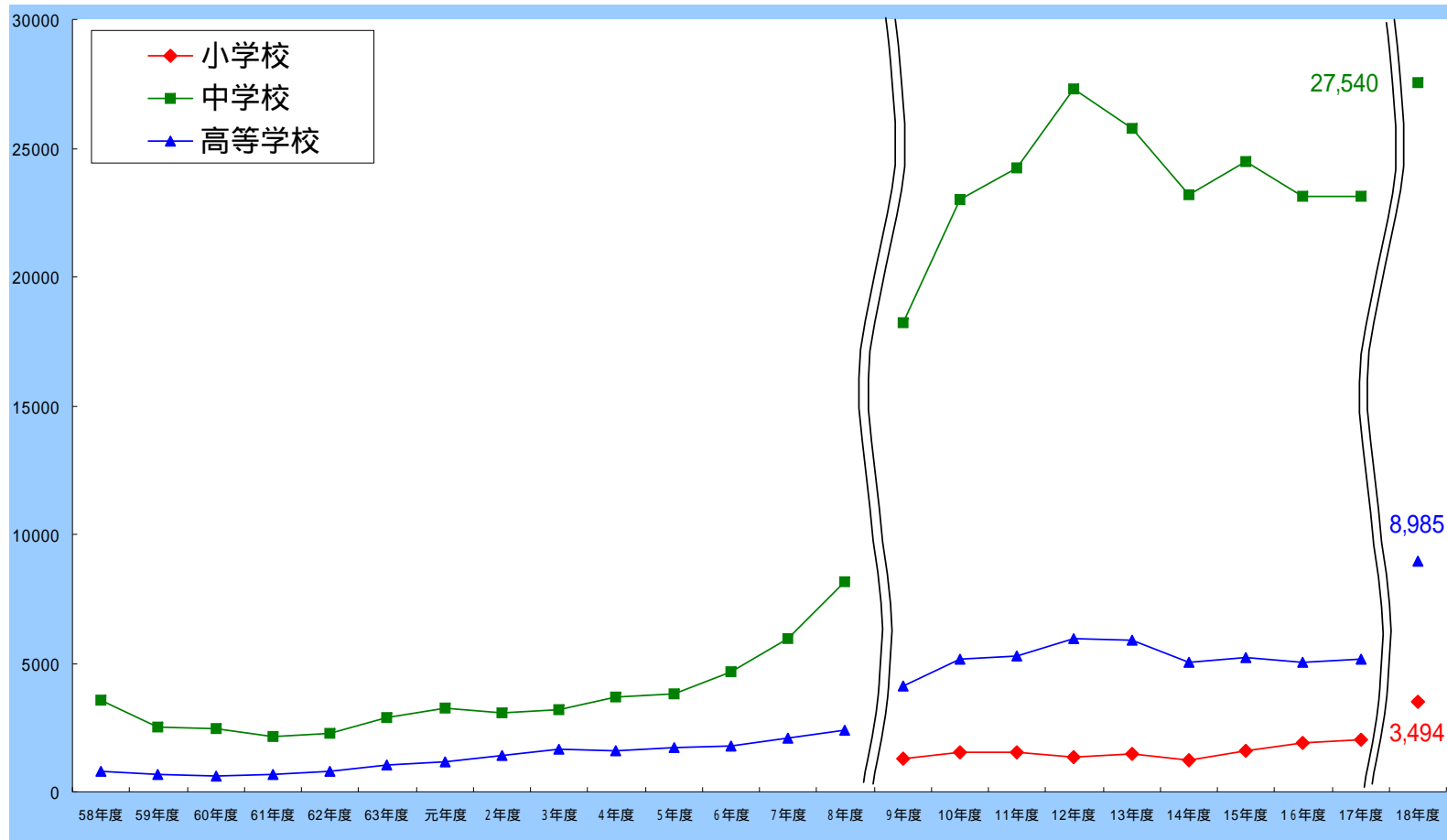
保護者や教員が、子どもに「学校で身に付けてほしい」と思うこととしては、「友だちをつったり、まわりの人々と仲良くつきあったりする力」を挙げる者が、保護者、教員ともに最も多く、次いで、「読み、書き、計算などの日常生活に必要な知識・技能」が続く。

■ 保護者 (n=8,414)
■ 教員 (n=3,010)

1 「読み、書き、計算など日常生活に必要な知識や技能」(小中学生保護者、小中学校教員)
「読解力、文章表現力、計算力など日常生活に必要な知識や技能」(高校生保護者、高等学校教員)
2 「高校や大学などへ進学するために必要な力」(小中学生保護者、小中学校教員)
「大学などへ進学するために必要な力」(高校生保護者、高校生教員)
3 「職業感・勤労観や将来の進路など自らの在り方生き方を考える力」(高校生保護者、高等学校教員のみ)
「就職や資格取得のために必要な知識や技能」(高校生保護者、高等学校教員のみ)

3-4 校内における暴力行為発生件数の推移

平成18年度の暴力行為は小中高合わせて40,019件。(但し、平成18年度調査より国私立学校を調査対象に加えるなどしているため、それ以前との単純比較はできない。)



(注1) 平成8年度までは、公立中・高等学校を対象として、「校内暴力」の状況について調査。

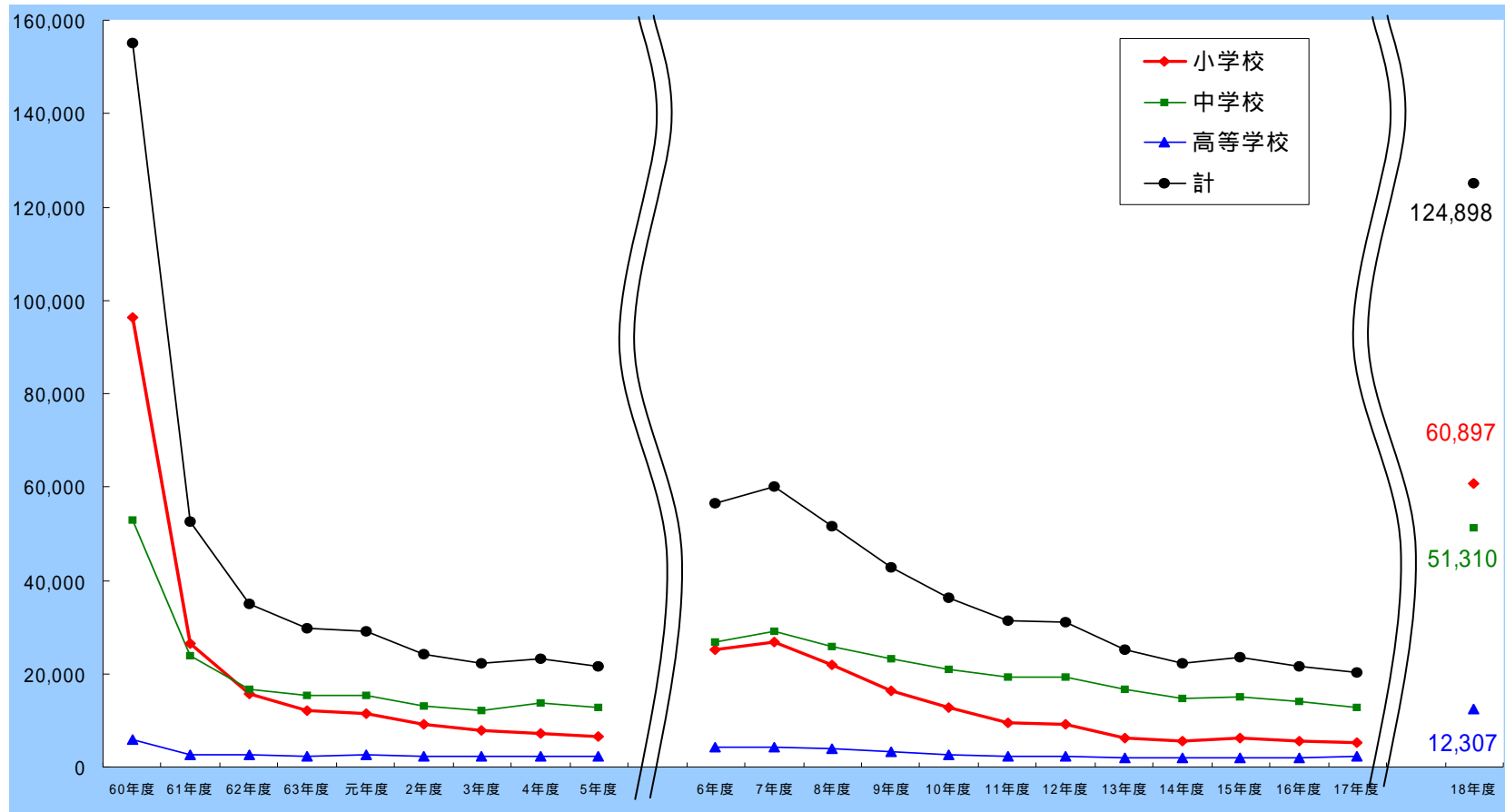
(注2) 平成9年度からは、公立小学校を調査対象に加えるとともに、調査方法等を改めている。

(注3) 平成18年度からは、国・私立学校も調査。

資料：文部科学省「平成18年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」

3-5 いじめの認知件数の推移

平成18年度のいじめの認知件数は124,898件。(但し、平成18年度調査よりいじめの定義を見直すなどしたため、それ以前との単純比較はできない。)



(注1) 平成5年度までは公立小・中・高等学校を調査。平成6年度からは特殊教育諸学校、平成18年度からは国・私立学校も調査。

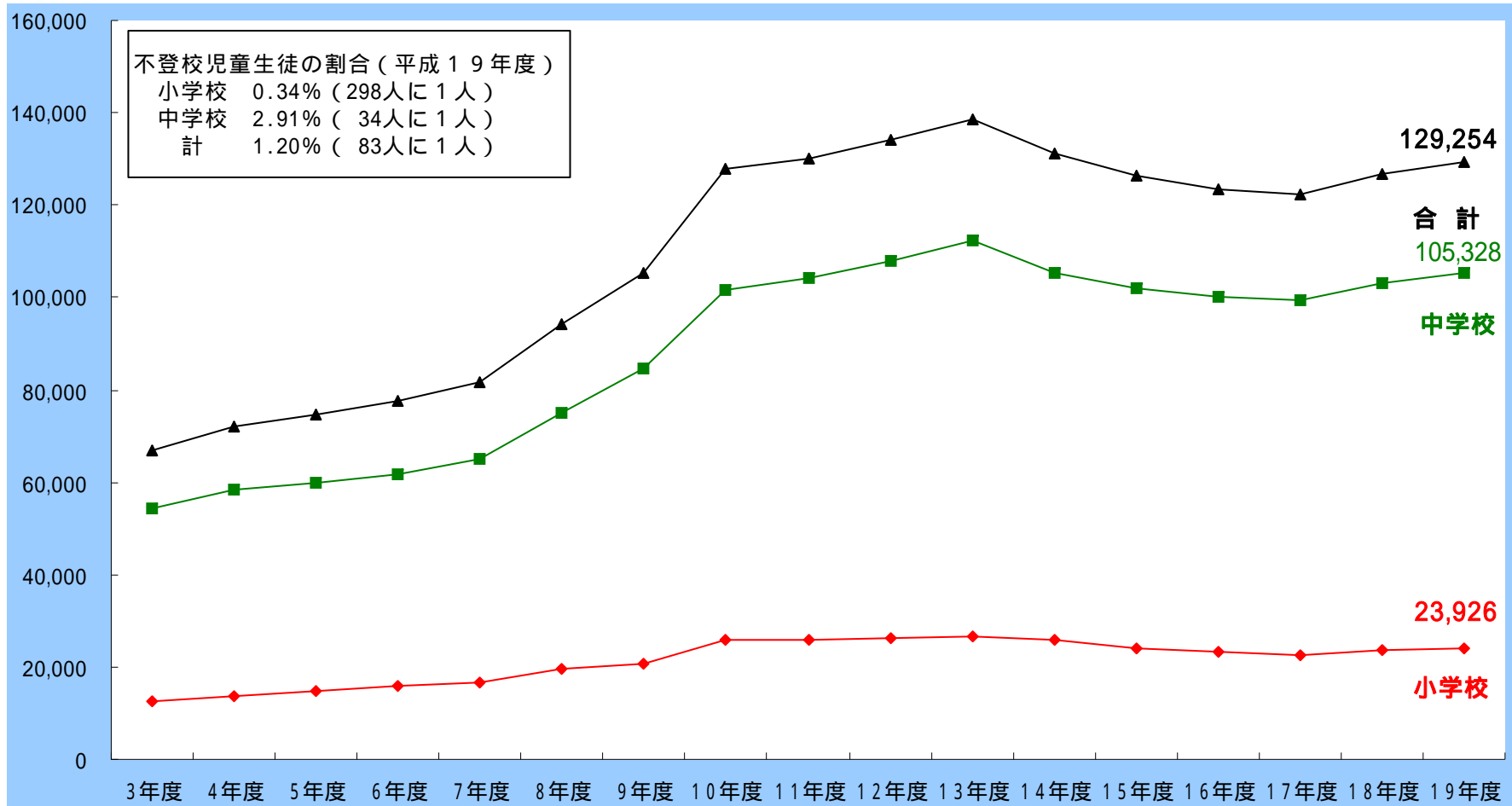
(注2) 平成6年度及び平成18年度に調査方法等を改めている。

(注3) 平成17年度までは発生件数、平成18年度からは認知件数。

資料：文部科学省「平成18年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」

3-6 不登校児童生徒数の推移

平成19年度の不登校児童生徒数は129,254人で2年連続の増加。
中学校における不登校児童生徒数の全生徒数に占める割合は、2.91%で過去最高。

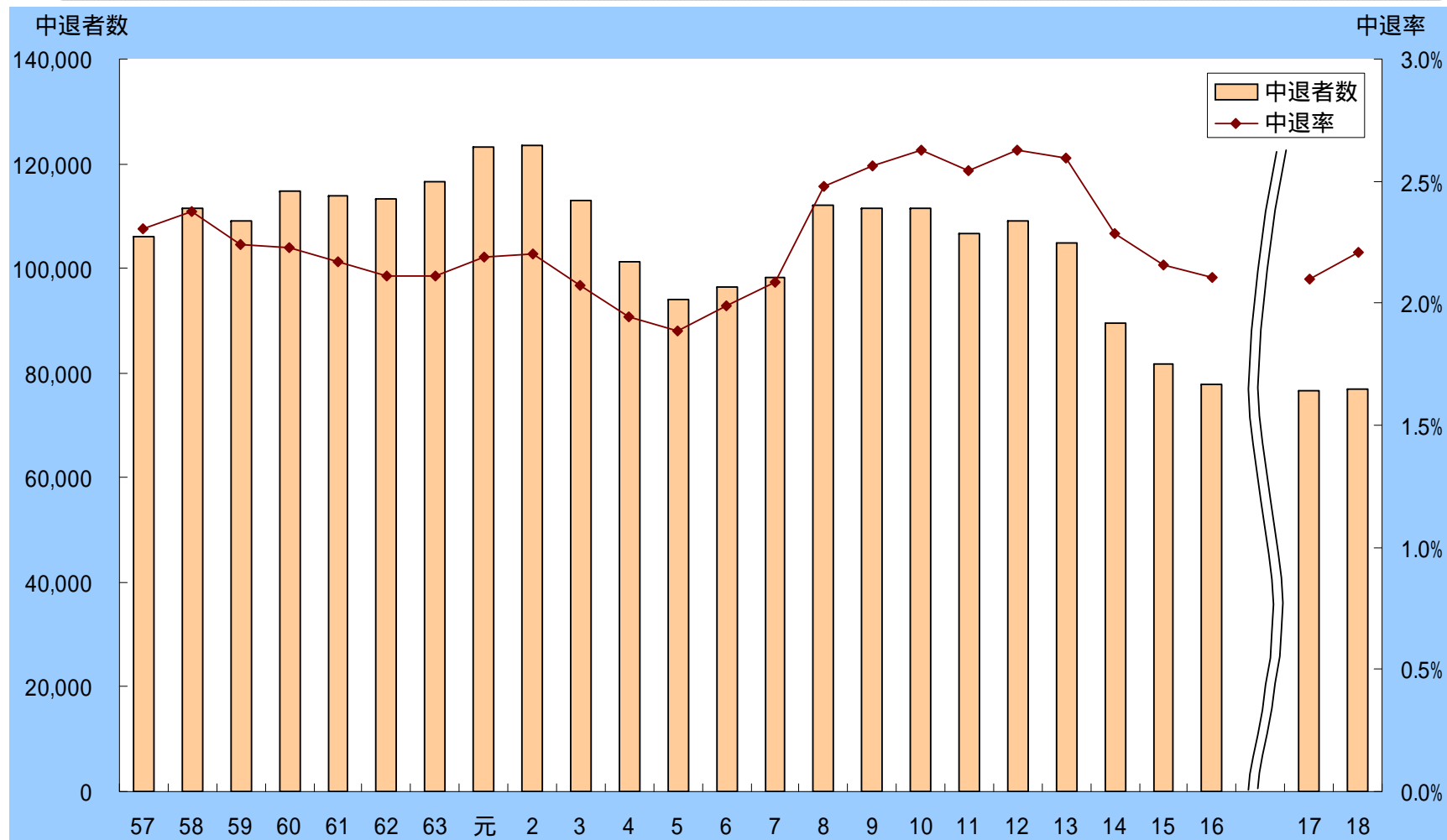


（注）調査対象：国公立小・中学校（中学校には中等教育学校前期課程を含む）
平成19年度については速報値。

資料：文部科学省「平成19年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査（速報）」

3-7 高等学校中途退学者数の推移

平成18年度の中途退学者は77,027人(中退率2.2%)で前年度よりも増加。



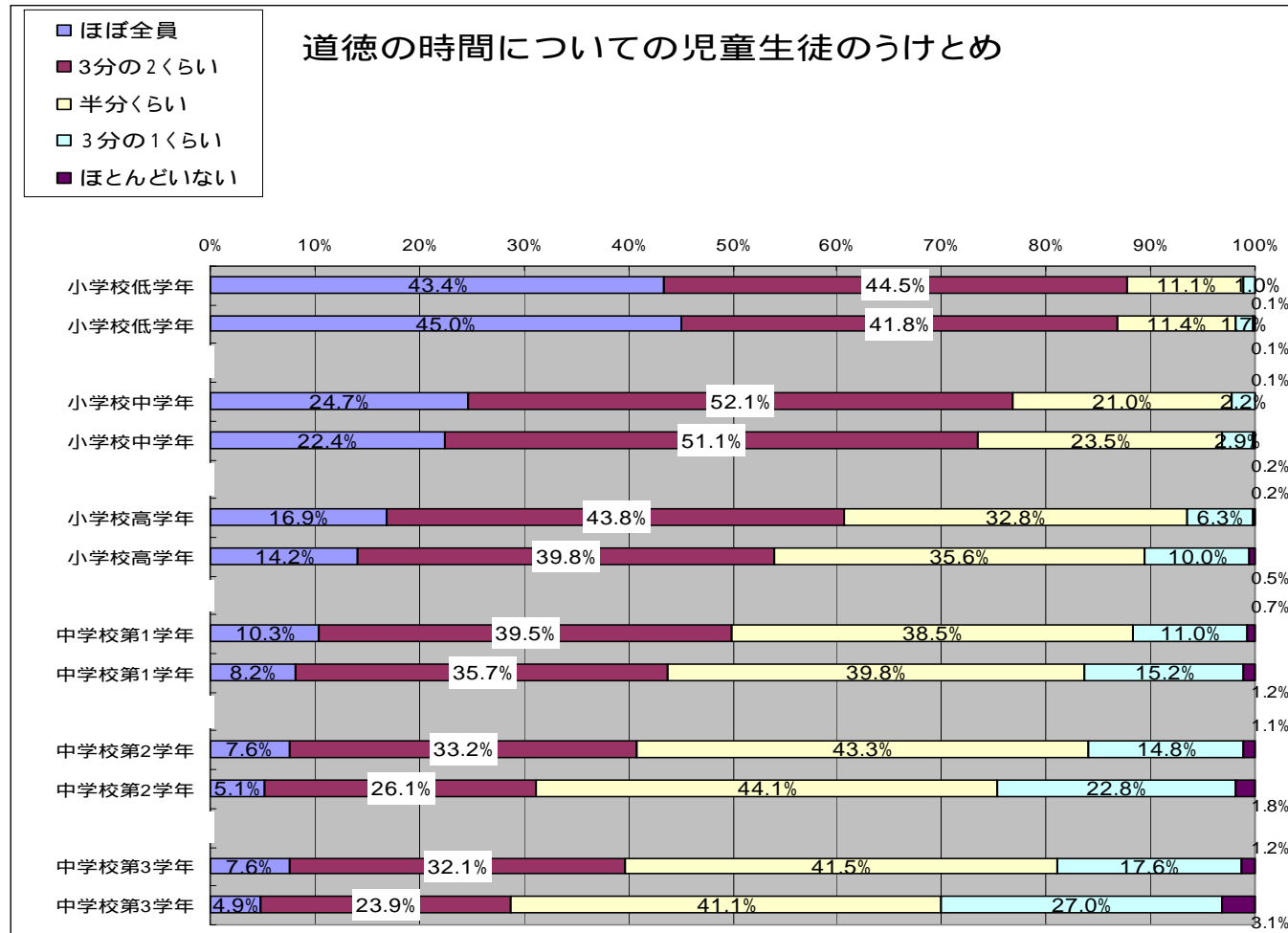
(注1) 調査対象は、平成16年度までは公・私立高等学校、平成17年度からは国立高等学校も調査。

(注2) 中途退学率は、在籍者数に占める中途退学者数の割合。

資料：文部科学省「平成18年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」

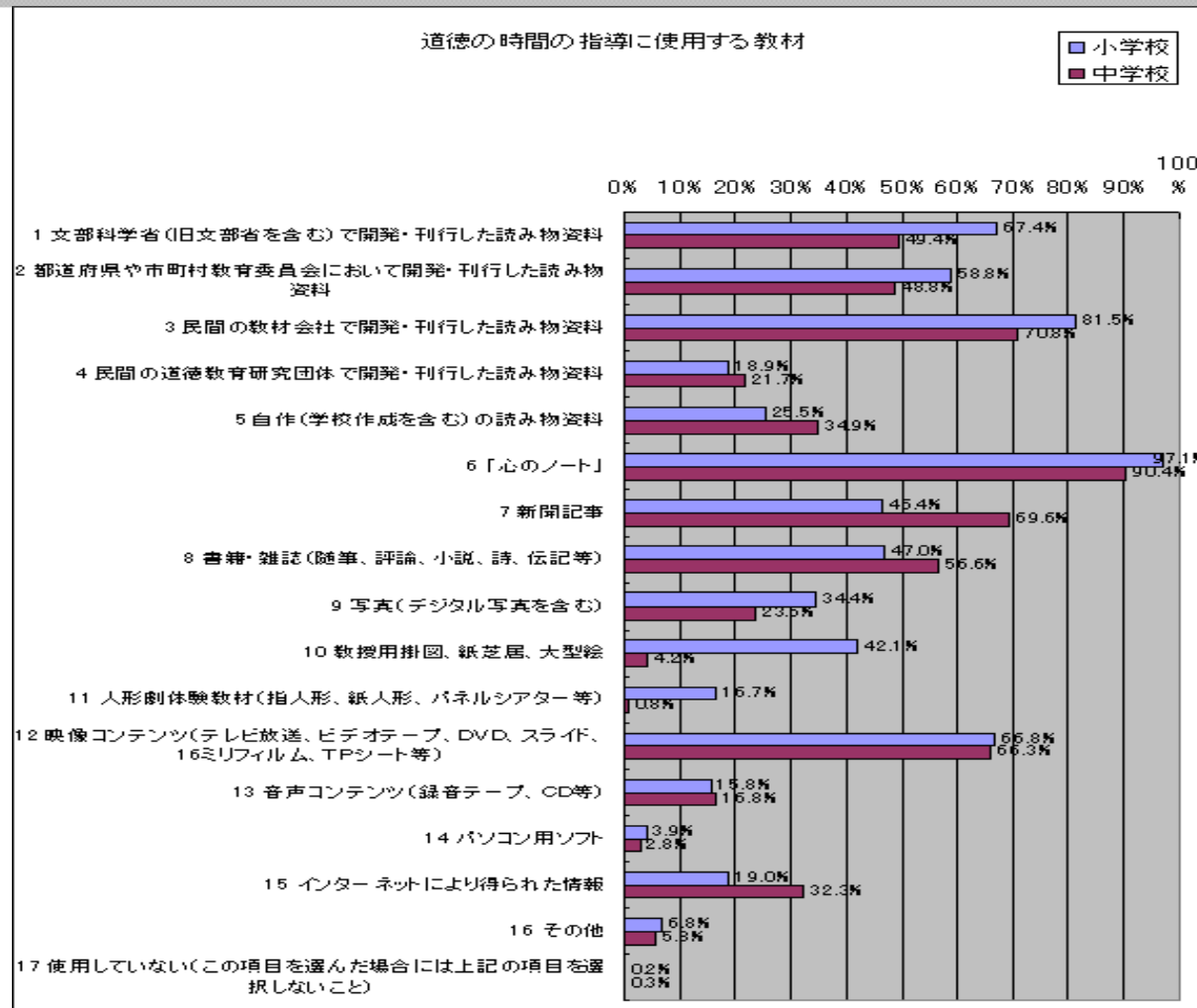
道徳の時間についての児童生徒のうけとめ

学年が上がるにつれて子どもの受け止めがよくなる。



道徳の時間で使用する教材

多くの学校で、「心のノート」や「読み物資料(副読本)」が使用されている。



3-9 学校における体験活動の実施状況

小・中・高校において、それぞれ年間40授業時間程度の体験活動が行われている。

1年間で実施する体験活動の総単位時間

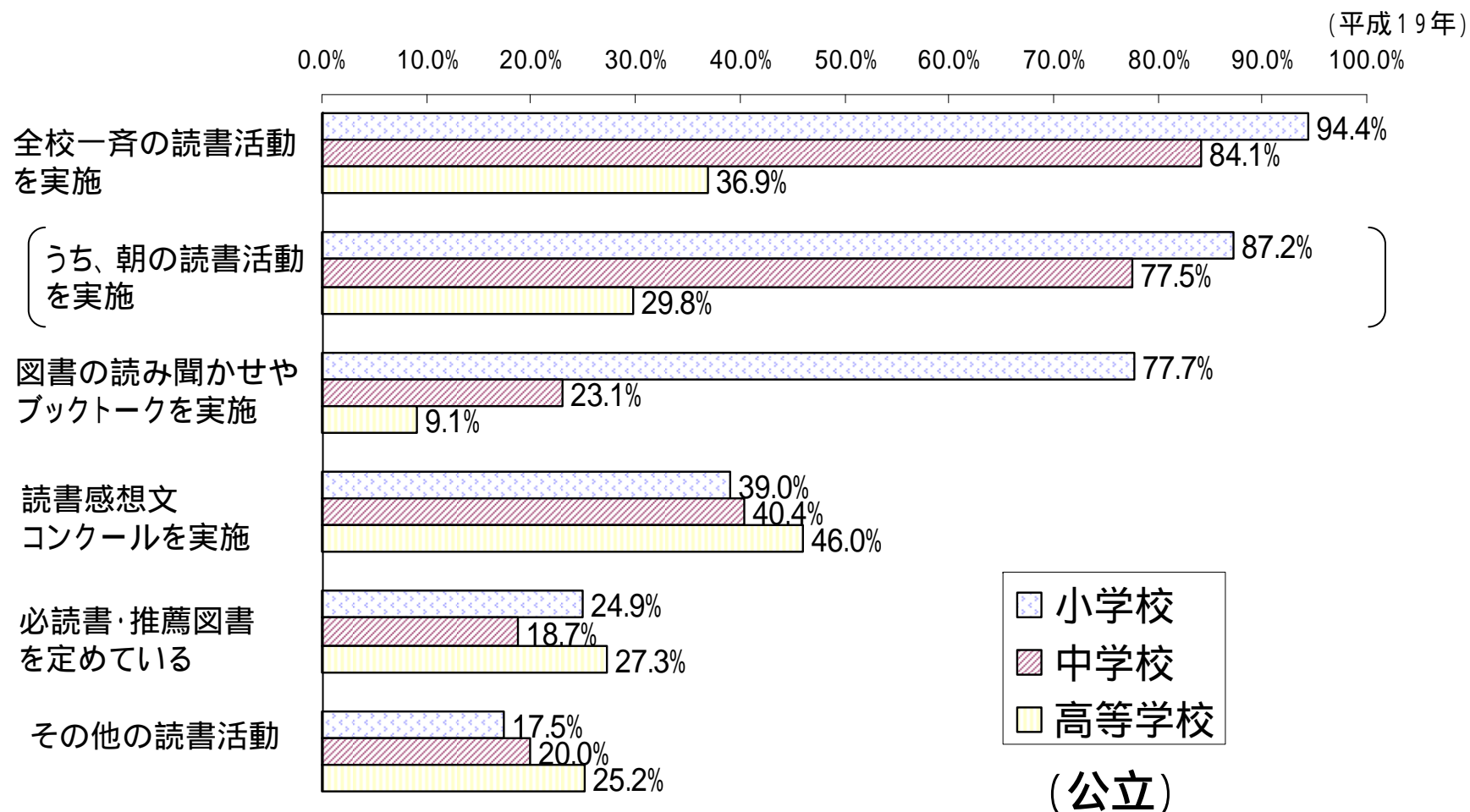
	小学校	中学校	高等学校
ボランティアなど社会奉仕に関わる体験活動 (町内や海岸の清掃、地域環境整備・美化活動、社会福祉施設の訪問、その他のボランティア活動など)	3.1時間	2.5時間	2.9時間
自然に親しむ体験活動 (野外探索や野外生活、野鳥や小動物の観察、自然教室など)	13.3時間	5.0時間	3.3時間
勤労生産及び職場・職業・就業等に関わる体験活動	12.6時間	20.1時間	23.6時間
第一次産業に関わる産業 (田植え、下草刈り、地引き網等の農林漁業体験など)	10.6時間	2.4時間	5.2時間
第二次産業に関わる産業 (工場等での職場体験活動、インターンシップなど)	0.8時間	4.9時間	10.1時間
第三次産業に関わる産業 (地域の事務所、店舗等における職場体験活動、インターンシップなど)	1.2時間	12.8時間	8.3時間
文化や芸術に親しむ体験活動 (壁画の制作活動、日本や外国の文化・伝統の体験活動、地域の伝統行事や芸能・工芸等の伝承活動など)	3.6時間	3.7時間	2.9時間
交流に関わる体験活動 (幼児、高齢者、障害者、外国人、異なる地域の人々等との交流活動)	5.0時間	2.3時間	3.6時間
その他の体験活動	3.3時間	2.3時間	3.0時間
計	41.0時間	35.9時間	39.2時間

平成18年度抽出調査
(文部科学省)

- (1) 調査対象校：小・中・高等学校 計564校(小学校、中学校、高等学校各188校)
- (2) 数字は、小学校は5年生、中学校・高等学校は2年生の一年間で実施する体験活動の総合単位時間の平均

3-10 学校における読書活動の取組状況

小学校・中学校を中心に、全校一斉の読書活動(朝の読書活動)等の取組が広く行われている。

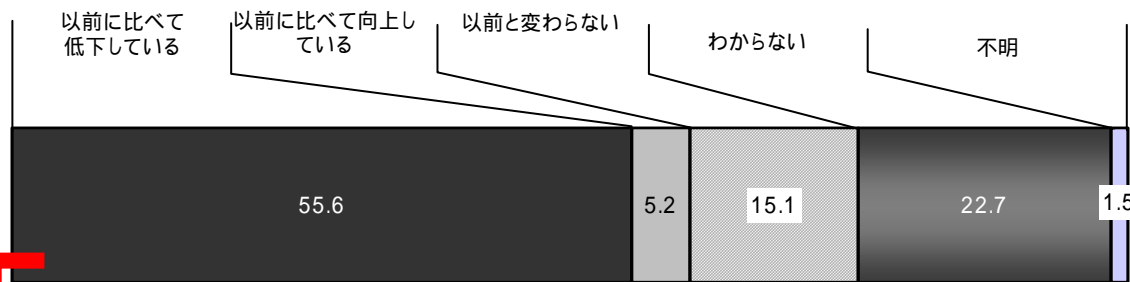


4 地域の教育力

4-1 地域の教育力低下に対する認識

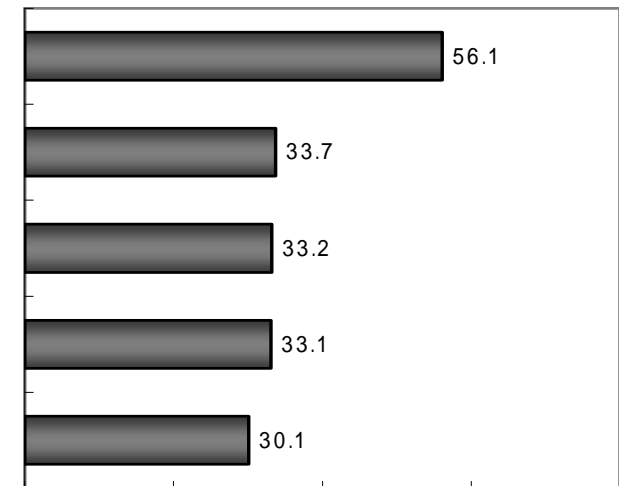
保護者に「地域の教育力」を自身の子ども時代と比較してもらったところ、**過半数が「以前に比べて低下している」(55.6%)と回答している**。一方、「以前に比べて向上している」(5.2%)、「以前と変わらない」(15.1%)は低い割合にとどまっている。

(%)



その理由

- 個人主義が浸透してきているので
(他人の関与を歓迎しない)
- 地域が安全でなくなり、子どもを他人と交流させることに対する抵抗が増している
- 近所の人々が親交を深められる機会が不足している
- 人々の居住地に対する親近感が希薄化している
- 母親の就労が増加している



(%)

0 20 40 60 80

(出典)平成18年3月 文部科学省委託「地域の教育力に関する実態調査」

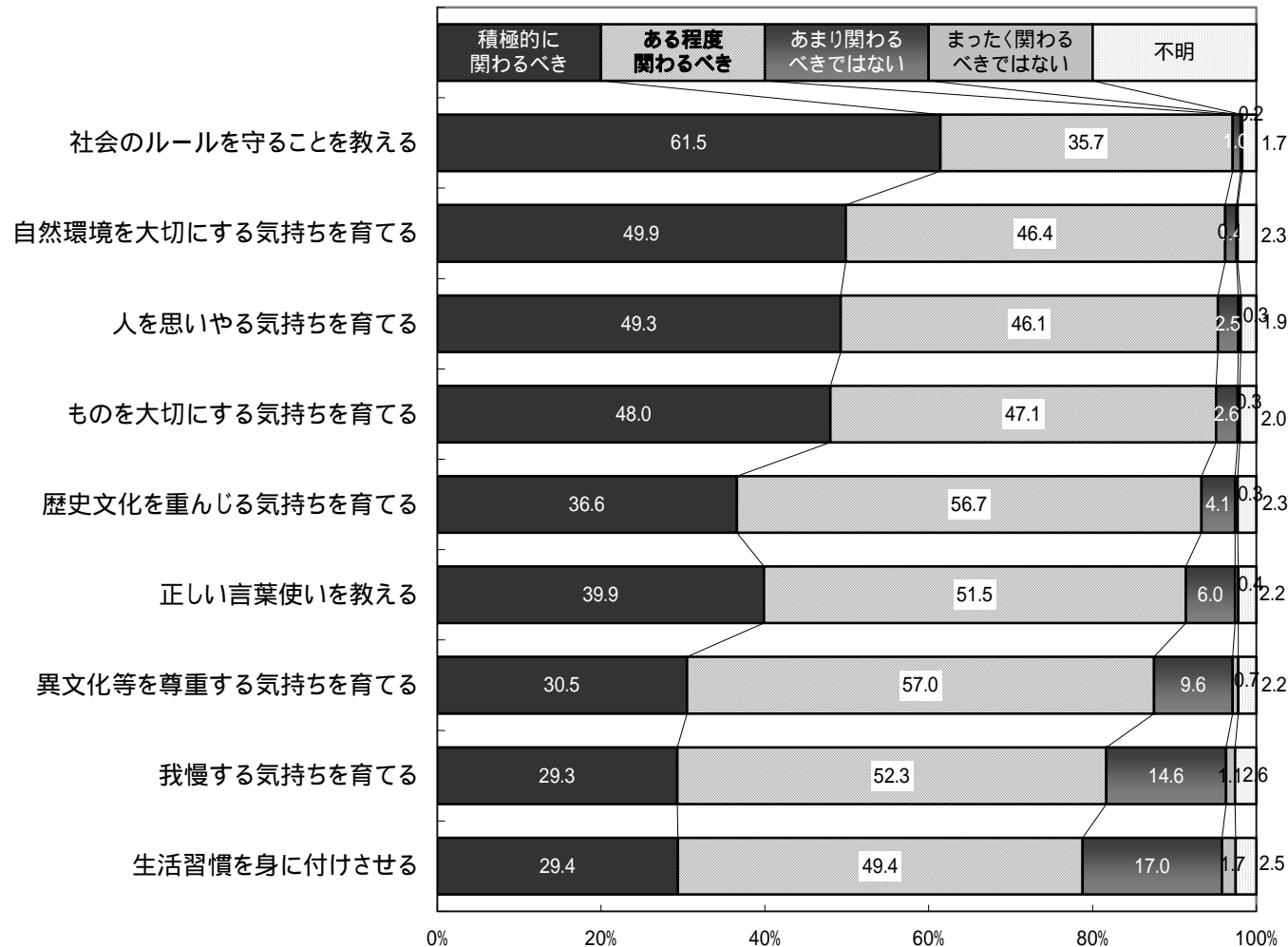
14項目の中から3つまで選択。上記グラフは上位5項目の回答率。

4-2 地域が果たすべき役割

「社会のルールを守ることを教える」について「積極的に関わるべき」が6割以上と最も高い。
保護者は、子どもに対して社会規範を教えることを重視していることがうかがえる。

子ども(小・中学生)を育てる上で地域が果たすべき役割

(%)



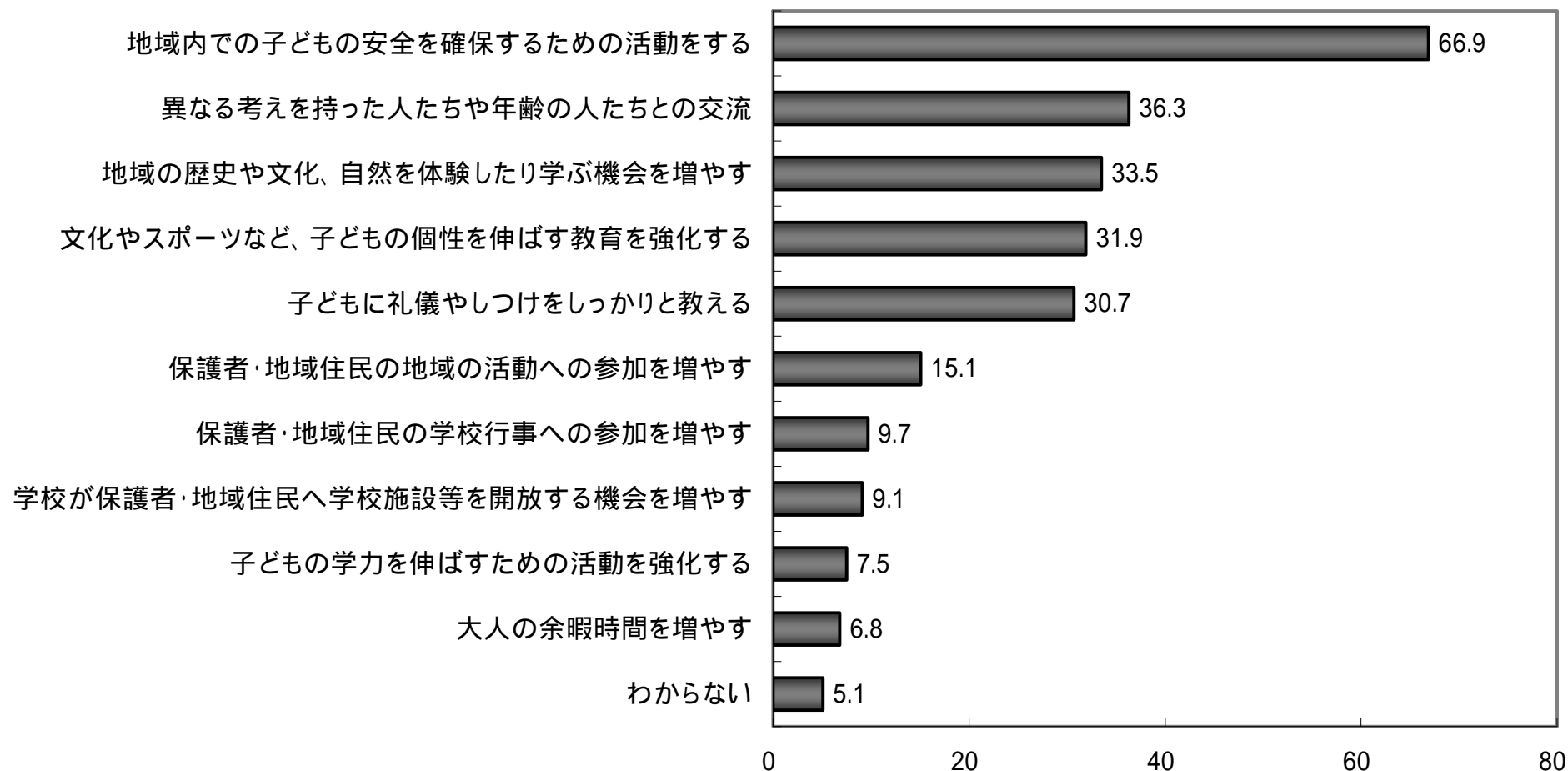
資料: 文部科学省委託「地域の教育力に関する実態調査」(平成18年)

4-3 地域で力を入れるべきこと

地域で力を入れるべきこととして、子どもの安全を確保するための活動を挙げる保護者の割合が最も高い。

子どもが健やかに育まれるために地域で力を入れるべきこと

(%)

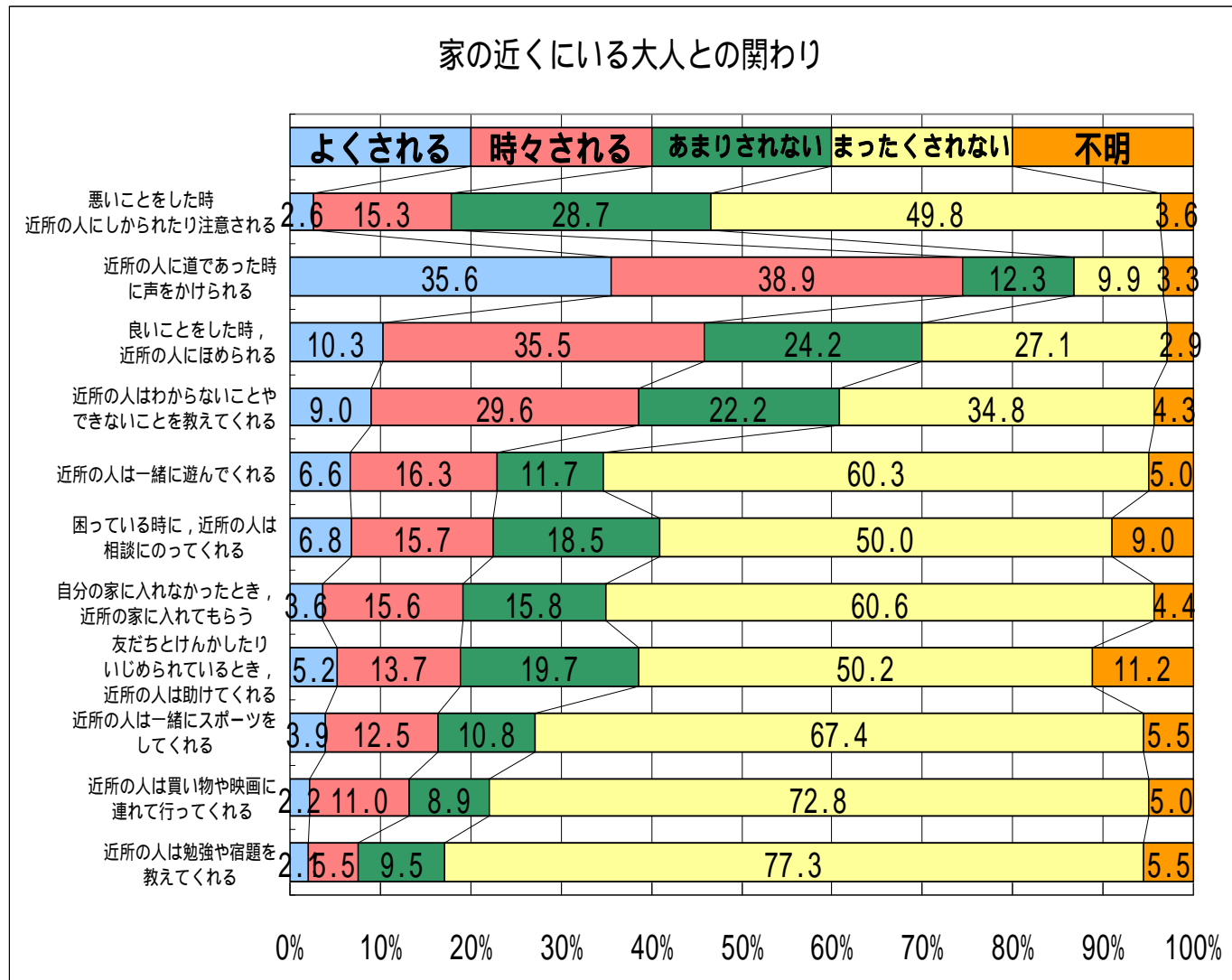


上記グラフの項目の中から多いものを3つまで選択。

(出典)平成18年3月 文部科学省委託「地域の教育力に関する実態調査」(調査時期は平成17年10月～11月中旬)

4-4 家の人や学校の先生以外の大人から注意された経験

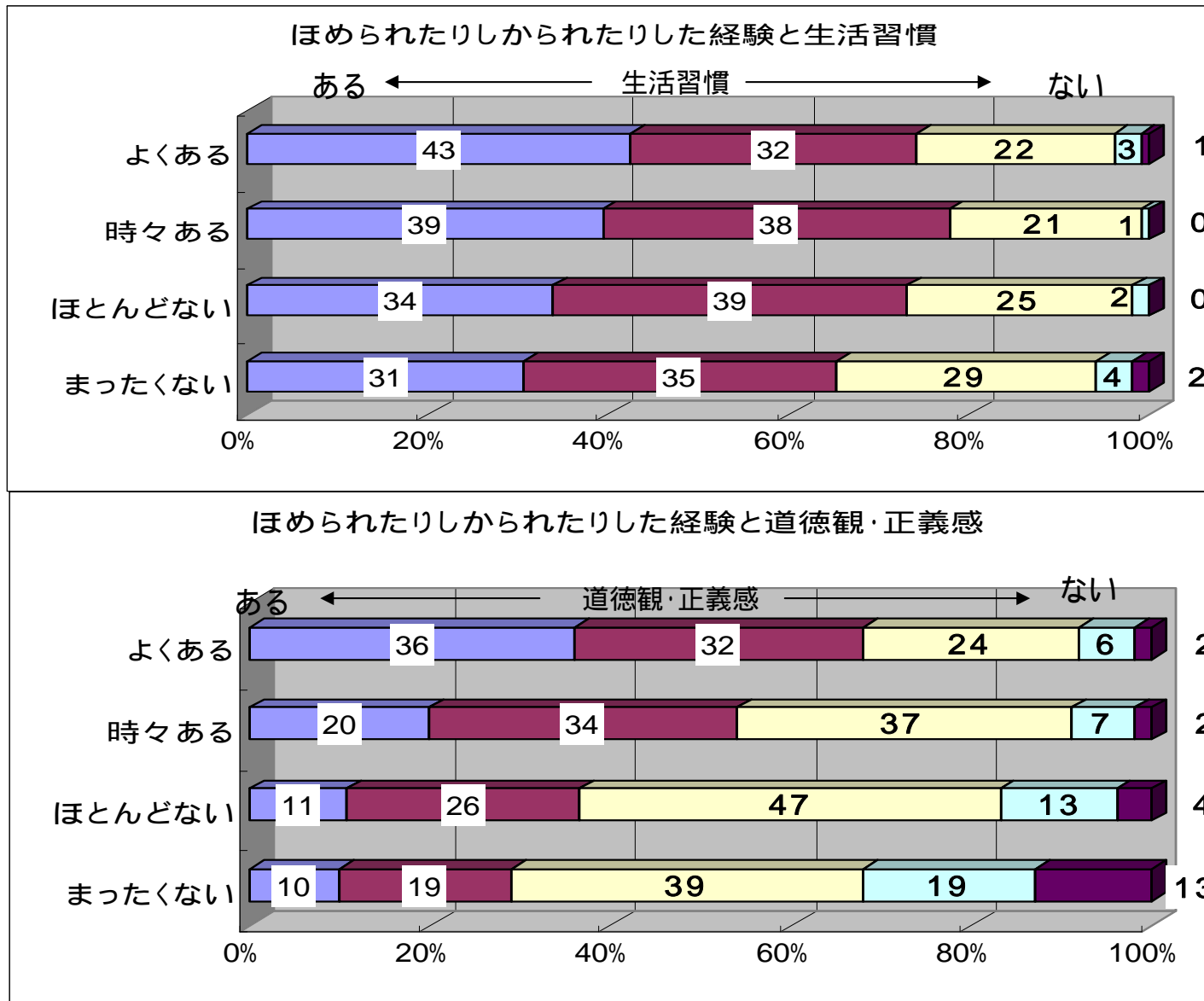
近所の大人からしかられたり助けられたりした経験のある青少年が少ない。



小学2・5年生、
中学2年生

日本総合研究所
「地域の教育力に関する
実態調査」(平成18年)

大人からほめられたりしかられたりした経験の多い小中学生には、生活習慣や道徳観・正義感が身に付いている者が多い。



【4-5 地域活動への大人の参加】

過去1年間の地域活動への参加率

男女とも10・20代の「地域活動参加なし」が約6割。(教育・文化については、男性40代と女性30・40代が他の年代に比べ相対的に高く、約2～3割。)

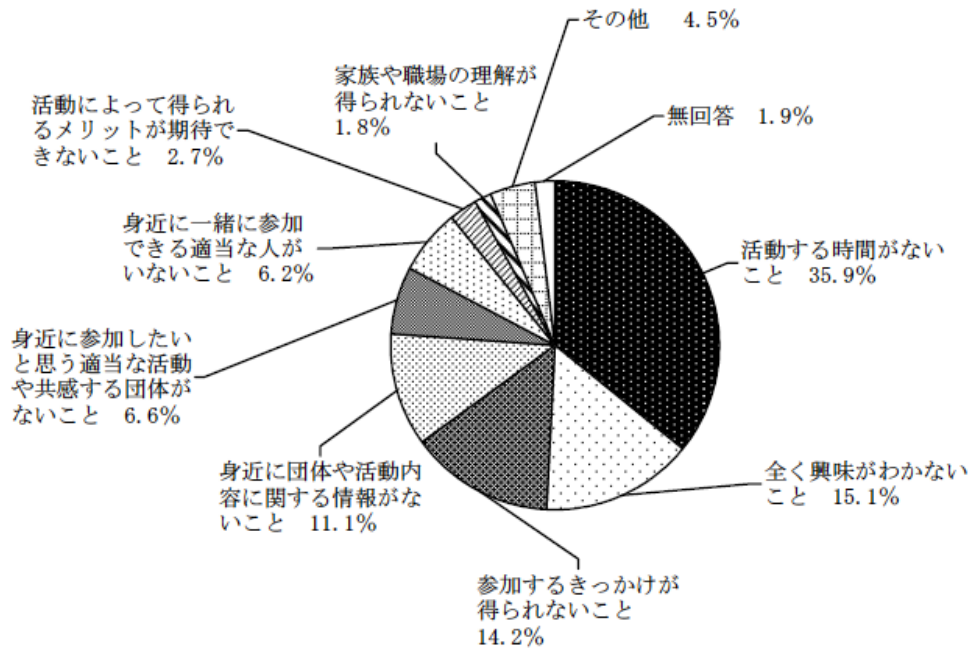
教育を含め、様々な地域活動へ参加している人の割合は、各分野とも総じて低い割合にとどまっている。

	N	地域活動(趣味)	地域活動(健康・スポーツ)	地域活動(教育・文化)	地域活動(環境美化)	地域活動(交通安全)	地域活動(防犯・防災)	地域活動(福祉・保健)	地域活動(祭りなど催し物)	その他	地域活動参加なし
Total	10060	7.2%	22.0%	11.1%	14.5%	5.1%	7.4%	5.5%	30.6%	2.3%	43.4%
男性10代	270	1.1%	21.1%	3.7%	4.1%	1.9%	1.9%	1.5%	22.6%	0.0%	56.7%
男性20代	561	3.7%	12.1%	3.6%	5.3%	1.1%	4.5%	2.1%	16.2%	1.4%	66.5%
男性30代	752	1.7%	17.6%	9.6%	9.8%	2.8%	7.0%	1.6%	27.5%	1.2%	52.8%
男性40代	898	4.3%	23.5%	19.0%	17.5%	6.2%	10.5%	2.9%	34.3%	2.1%	37.2%
男性50代	1071	4.3%	22.0%	7.2%	21.8%	6.6%	11.5%	4.7%	33.5%	2.6%	41.4%
男性60代	1086	10.9%	25.9%	4.7%	22.1%	8.7%	12.2%	7.2%	29.7%	3.9%	37.9%
女性10代	255	2.0%	12.2%	3.9%	4.7%	1.2%	2.4%	3.9%	28.6%	0.4%	59.6%
女性20代	691	2.3%	9.1%	5.6%	5.2%	1.0%	1.2%	3.0%	21.3%	0.4%	64.5%
女性30代	1092	5.2%	21.0%	26.7%	10.9%	6.5%	4.5%	2.6%	38.6%	1.5%	38.7%
女性40代	1091	9.4%	25.0%	22.4%	17.1%	8.5%	6.6%	5.2%	37.5%	2.2%	32.6%
女性50代	1241	12.7%	24.3%	6.0%	15.5%	2.6%	7.7%	8.9%	30.3%	3.0%	39.4%
女性60代	1052	14.3%	27.6%	5.6%	16.0%	5.0%	7.6%	14.3%	28.8%	4.2%	37.1%

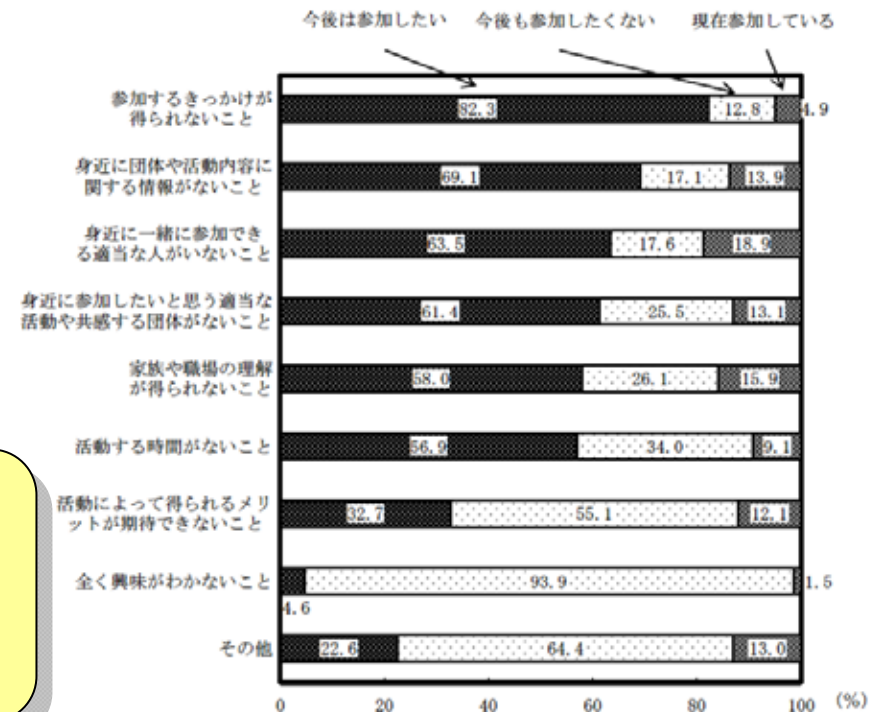
【4-5 地域活動への大人の参加】

地域の活動などへの参加を妨げる理由

地域の活動への参加を妨げる要因としては、仕事等のために時間がないこと(約36%)のほかに、参加するきっかけが得られないこと(約14%)や、情報がないこと(約11%)などを挙げる人が多い。



地域の活動などへの参加に関する今後の意向 (参加を妨げる要因別)

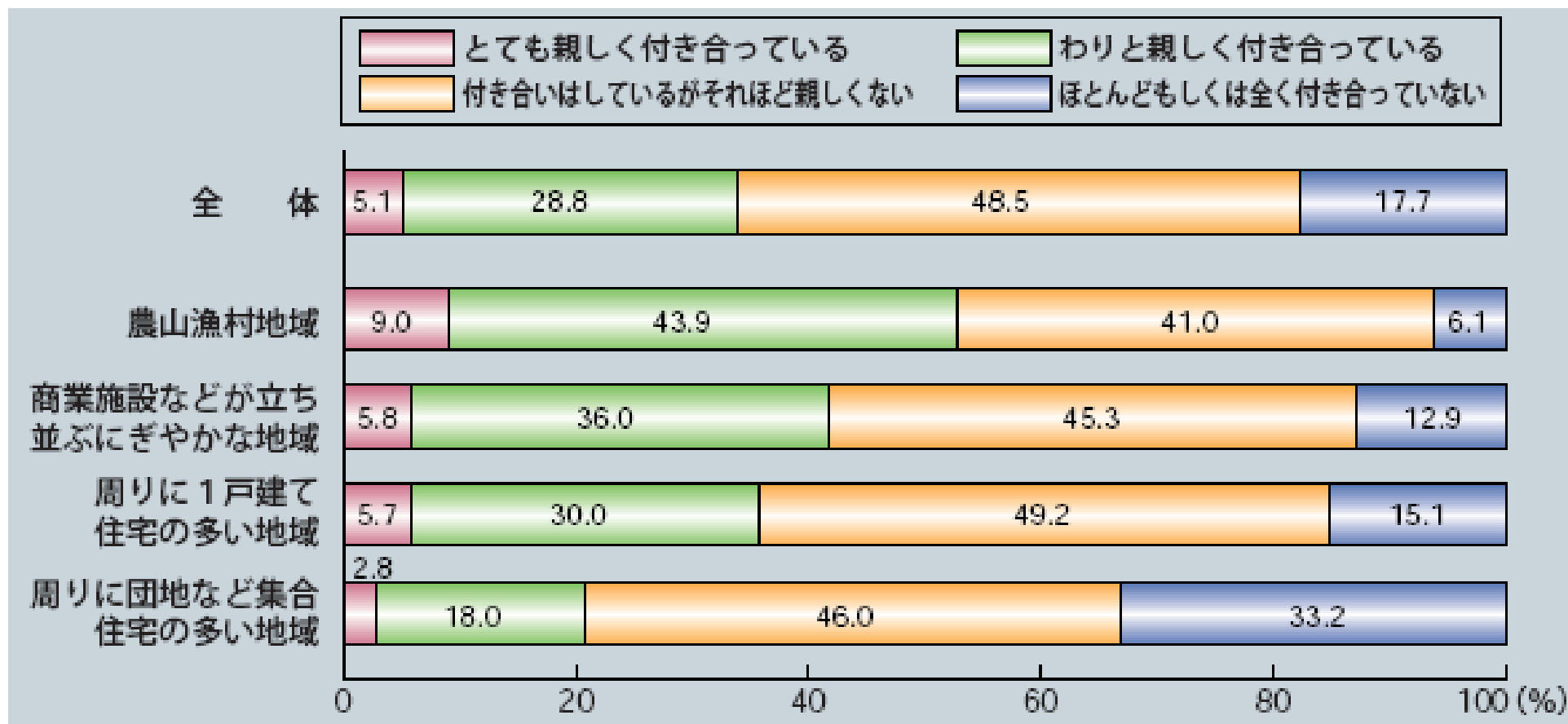


参加を妨げる要因として「参加するきっかけが得られないこと」や「情報がないこと」を挙げている人の中には、他の要因を挙げた人に比べ、今後参加したいという希望を持っている人が多く、これらの者は条件が整えば参加する可能性が相当程度あるものと考えられる。

4-6 現在の近所づきあいの程度

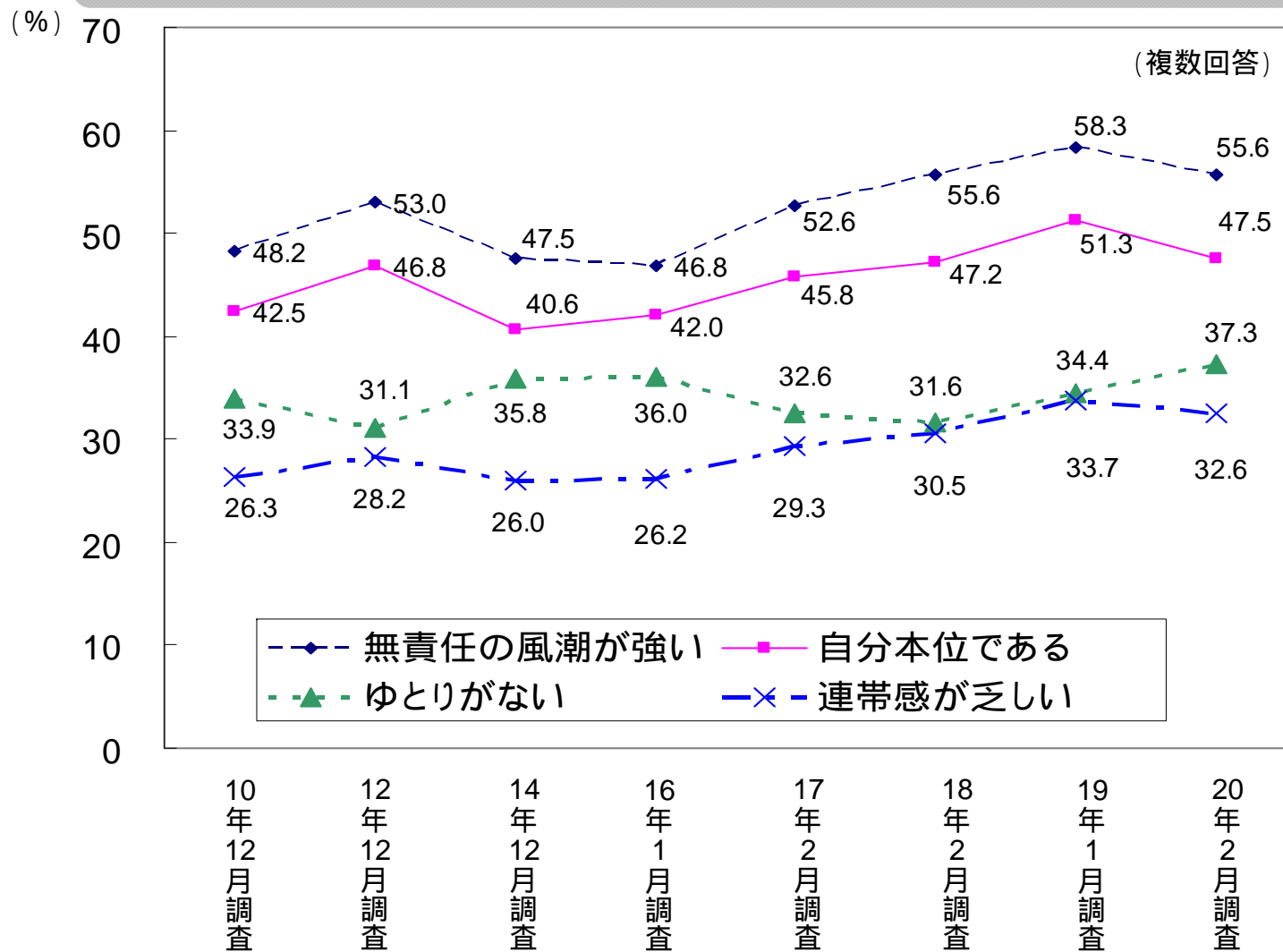
「とても親しく付き合っている」「わりと親しく付き合っている」を合わせると、「農産漁村地域」では約5割であるが、「周りに団地など集合住宅の多い地域」では約2割となっている。

地域における人間関係については、農村部と都市部とでは状況が異なっていることから、このような地域の特性等を踏まえた柔軟な取組が必要となっている。



4-7 現在の世相に関するイメージ（暗いイメージ）

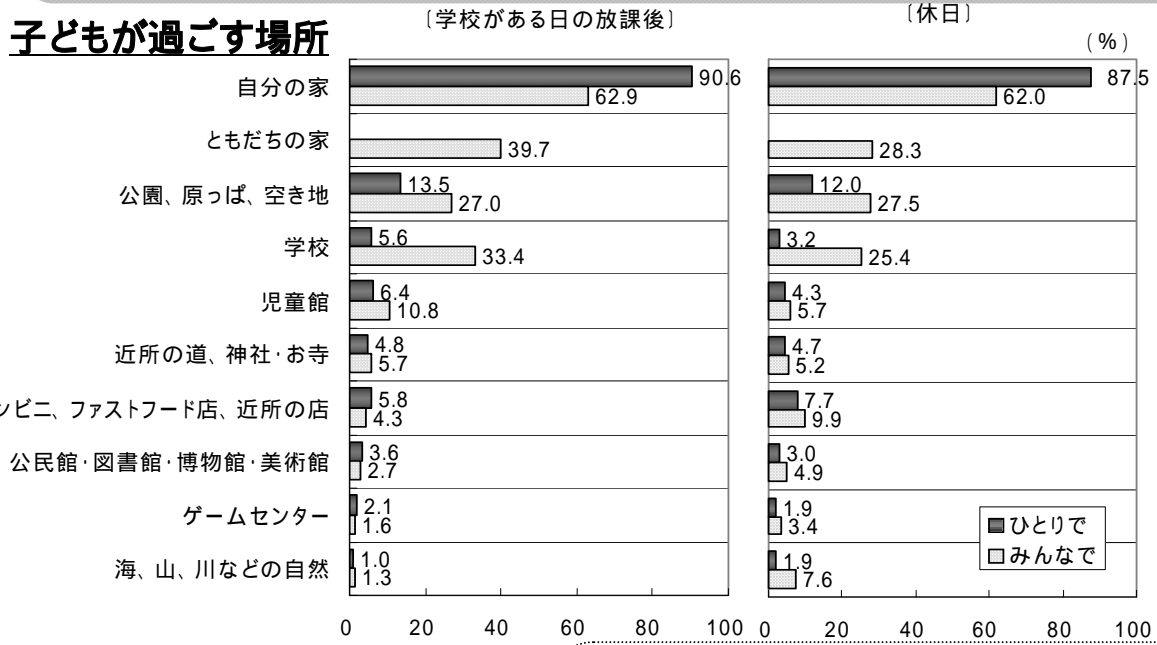
現在の世相に関するイメージ(暗いイメージ)として、「無責任の風潮が強い」、「自分本位である」等が挙げる人の割合が増加傾向にある。



【4-8 小・中学生の放課後・休日の過ごし方】

放課後・休日に過ごす場所

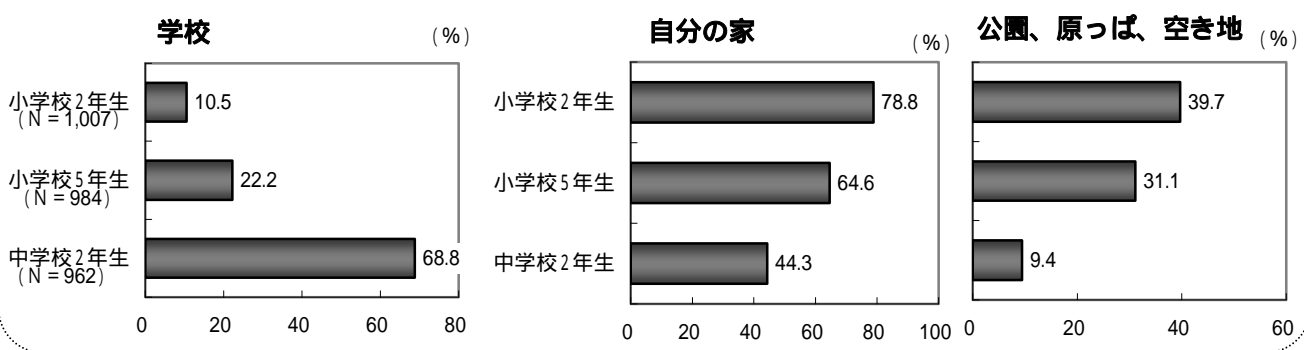
ひとりで過ごす場所は、平日・土日とも「自分の家」が約9割。
 みんなで過ごす場所は、「家」は約6割、次いで「公園・原っぱ・空き地」「学校」が約3割。
ひとりの時もみんなで過ごす時も子どもの活動は屋内中心。



学年別の放課後に過ごす場所の傾向は、高学年ほど学校で過ごす割合が高く、低学年ほど自分の家や地域内(公園・原っぱ・空き地)で過ごす割合が高い。

上記グラフの項目の中から多いものを3つまで選択。

学年によって回答割合に大きな違いが出た場所(学校がある日の放課後)



資料: 文部科学省委託
 「地域の教育力に関する実態調査」(平成18年)

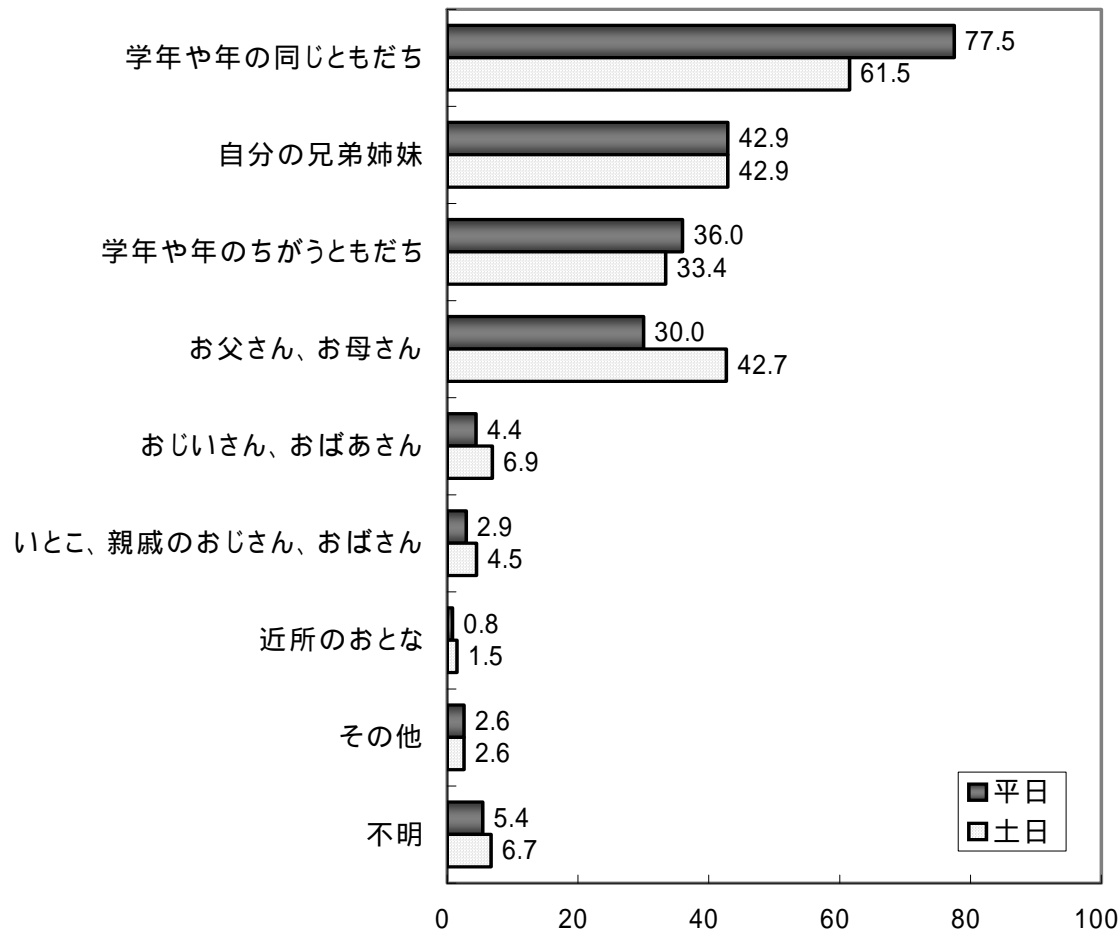
【4-8 小・中学生の放課後・休日の過ごし方】

放課後・休日に一緒に過ごす相手

放課後、土日ともに「学年や年の同じともだち」が6～7割と最も高い。「学年や年のちがうともだち」は3～4割。
子どもは同年齢の友達や家族以外の異世代との交流機会が少ない。

一緒に過ごす相手

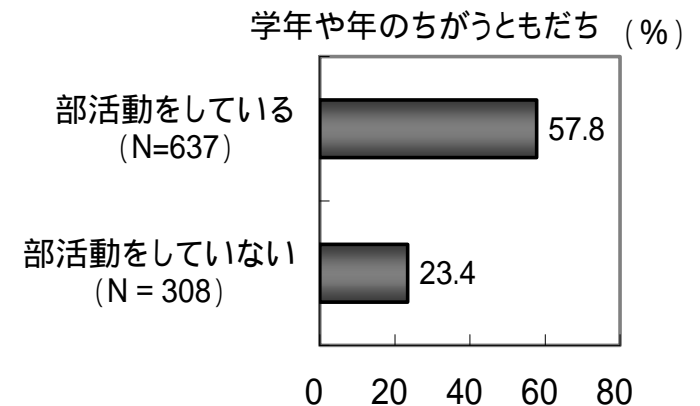
(%)



上記グラフの項目の中から多いものを3つまで選択。

学年別に見ると、学年が上がるにつれ、交流範囲が家族から学校の友達に以降している。
 また、中学生については、部活動をしている方が「学年や年のちがうともだち」との交流が多い。

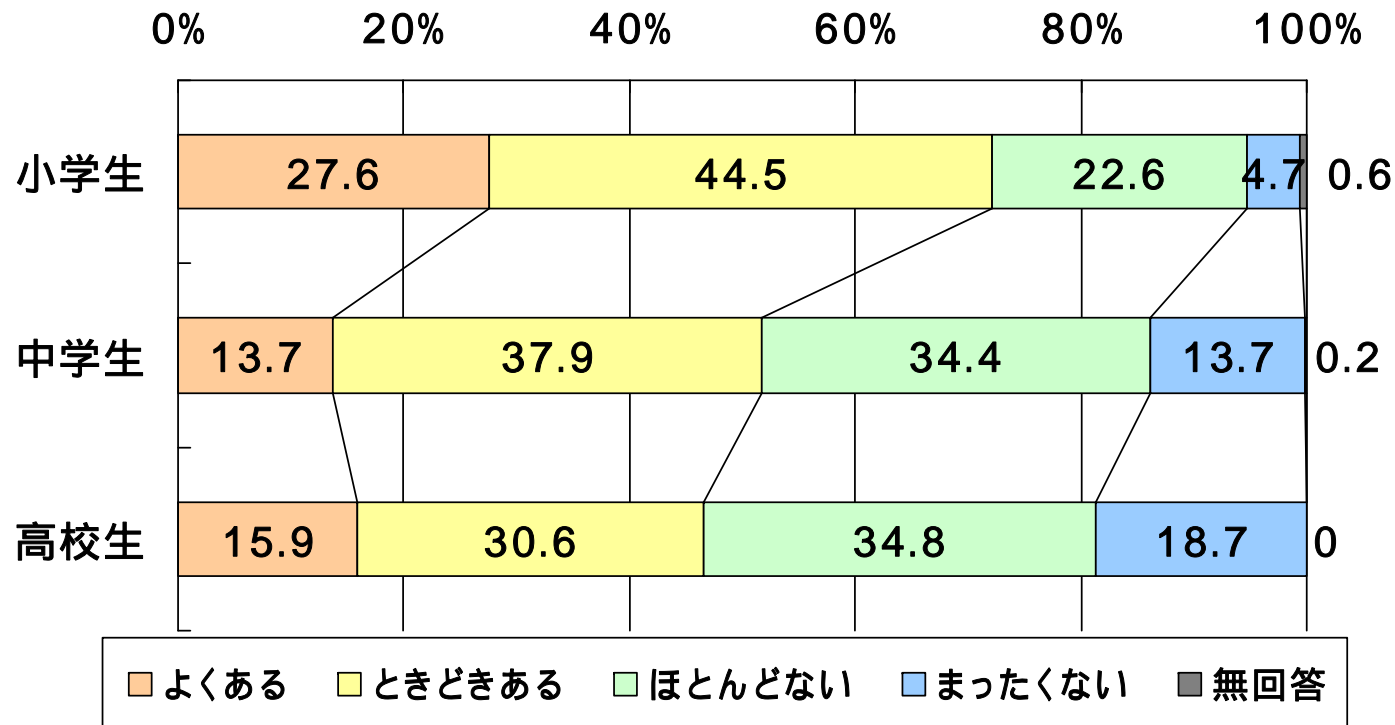
部活動(中2)の有無のクロス



4-9 家族以外の異なる世代の人々との交流

中学生、高校生になるにつれて異世代との交流が減少してきている。

家族以外の子どもやお年寄りなど世代の異なる人たちとふれあうことについて



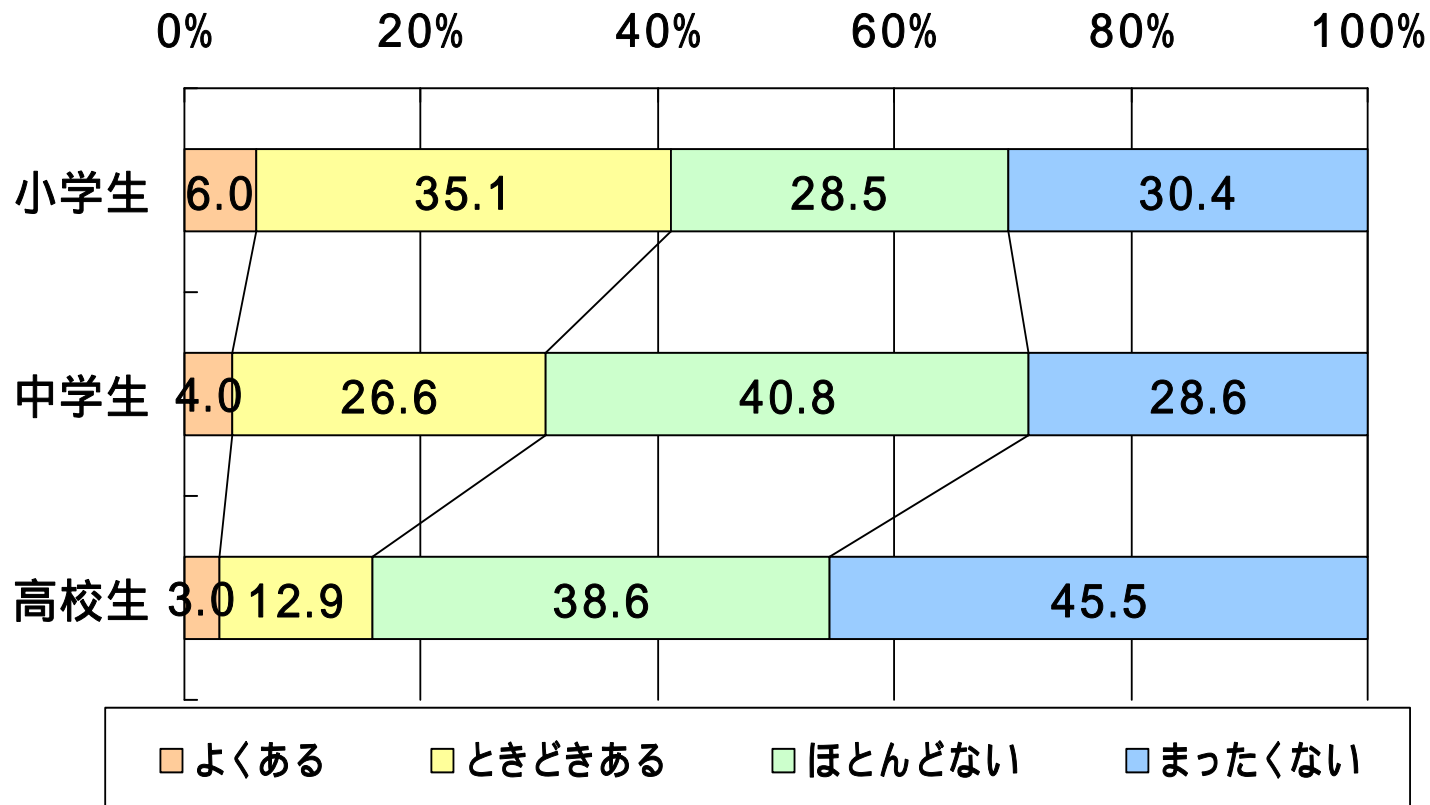
内閣府政策統括官

「第5回情報化社会と青少年に関する意識調査報告書」(平成19年2月)より作成

4-10 ボランティア活動等の参加状況

中学生、高校生になるにつれてボランティア活動等への参加割合が減少している。

地域社会などでボランティア活動やリサイクル運動などに参加することについて

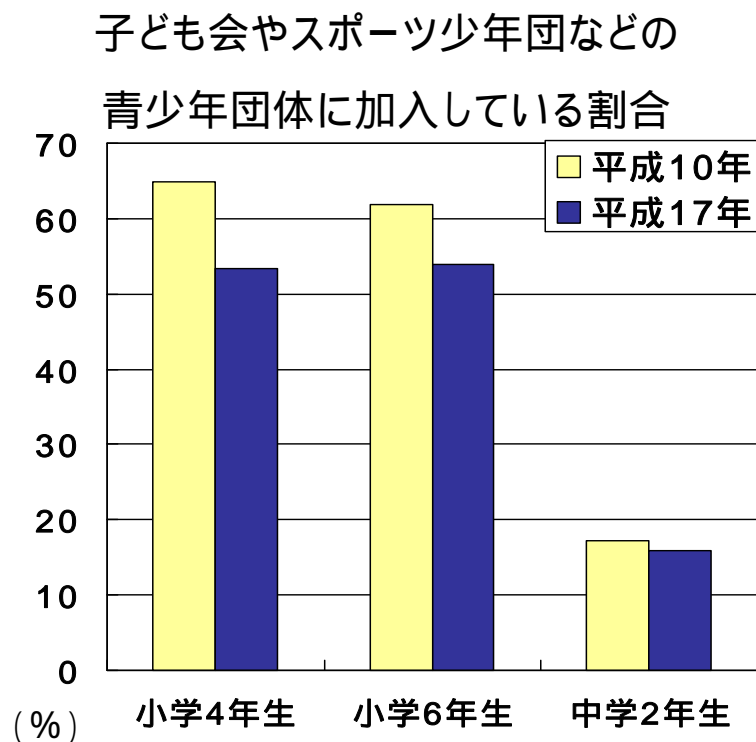


内閣府政策統括官

「第5回情報化社会と青少年に関する意識調査報告書」(平成19年2月)より作成

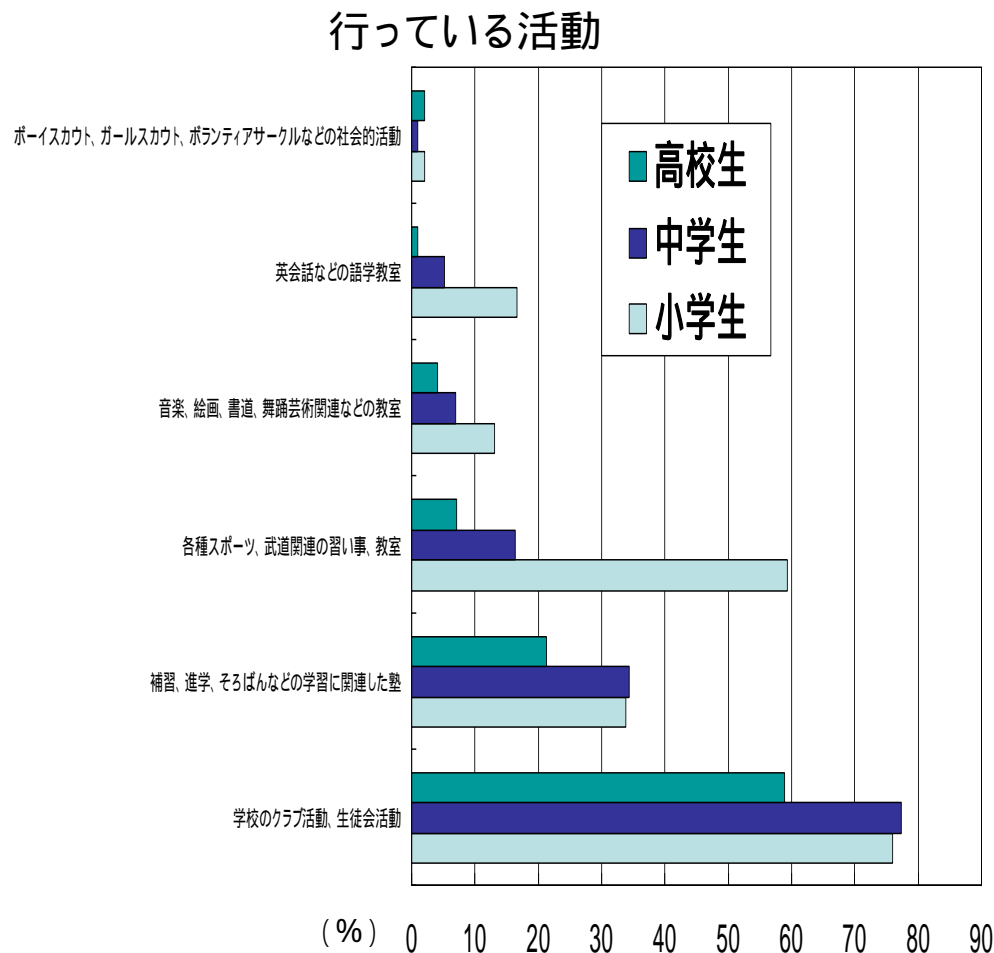
4-11 青少年団体等への加入状況 (加入している割合、行っている活動)

子ども会やスポーツ少年団などの青少年団体への加入率は減少している。
学校の部活動や塾などの活動をしている者が多い。



平成10年:子どもの体験活動等に関するアンケート調査報告書
(文部省委嘱)

平成17年:独立行政法人国立青少年教育振興機構
『『青少年の自然体験活動等に関する実態調査』報告書
平成17年度調査』より作成



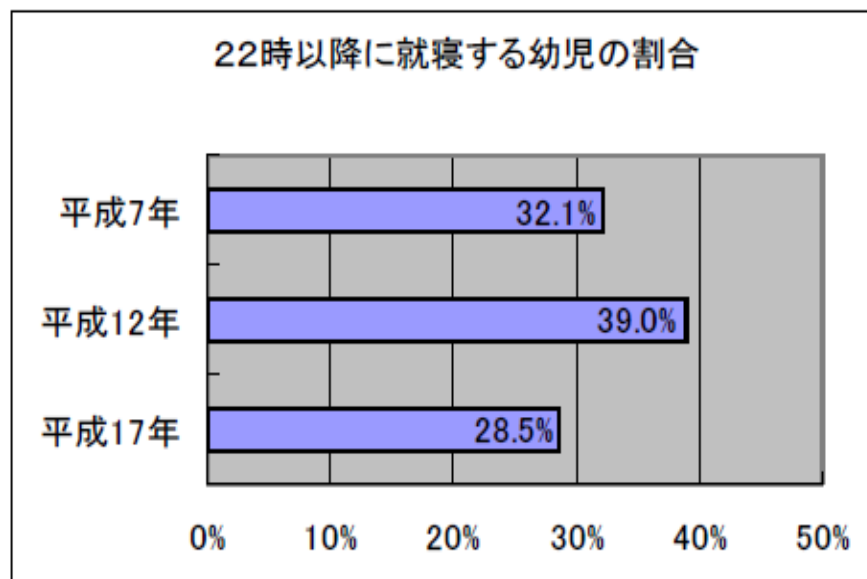
内閣府政策統括官

『第5回情報化社会と青少年に関する意識調査報告書』
(平成19年2月)より作成

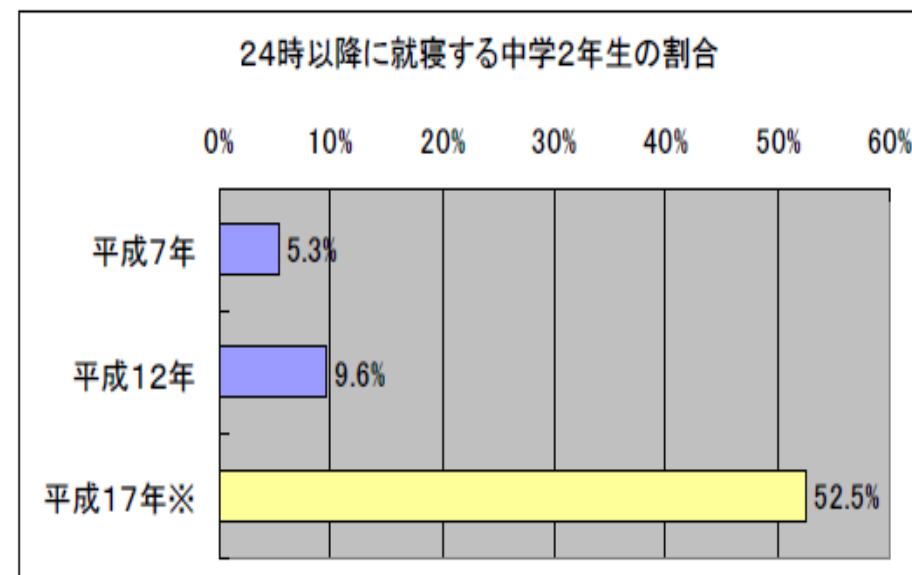
5 子ども

5-1 22時以降に就寝する幼児・24時以降に就寝する中学2年生の割合

子どもの生活は幼児期から夜型となっている。



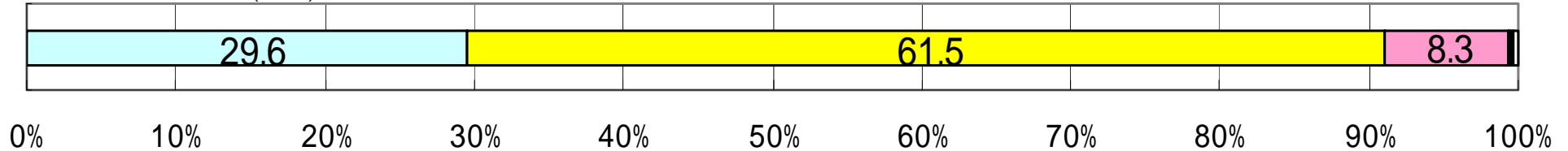
ベネッセ教育開発研究センター
『幼児の生活アンケート(平成17年)』



平成7年、平成12年については日本体育・学校保健センター
『平成12年度児童生徒の食生活等実態調査』
平成17年については文部科学省『義務教育に関する意識調査』

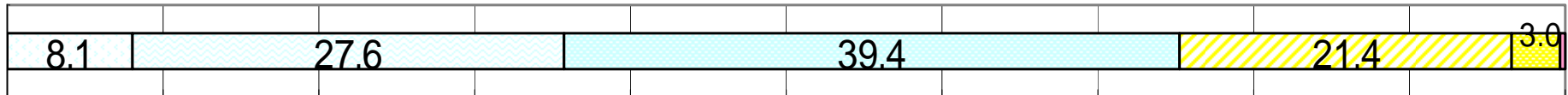
5-2 平日の起床時間の状況 (未就学児、小・中学生)

< 未就学児 (5歳) >

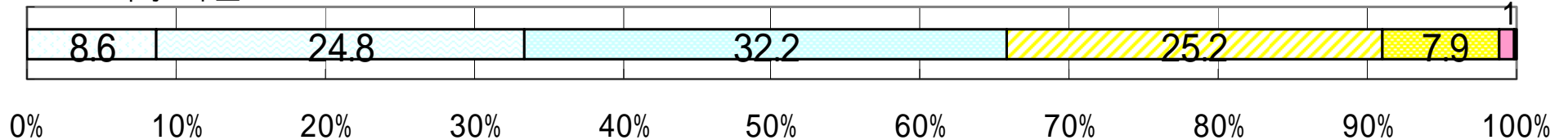


□ 午前7時前 ■ 午前7時台 ■ 午前8時台 □ 午前9時以降 □ 時間が不規則 □ 不詳

< 小学6年生 >



< 中学3年生 >



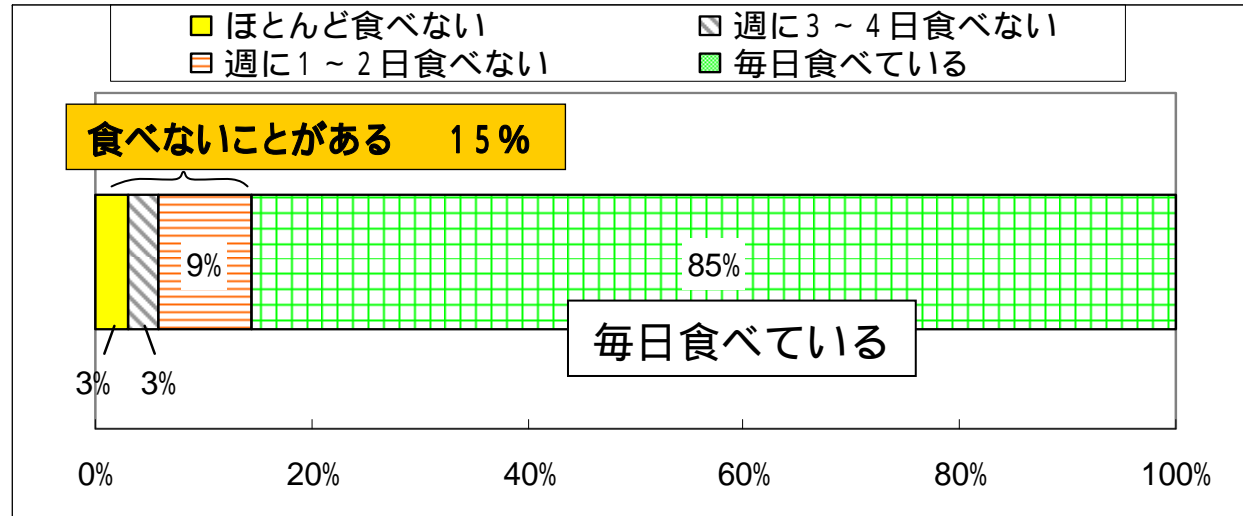
□ 午前6時より前 □ 午前6時以降、午前6時30分より前
 □ 午前6時30分以降、午前7時より前 ■ 午前7時以降、午前7時30分より前
 ■ 午前7時30分以降、午前8時より前 ■ 午前8時以降
 □ その他・無回答

【5-3 朝食欠食の状況】

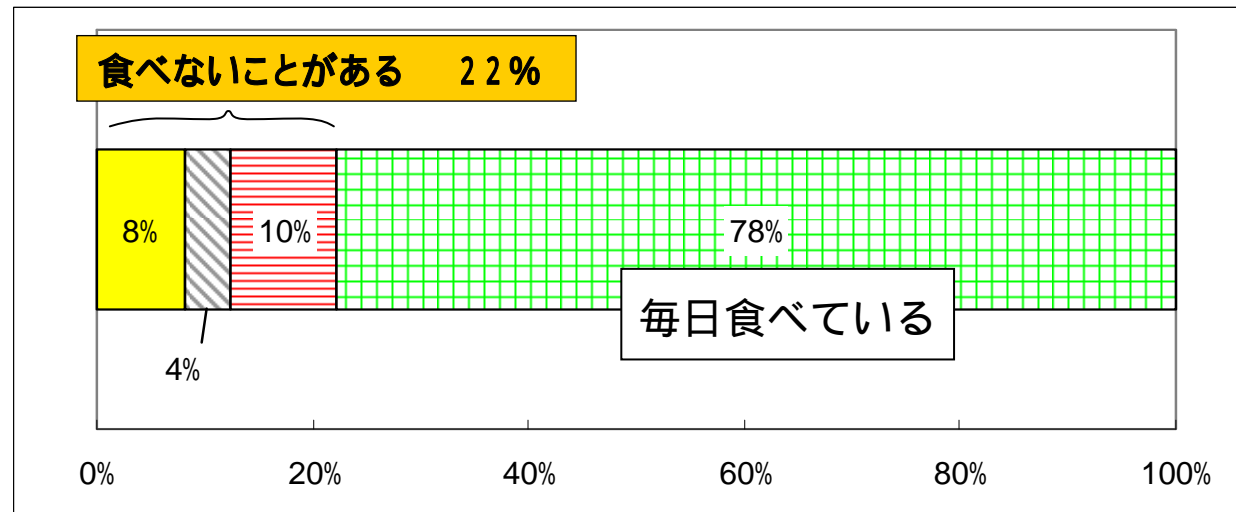
朝食を食べないことがある割合

朝ごはんを食べないことのある小・中学生が2割程度いる。

小学生



中学生



調査対象: 全国の小中学生・保護者等 36,000名

出典: 平成17年度文部科学省委嘱調査「義務教育に関する意識調査」より

【5-3 朝食欠食の状況】

朝食を食べなかった理由

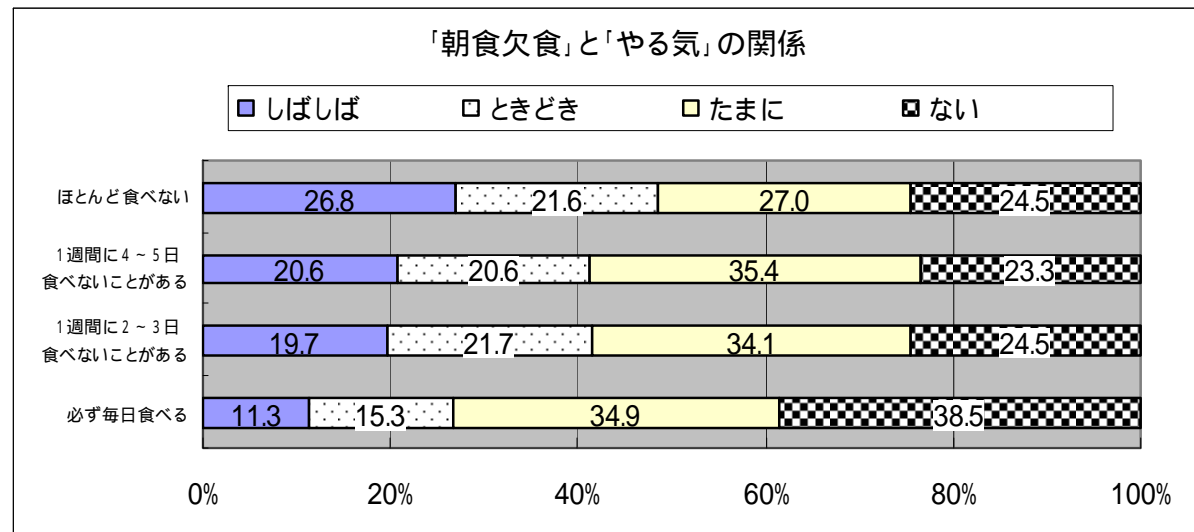
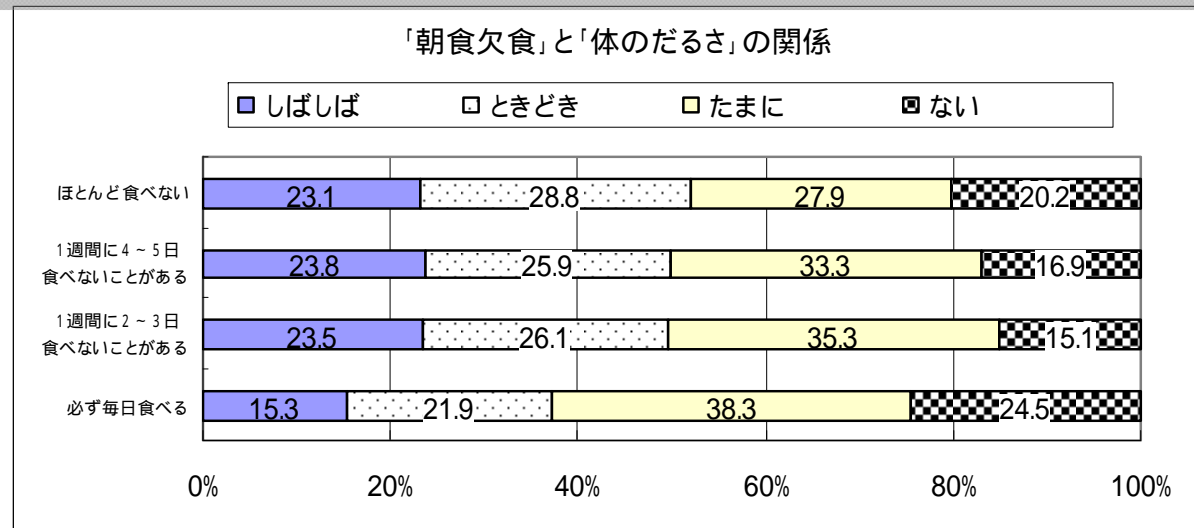
朝食を食べなかった理由は、「食べたくなかった」「起きるのが遅くて時間がなかった」ことが主な要因。

	小学校2年生		小学校4年生		小学校6年生		中学校2年生		高校2年生	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子
起きるのが遅くて食べる時間がなかった ので	47,4	31,3	17,4	30,0	26,7	35,4	39,6	31,6	54,9	40,3
食べたくなかった ので	31,6	46,9	47,8	40,0	60,0	50,8	32,1	39,2	23,2	34,9
他の家族もあまり 食べないので	0,0	0,0	0,0	6,7	0,0	0,0	0,0	0,0	0,0	1,6
太りたくない ので	0,0	0,0	4,3	0,0	0,0	0,0	5,7	1,3	0,0	0,0
食事が用意されて いなかった ので	21,1	15,6	17,4	6,7	6,7	7,7	7,5	12,7	8,5	8,5
その他	0,0	6,3	13,0	16,7	6,7	6,2	15,1	15,2	13,4	14,7
有効回答数	19,0	32,0	23,0	30,0	45,0	65,0	53,0	79,0	82,0	129,0

【5-3 朝食欠食の状況】

「朝食欠食」と「体のだるさ」の関係

朝食を欠食する日の多い小中学生ほど、体のだるさを感じている。



(独)日本スポーツ振興センター「平成17年度児童生徒の食生活等実態調査」

【5-3 朝食欠食の状況】

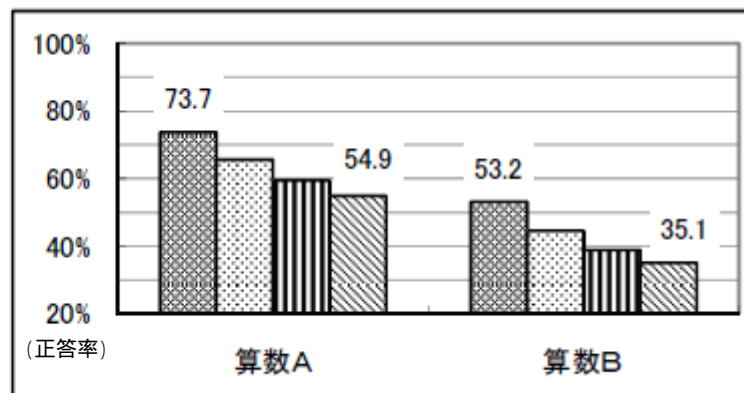
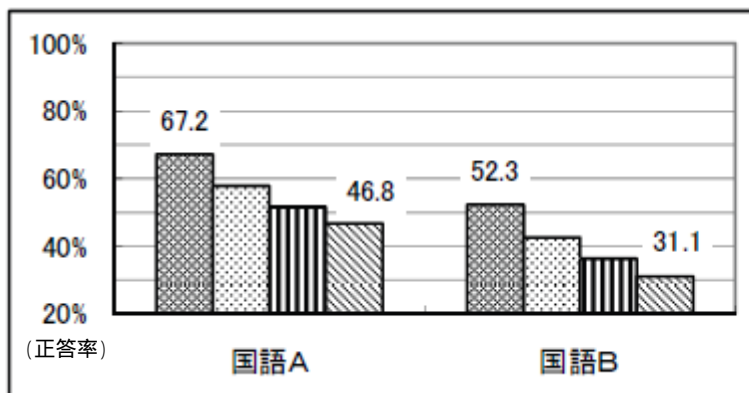
朝食と学力調査の正答率の関係

朝食を毎日食べる小中学生の方が、正答率が高い傾向が見られる。

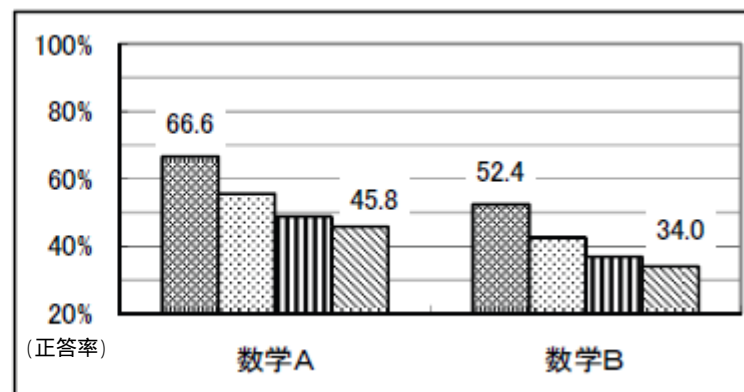
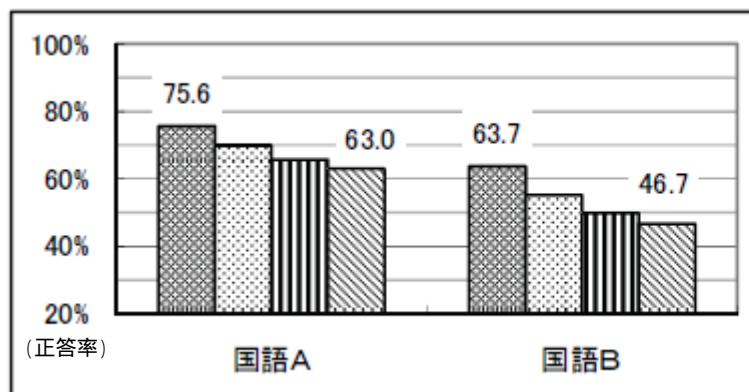
質問：朝食を毎日食べていますか

■ している
■ どちらかといえば、している
■ あまりしていない
■ 全くしていない

< 小学6年生 >

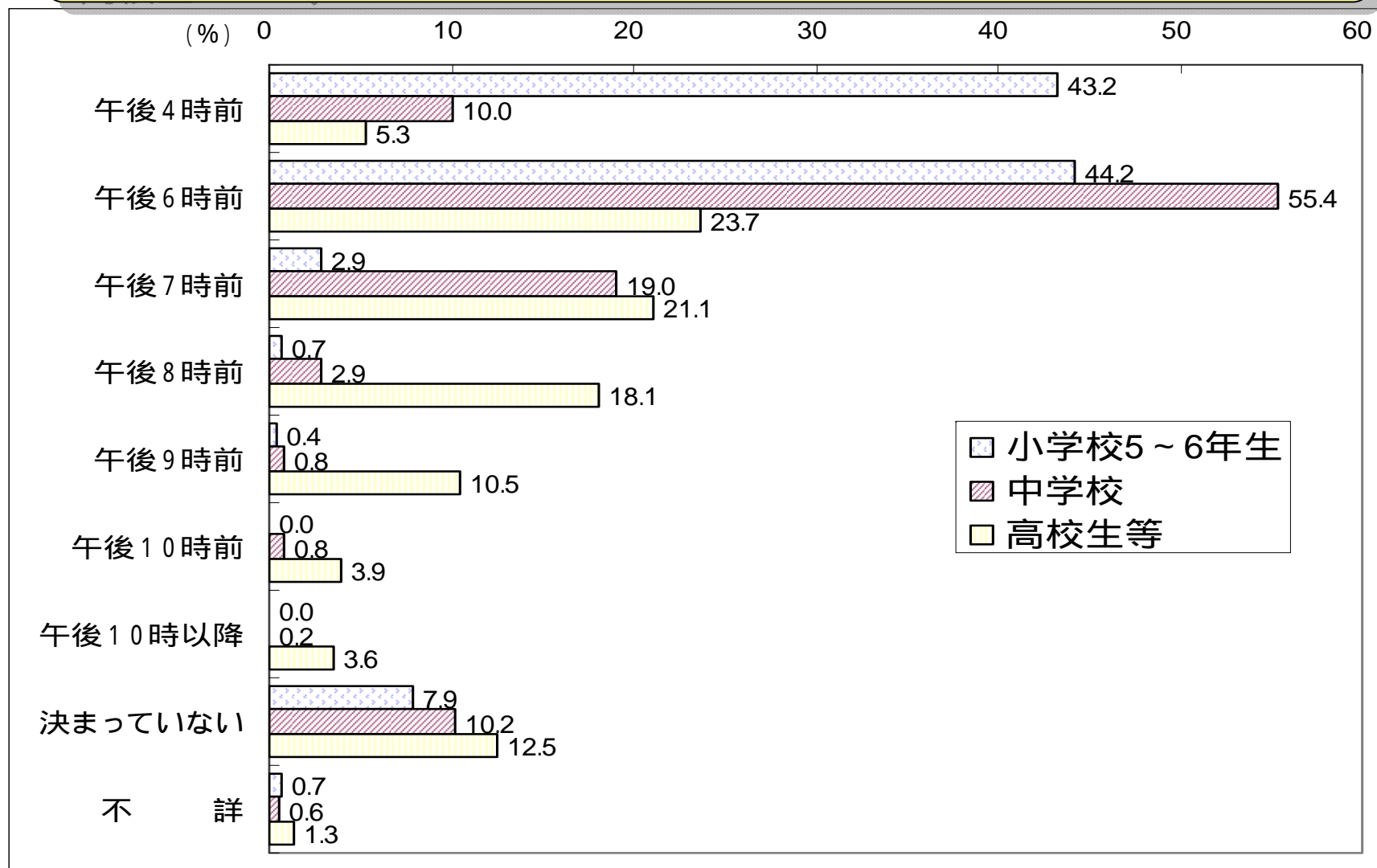


< 中学3年生 >



5-4 帰宅時間の状況

午後6時以降に帰宅する子どもは小学生(5・6年生)の約4%、中学生の24%、高校生の57%。

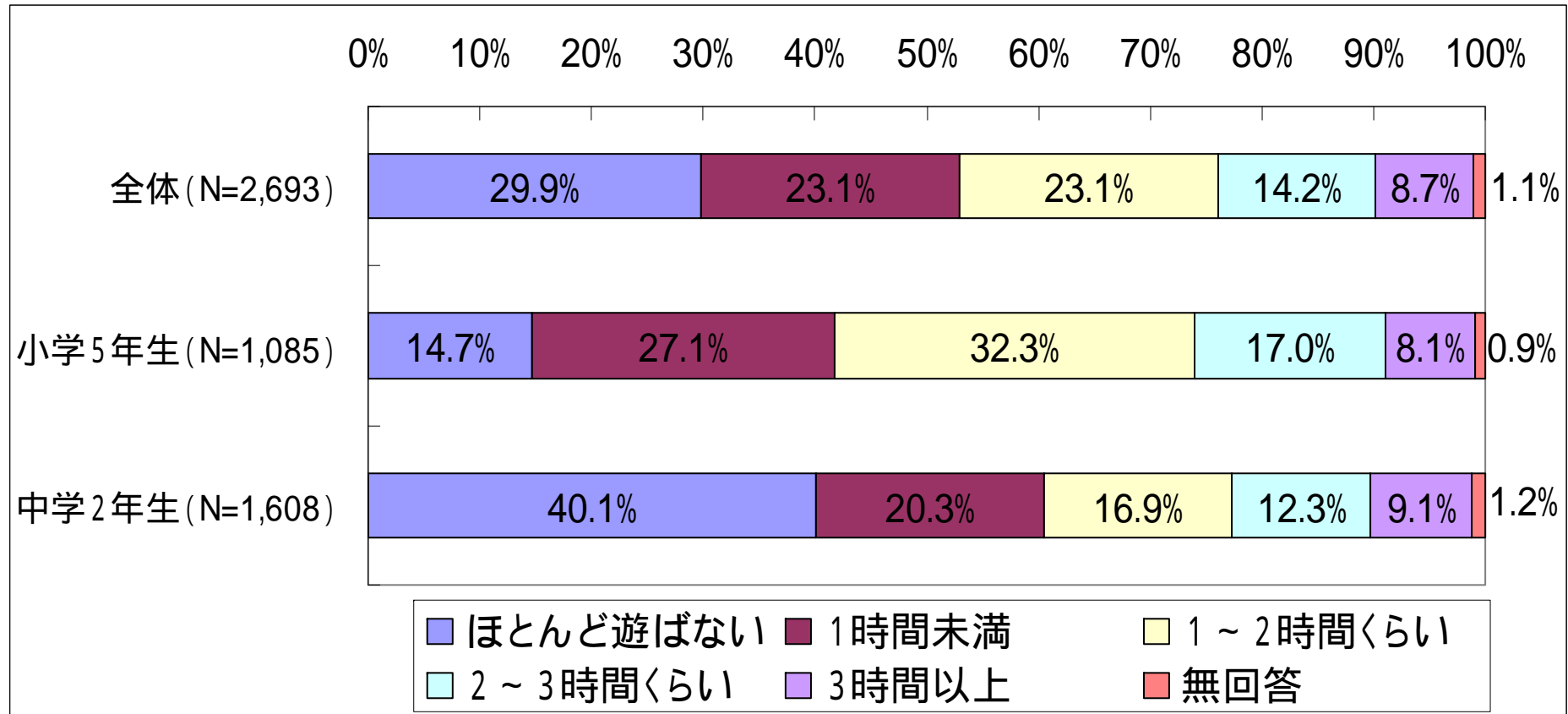


注) 「高校生等」とは「高校」、「各種学校・専修学校・職業訓練校」の合計である。

資料:厚生労働省 平成16年度全国家庭児童調査

5-5 学校から帰宅後の遊ぶ時間

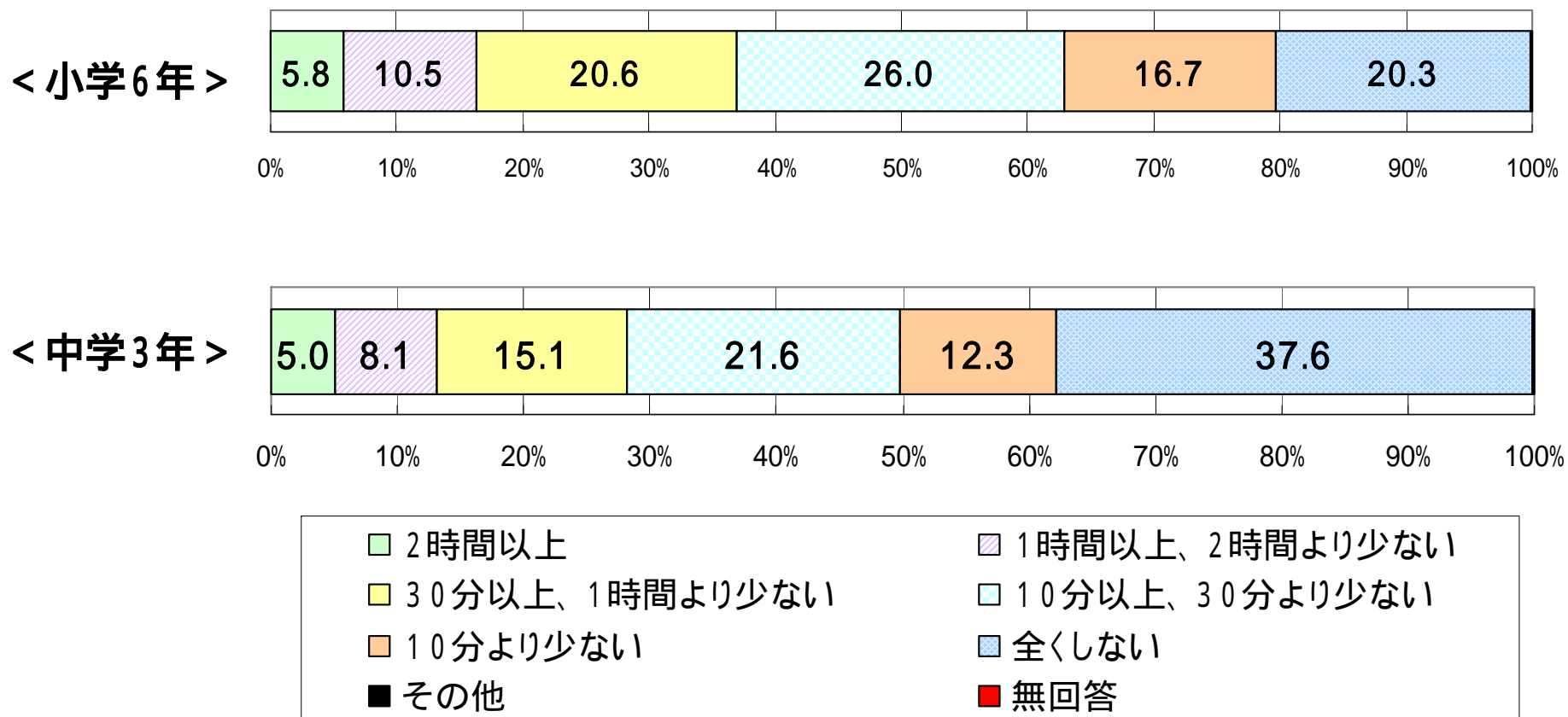
小5、中2の平均3割が学校から帰宅後、ほとんど遊んでいない。



川村学園女子大学子ども研究会
『子どもたちの日常行動や親子関係、
各種体験等に関する調査』
(平成19年6・7月調査)

5-6 平日の学校外における読書時間の状況(小・中学生)

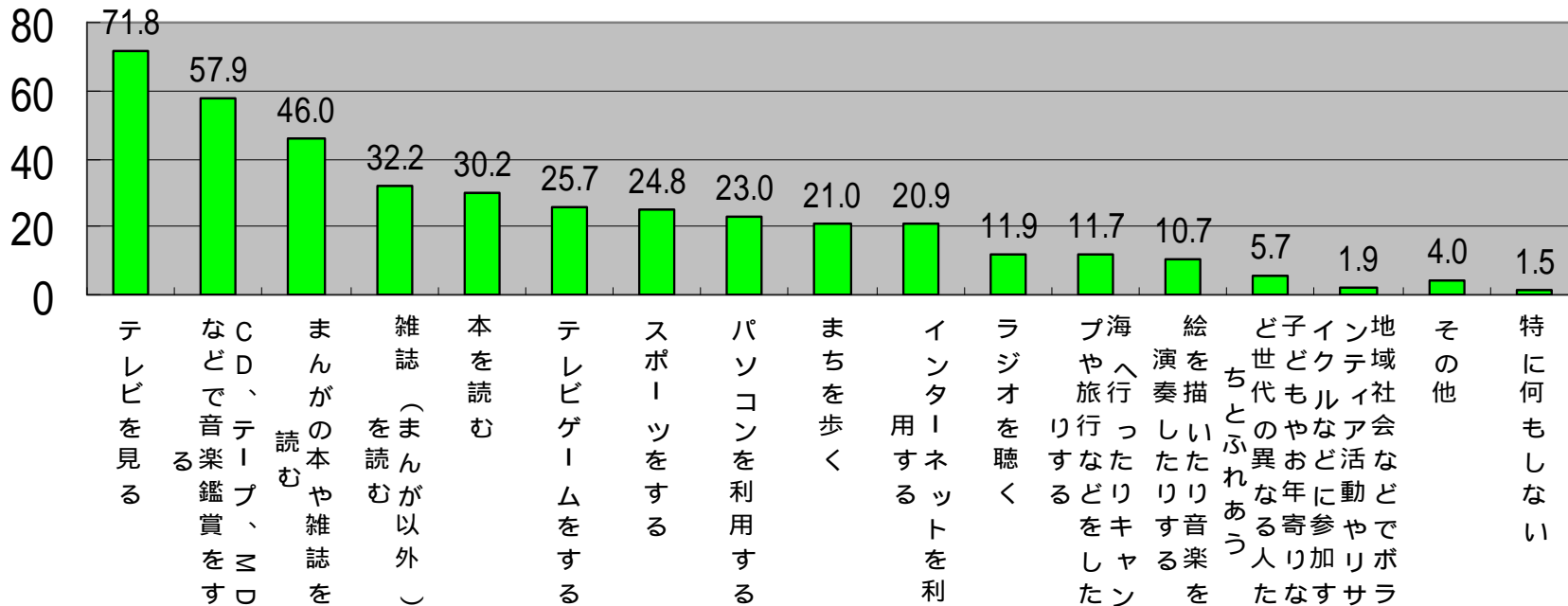
中学生の読書時間は、小学生と比べて短い傾向がある。



自由時間の過ごし方

青少年の自由時間の過ごし方は一人遊びが多い。

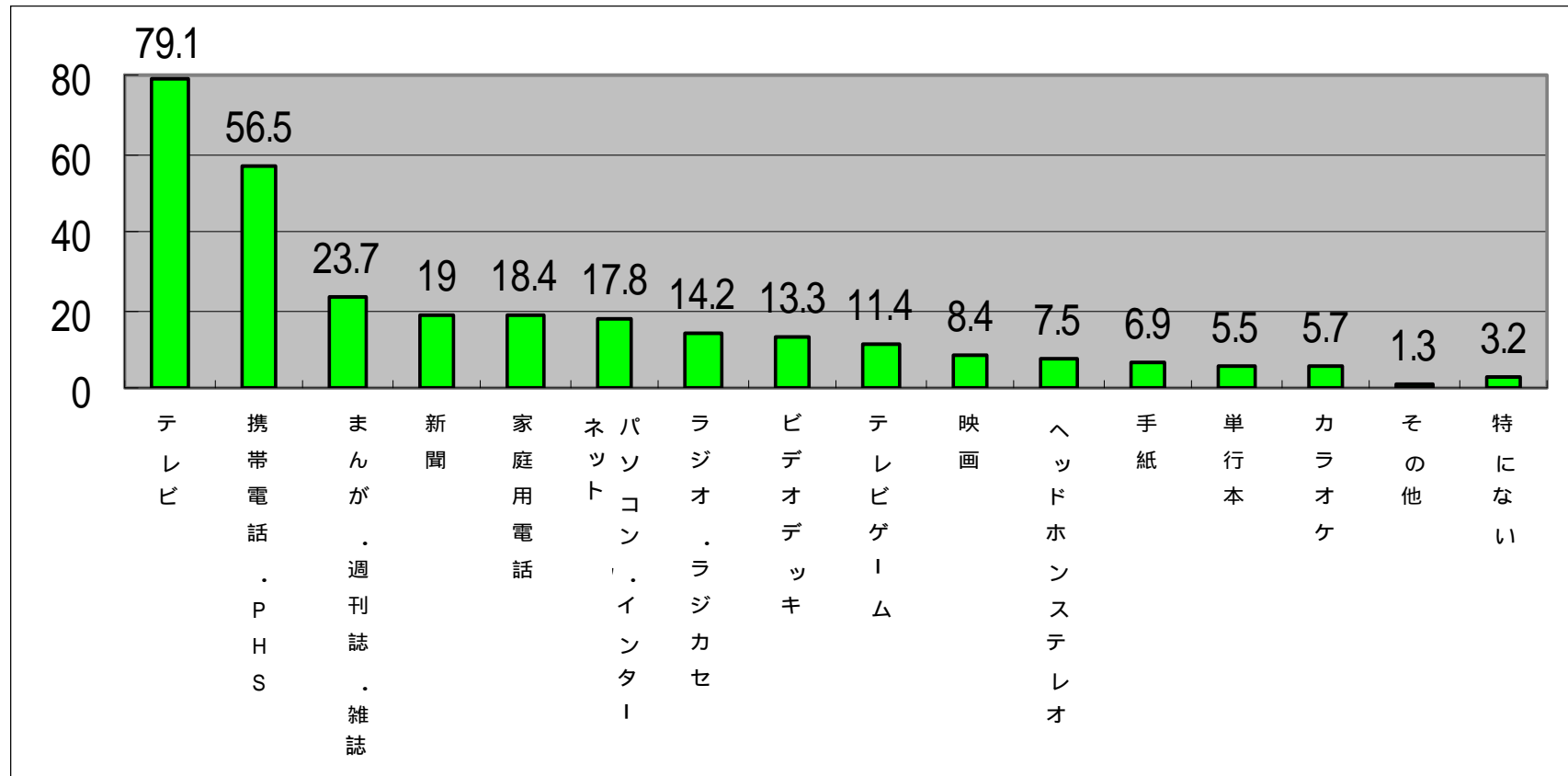
自由時間の過ごし方(12～30歳)



なくてはならないもの

5割を超える青少年が「なくてはならないもの」としているものは、「テレビ」と「携帯電話・PHS」のみである。

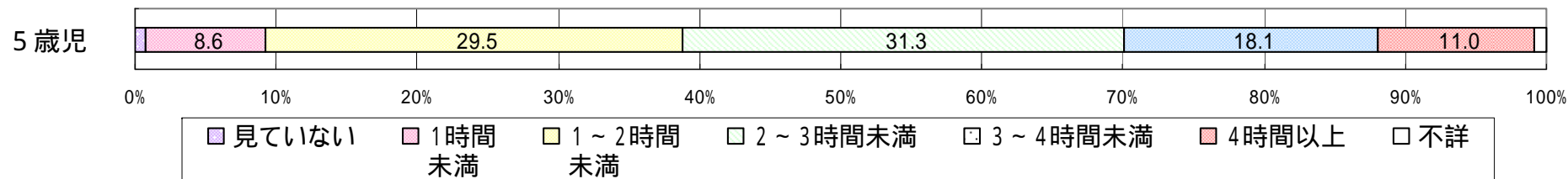
なくてはならないもの(12～30歳)



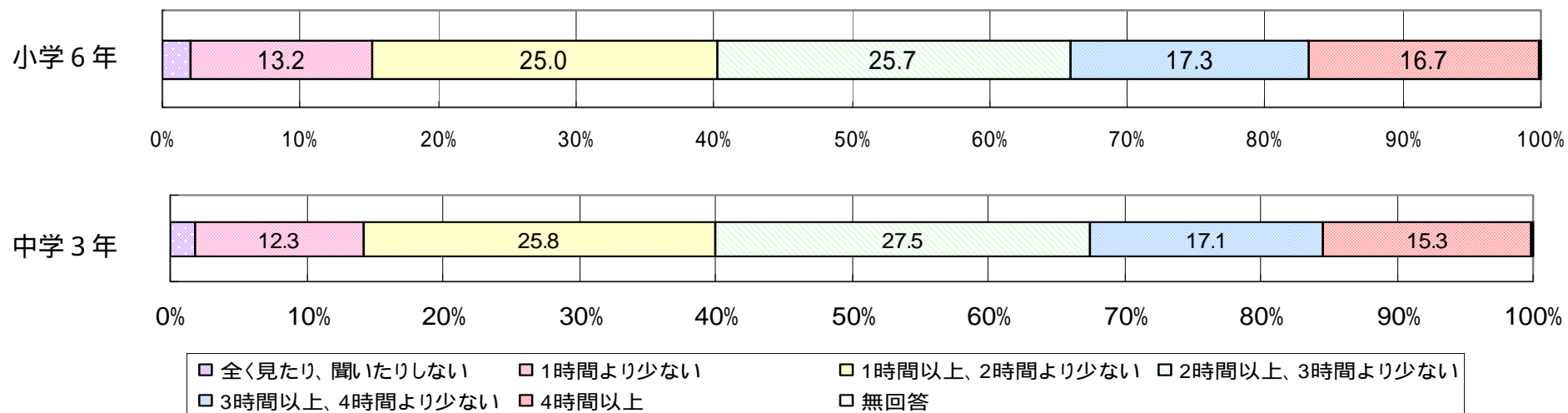
5-8 平日にテレビ、ビデオ、DVDを視聴する時間 (未就学児、小・中学生)

5歳児、小学6年、中学3年のいずれにおいても、約6割の子どもが1日2時間以上テレビ等を見ている。

ふだんの日にテレビを見る時間



平日(月～金曜日)に1日当たりどれくらいの時間、テレビやビデオ・DVDを見たり聞いたりするか

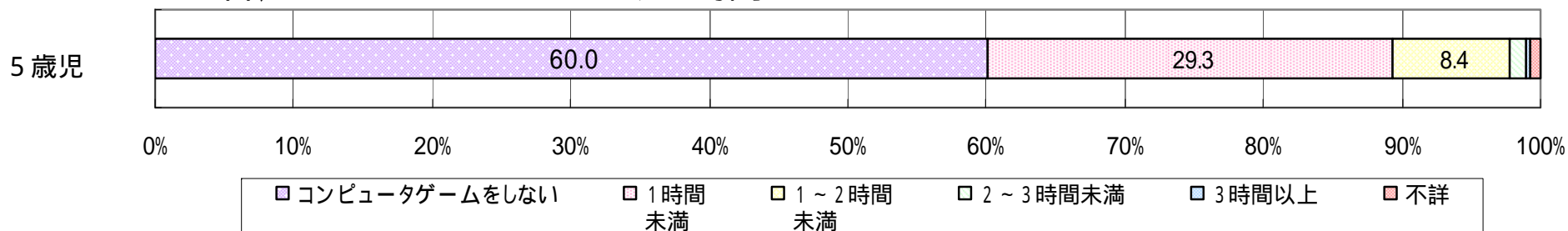


【5-9 ゲーム、インターネット、携帯電話】

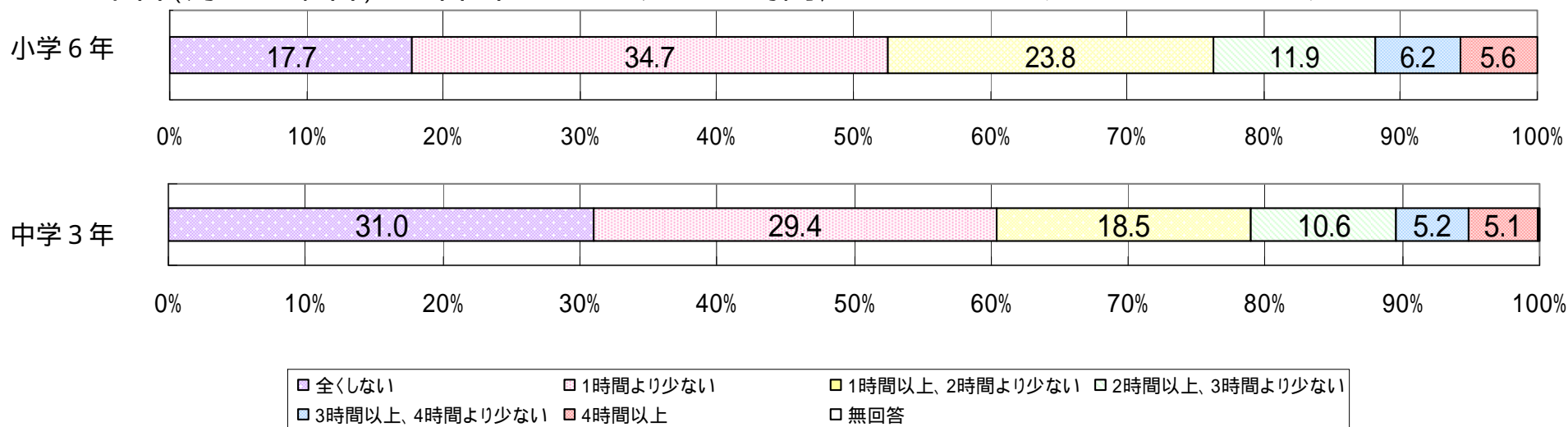
平日にテレビゲームをする時間（未就学児、小・中学生）

5歳児の約1割が1日当たり1時間以上コンピューターゲームを、
小6の約5割弱・中3の約4割が、1日当たり1時間以上テレビゲームやインターネットをしている。

ふだんの日、コンピューターゲームをする時間

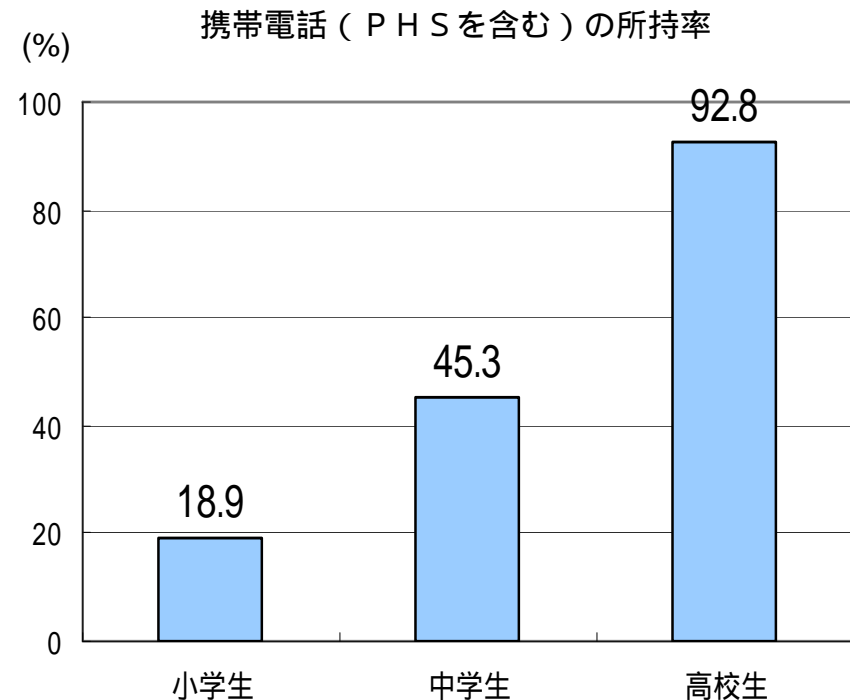
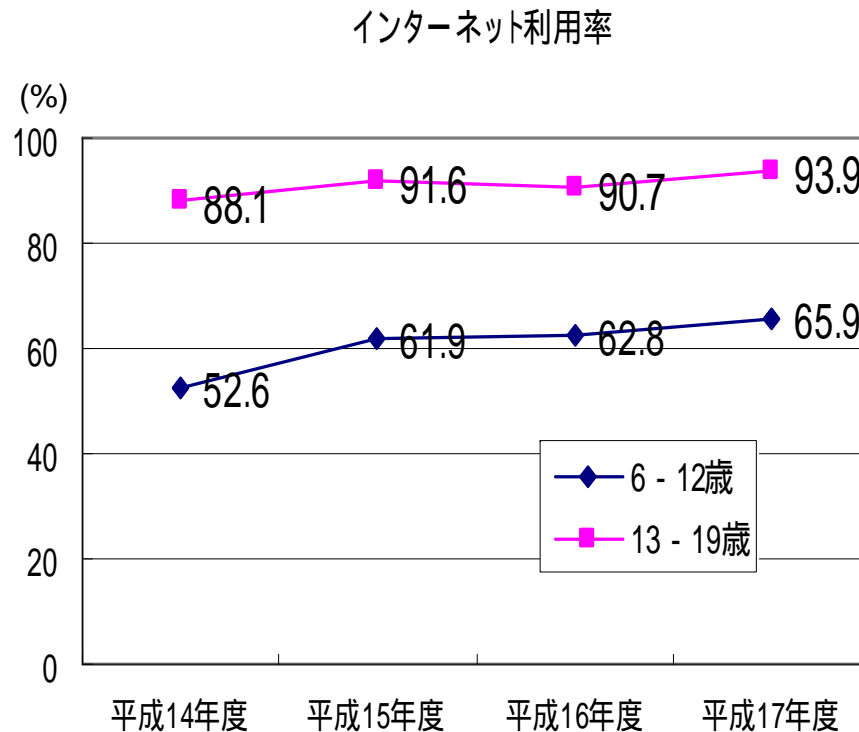


平日（月～金曜日）に1日当たりどれくらいの時間、テレビゲームやインターネットをするか



【5-9 ゲーム、インターネット、携帯電話】

インターネット利用率・ 携帯電話（PHSを含む）の所持率



総務省『通信利用動向調査報告書』（平成18年）

ベネッセ教育研究開発センター
『第1回子どもの生活実態基本調査』（平成17年）

【5-9 ゲーム、インターネット、携帯電話】

携帯電話の利用状況 (少年一般・非行少年)

1日にメールをする回数(平均)

中学男子		中学女子		高校男子		高校女子	
一般	非行	一般	非行	一般	非行	一般	非行
34.23回	41.34回	36.79回	49.64回	25.86回	40.09回	30.32回	43.52回

一般： 全国6府県から中学・高校各3校の各3クラスを選定し、当該クラスの生徒全員を対象に調査

非行： 全国の警察が検挙した犯罪少年のうち、中2又は高3の者を対象に調査

携帯電話への依存

(%)

		携帯電話がないと落ち着かない				携帯電話を持っていないと仲間とのつき合いがうまくいかない				メールのやりとりを終わらせることができず、延々と続いてしまうことがある				人と顔を合わせてコミュニケーションをとるのが面倒なことがある			
		中学		高校		中学		高校		中学		高校		中学		高校	
		男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
割合	一般	31.6	54.0	45.2	63.0	17.5	19.7	26.9	36.3	51.9 (17.3)	64.8 (31.2)	57.8 (17.0)	72.4 (23.2)	16.6 (5.7)	12.7 (2.7)	20.2 (4.7)	20.0 (2.6)
	非行	57.7	84.7	67.3	80.6	41.8	48.3	50.2	58.1	58.8 (22.7)	72.9 (33.9)	64.0 (21.7)	69.1 (30.9)	30.4 (6.7)	37.9 (11.8)	26.2 (6.0)	27.6 (8.1)

割合は「よくある」及び「ときどきある」を合計した割合。

()は「よくある」のみの割合で内数。

携帯電話の悪用

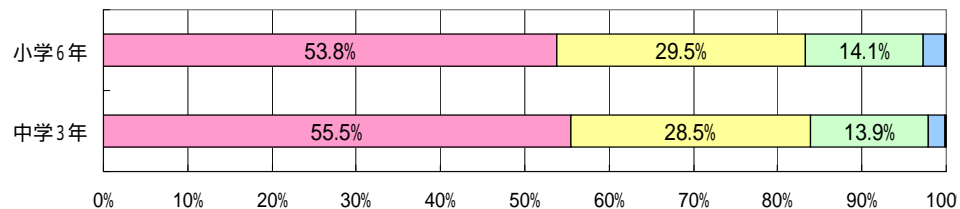
(%)

		出会い系サイトを利用したこと				アダルトサイトに接続したこと				授業中にメールを利用したこと			
		中学		高校		中学		高校		中学		高校	
		男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
割合	一般	5.7 (3.1)	15.6 (1.9)	21.2 (3.1)	21.2 (1.4)	8.4	4.8	31.4	5.6	13.9	16.3	72.2	71.6
	非行	15.4 (1.5)	43.7 (6.7)	34.6 (5.2)	33.8 (5.6)	15.0	11.0	23.5	7.3	47.4	58.0	82.8	78.0

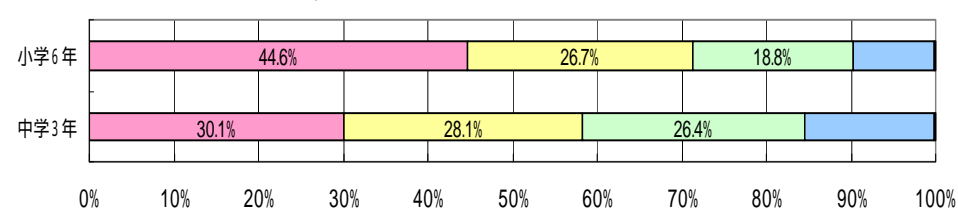
5-10 自然体験・奉仕体験、生活体験の有無 (小・中学生)

体の不自由なお年寄りや困っている人の手助けをした体験が「何度もある」又は「時々ある」子どもの割合は、約4割にとどまっている。

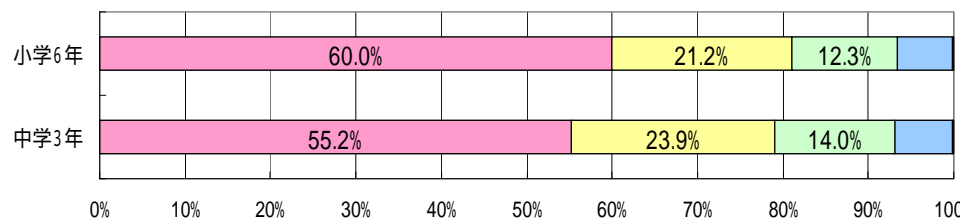
海、山、湖などで遊んだことがありますか



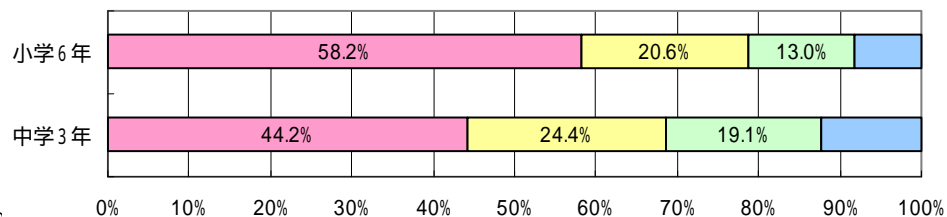
花を咲かせたり、野菜を育てたりしたことがありますか



生き物を飼育したことがありますか



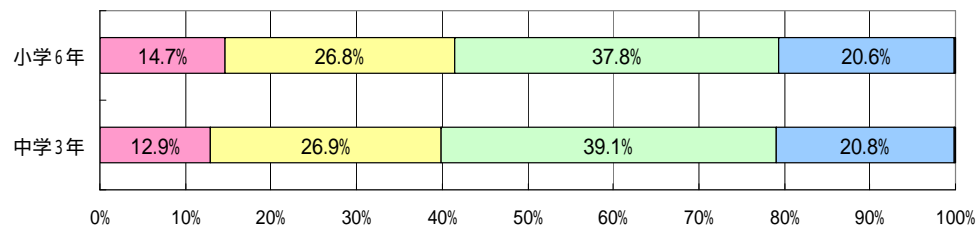
小さい子どもをおんぶやだっこしたり、遊んであげたりしたことがありますか



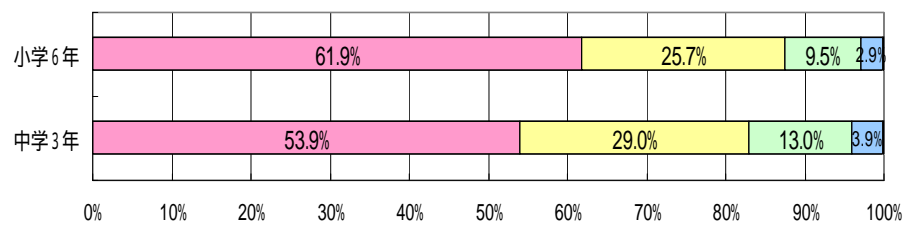
文部科学省 『平成19年度 全国学力・学習状況調査』

■ 何度もある ■ 時々ある ■ あまりない ■ 全くない □ その他

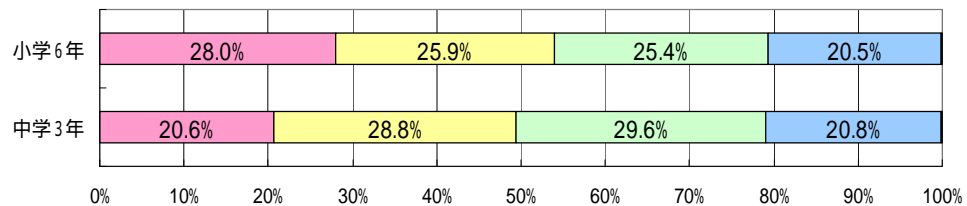
体の不自由なお年寄りや、困っている人の手助けをしたことがありますか



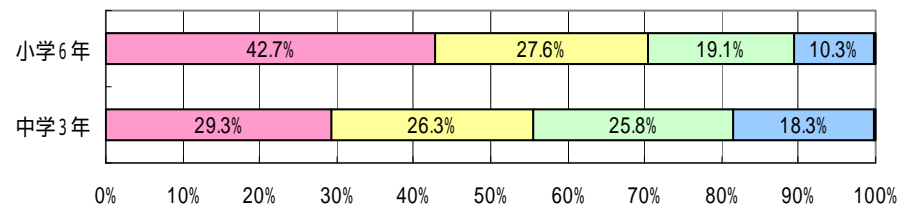
包丁やナイフを使って調理したことがありますか



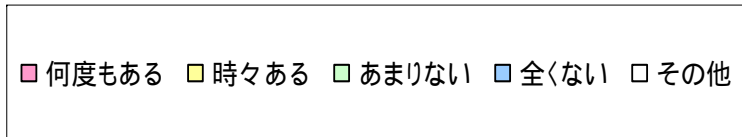
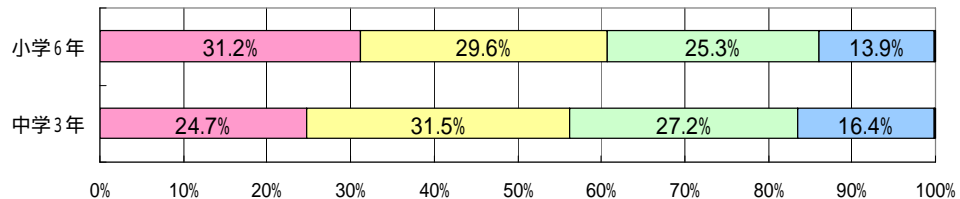
清掃活動(草取り、ゴミ拾いなど)へ参加したことがありますか



編み物や裁縫をしたことがありますか



木材を使ったものづくりをしたことがありますか



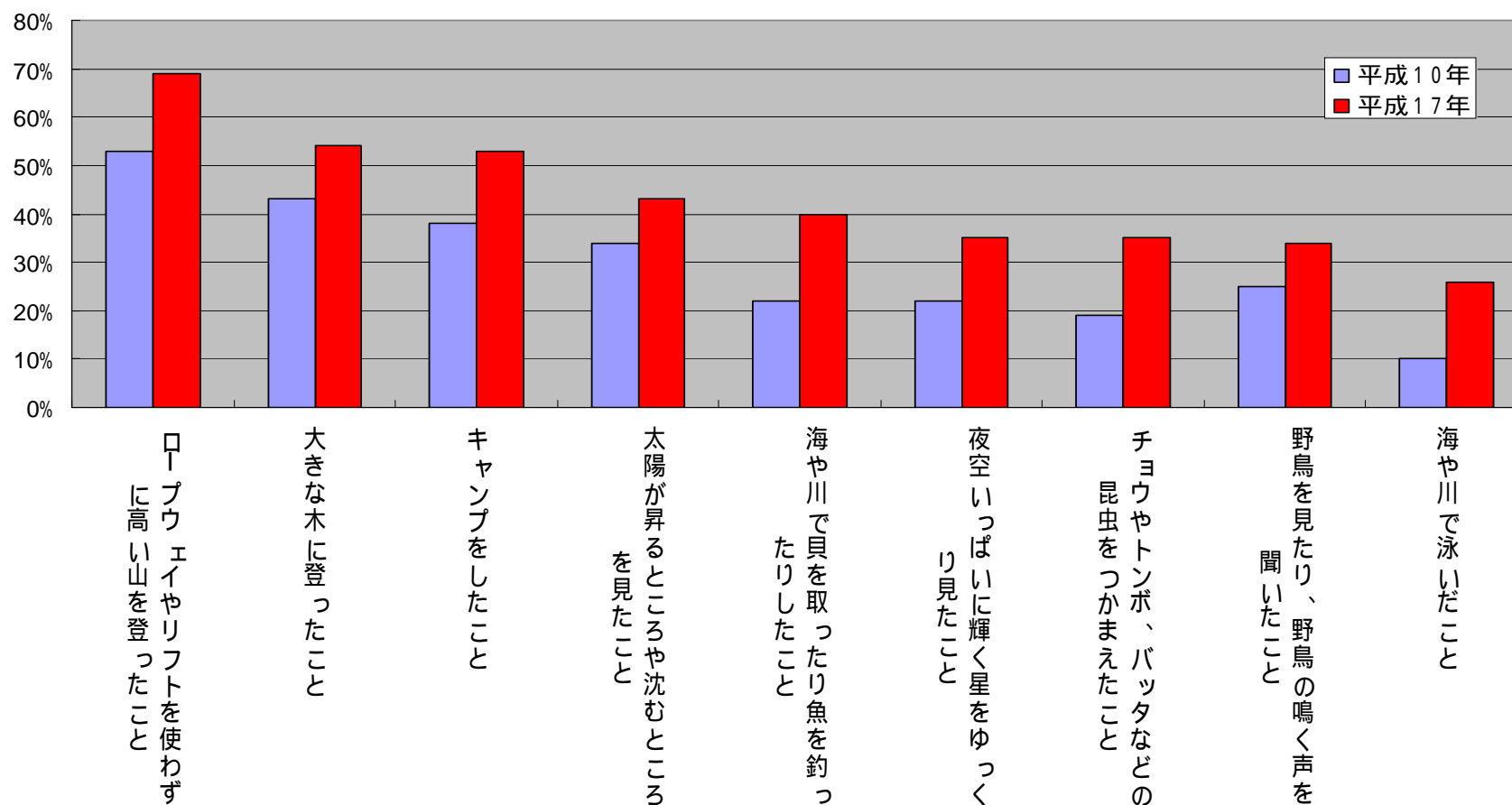
【5-11 自然体験の状況】

自然体験について「ほとんどしたことがない」割合

身近な自然体験を含め、自然の中で活動する体験の機会が減少している。

次の自然体験について「ほとんどしたことがない」割合

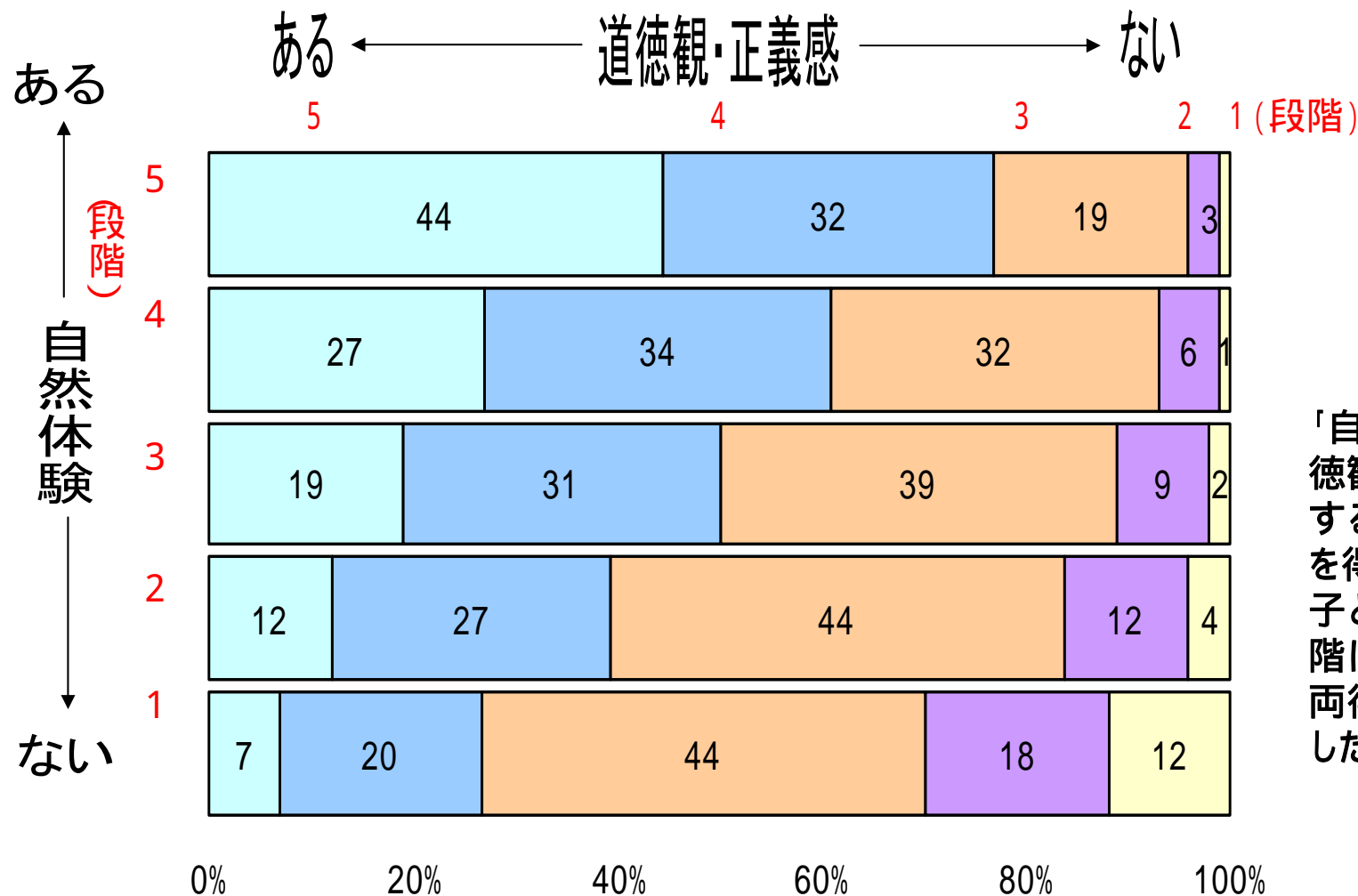
(平成10年と17年の比較)



【5-11 自然体験の状況】

自然体験と道徳観・正義感の関係

自然体験の多い小中学生には道徳感、正義感の身に付いている者が多い。



「自然体験」と「道徳観・正義感」に関する質問への回答を得点化し、各々の子どもの得点を5段階に区分した上で、両得点をクロス集計した。

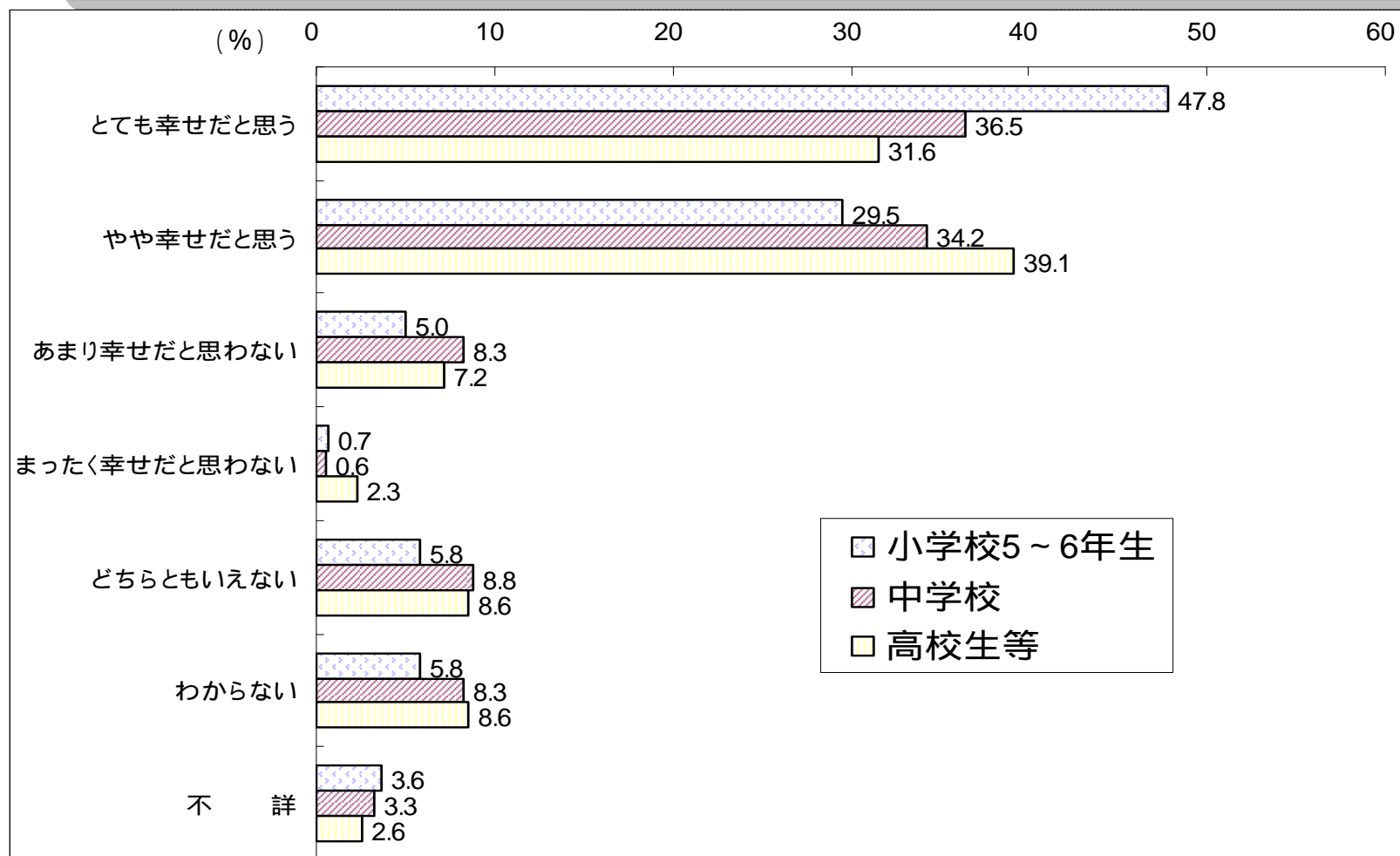
独立行政法人国立青少年教育振興機構

『『青少年の自然体験活動等に関する実態調査』報告書 平成17年度調査』より作成

【5-12 自己評価・自己肯定感】

幸せ感の状況

7割以上の子どもが幸せであると感じているのに対し、「あまり幸せだと思わない」又は「まったく幸せだと思わない」とする子どもも約1割弱いる。



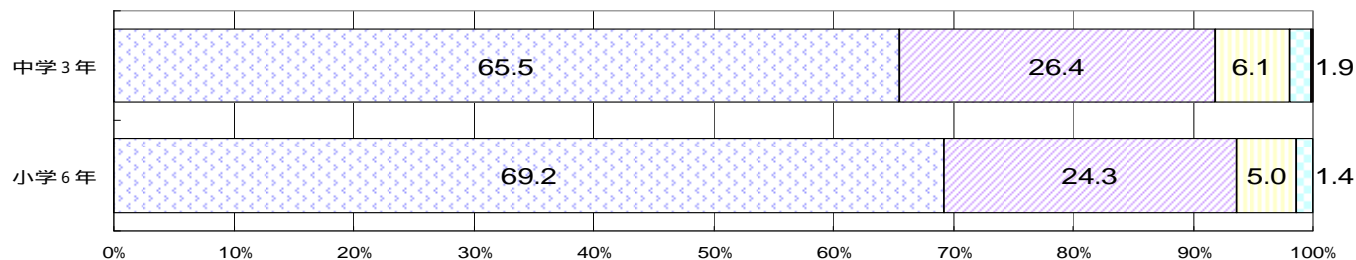
注) 「高校生等」とは「高校」、「各種学校・専修学校・職業訓練校」の合計である。

資料: 厚生労働省 平成16年度全国家庭児童調査

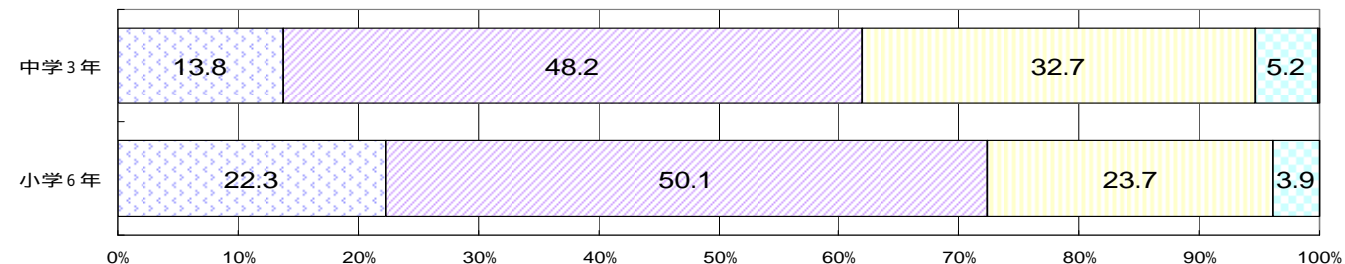
自己肯定感につながる経験・意識の状況（小・中学生）

「ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがある」、「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している」、「自分にはよいところがある」とする子どもの割合は、小学生より中学生で少なくなっている。

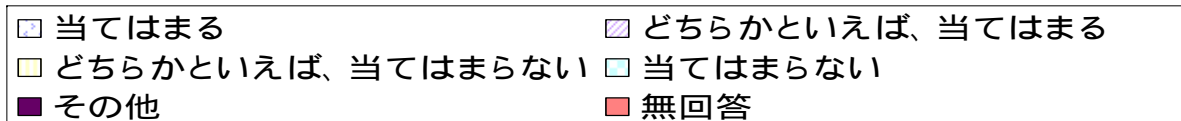
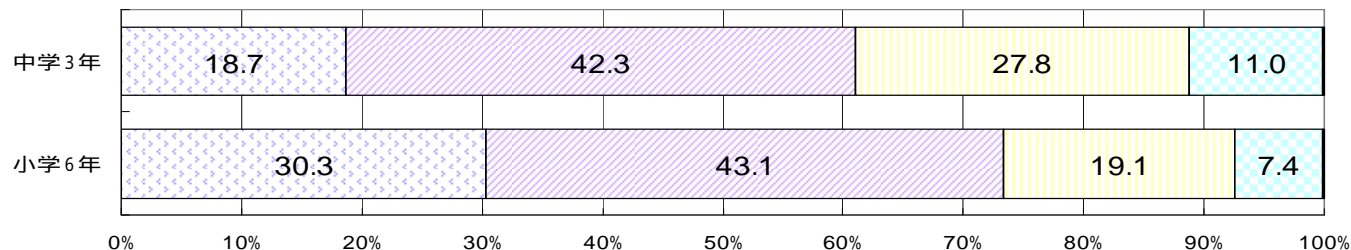
ものごとを最後までやりとげて、うれしかったことがありますか



難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦していますか



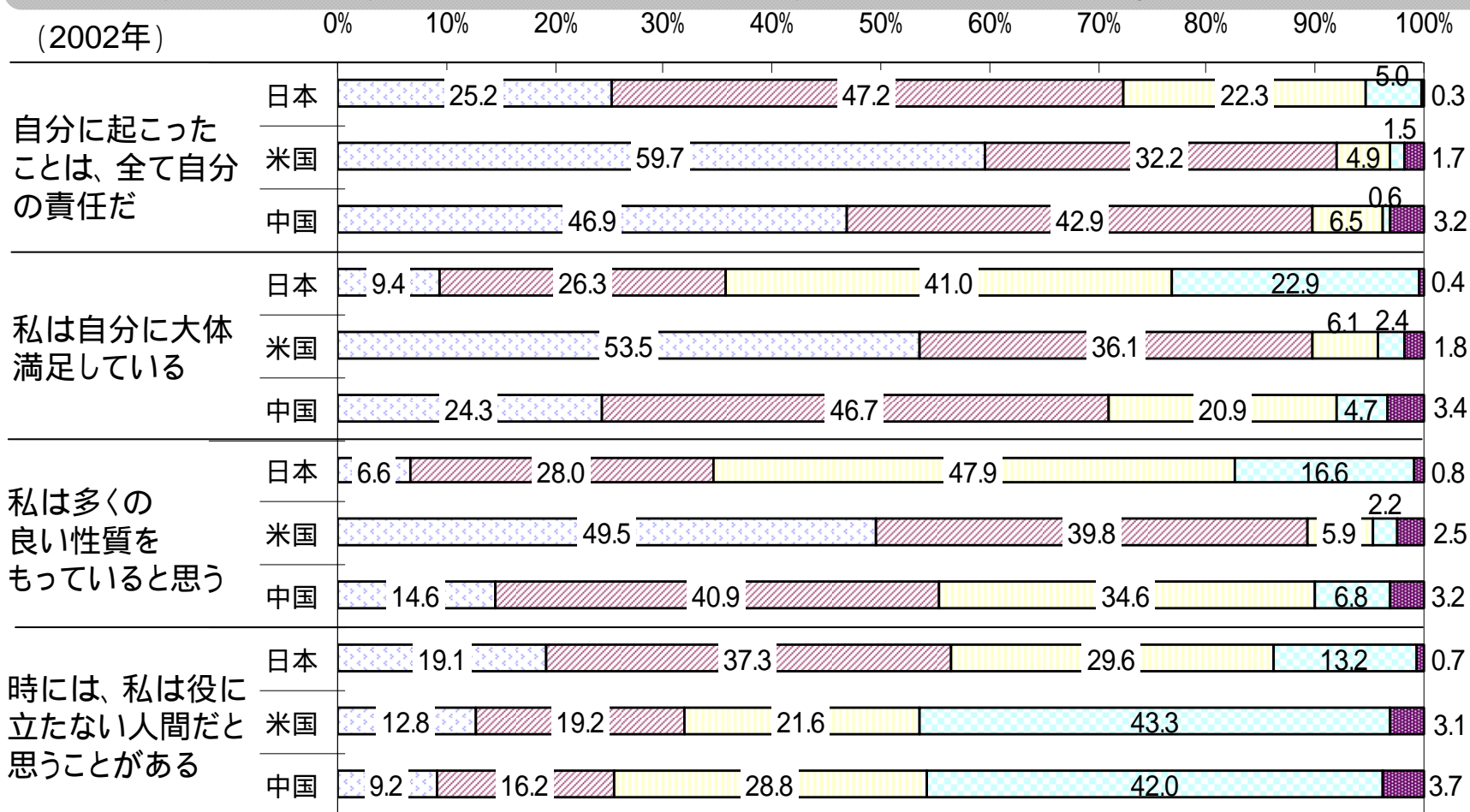
自分には、よいところがあると思いますか



【5-12 自己評価・自己肯定感】

自己に対する認識（国際比較）

米・中に比べ、日本の中学生は、自分について「大体満足している」、「多くの良い性質を持っていると思う」者が少なく、「役に立たない人間だと思うことがある」者が多い。



□よく当てはまる □ややあてはまる □あまりあてはまらない □全然あてはまらない ■無回答

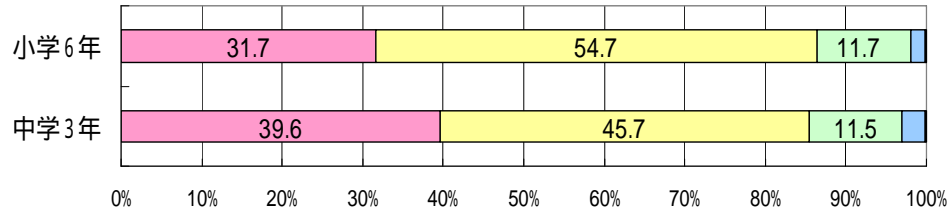
資料：日本青少年研究所 中学生の生活意識に関する調査(平成14年)より

【5-13 規範意識】

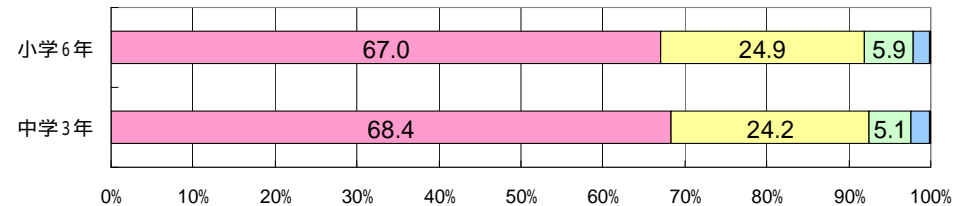
規範意識にかかわる意識・行動の状況（小・中学生）

「友達との約束を守っている」に当てはまるとする児童生徒が約6割であるのに対し、「学校のきまりを守っている」では3～4割、「人が困っているときに進んで助けている」は2割前後であった。

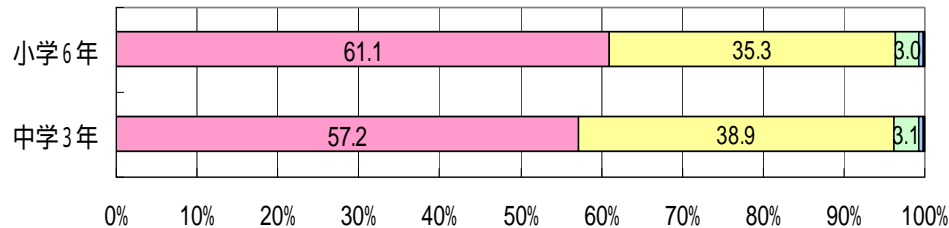
学校のきまりを守っていますか



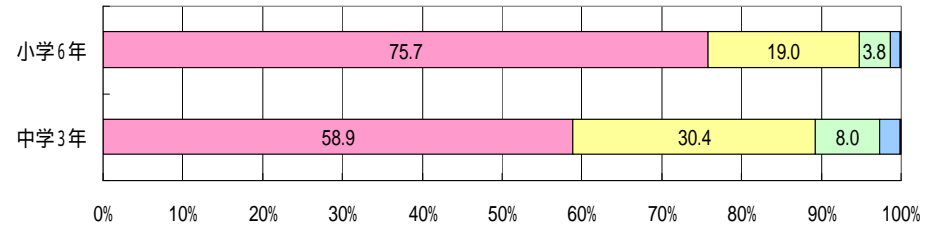
人の気持ちが分かる人間になりたいと思いますか



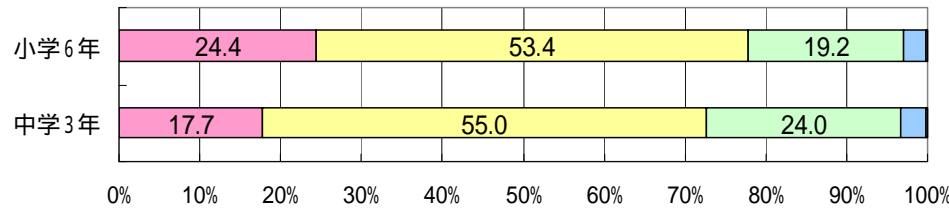
友達との約束を守っていますか



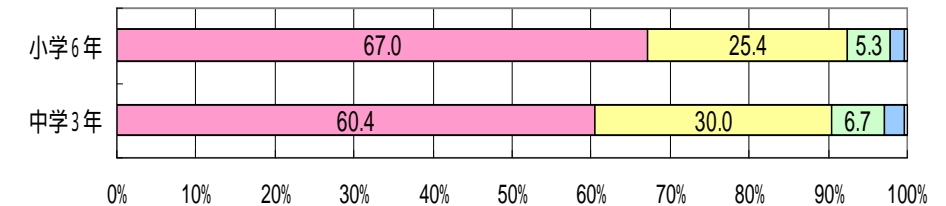
いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか



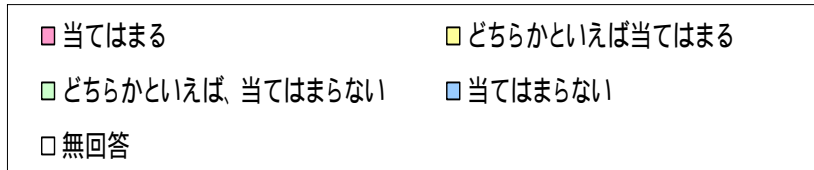
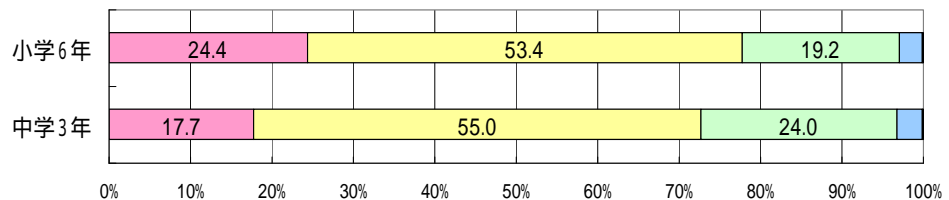
人が困っているときは、進んで助けていますか



人の役に立つ人間になりたいと思いますか



近所の人に出会ったときは、あいさつしていますか



【5-13 規範意識】

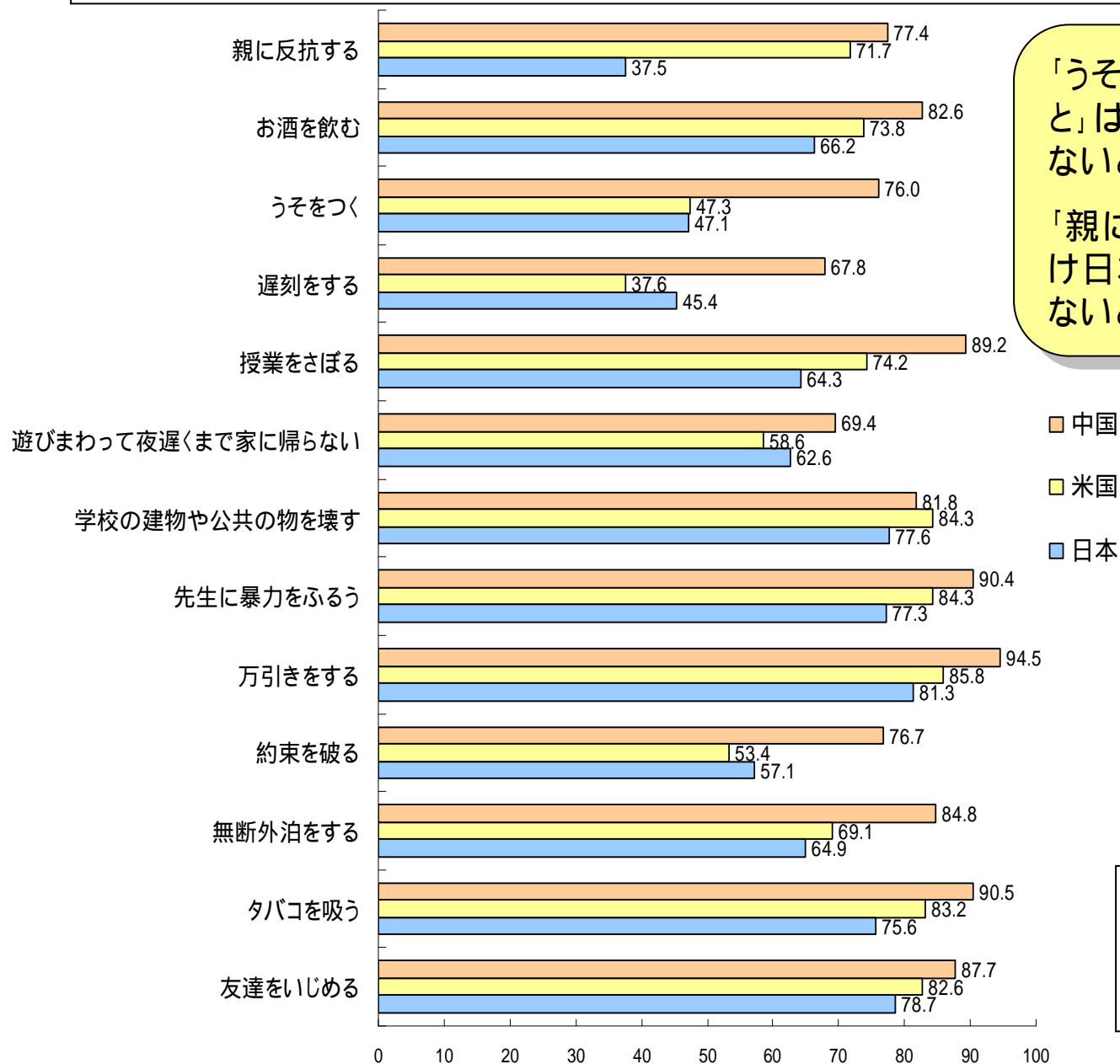
どういう行動をとるか（中学生）

学校・社会・家庭内の規範等への同調的な行動を選ぶ割合は、中1より中3で小さくなっている。
（友人間の関係では、同調が高まる一面も見られる。）

どういう行動をとるか		全体	男女別		学年別 (%)		
			男子	女子	中1	中2	中3
このままでは学校に遅刻する	間に合うよう走る	84.9	82.3	87.6	89.5	82.4	82.9
	間に合わなくてもいいと思う	15.1	17.7	12.4	10.5	17.6	17.1
先生に遅刻を注意された	以後気をつけようと思う	71.6	71.9	71.2	71.2	74.8	68.9
	心の中では、うるさいと思う	28.4	28.1	28.8	28.8	25.2	31.1
クラスのいじめに気づいた	いじめをやめさせようとする	45.2	44.5	45.8	50.9	45.3	39.7
	そのまま見ないふりをする	54.8	55.5	54.2	49.1	54.7	60.3
道端を歩いているとき、千円を拾った	きちんと届け出る	35.9	28.0	44.1	41.7	39.9	26.8
	もらってしまう	64.1	72.0	55.9	58.3	60.1	73.2
突然の大雨で、持ち主のわからないカサがあった	そのカサは使わない	78.6	74.8	82.6	86.8	77.0	72.6
	そのカサを使う	21.4	25.2	17.4	13.2	23.0	27.4
友だちがテストで、あなたよりいい点数を取った	よかったと喜ぶ	25.0	25.5	24.4	28.4	23.2	23.4
	くやしいと思う	75.0	74.5	75.6	71.6	76.8	76.6
観たくない映画に「一緒に行こう」と誘われた	一緒に観に行く	47.5	51.2	43.7	46.9	45.9	49.5
	行くのを断る	52.5	48.8	56.3	53.1	54.1	50.5
見たいテレビがあるが、見ると明日までの宿題が終わりそうにない	宿題をやる	51.2	47.6	55.1	56.8	52.2	45.3
	テレビを見る	48.8	52.4	44.9	43.2	47.8	54.7
親から「勉強しなさい」と言われた	すぐに勉強をする	47.9	47.2	48.6	59.9	50.1	34.8
	勉強をするふりだけする	52.1	52.8	51.4	40.1	49.9	65.2
必要はないが、流行しているバッグが欲しいとき、親は買ってあげるべきか	買う必要はないと思う	72.0	77.5	66.3	70.8	76.0	69.6
	あなたに買ってあげるべきと思う	28.0	22.5	33.7	29.2	24.0	30.4

【5-13 規範意識】

してはいけないと思うこと(国際比較)



「うそをつくこと」、「遅刻すること」は、日米ともに、してはいけないとする割合が低く、

「親に反抗すること」は、とりわけ日本において、してはいけないとする割合が低い。

■ 中国
■ 米国
■ 日本

中学生の生活と意識に関する調査報告書
 一日米中の3カ国の比較(平成14年10月)
 (財)一ツ橋文芸教育振興会、
 (財)日本青少年研究所)

【5-14 価値観】

大切なことと思うこと

大切と思う割合は、男子は「健康であること」が最も多く、次が「友達がたくさんいること」、女子では「友達がたくさんいること」が最も多く、次が「健康であること」となっている。

単位：%

大切なこと	平成16年					
	総数	男	女	小学校 5～6年生	中学生	高校生等
健康であること	60.6	62.8	58.4	64.0	59.8	58.9
友達がたくさんいること	59.8	58.2	61.4	64.7	56.7	60.2
将来に夢を持っていること	48.1	43.5	52.9	47.1	45.6	53.3
勇気を持っていること	34.3	28.0	40.9	38.1	35.4	29.3
運動や歌などで、何か得意なもの (特技)があること	32.0	35.0	28.9	29.5	33.1	32.6
勉強ができること	21.5	25.0	17.9	27.0	24.0	12.8
お金がたくさんあること	16.9	19.7	14.1	10.8	16.5	22.7
いろんなことを知っていること	12.6	15.3	9.9	9.0	12.7	15.8
人の嫌がることをすすんでやること	8.0	7.0	9.1	6.1	9.6	7.6
不詳	6.1	5.5	6.7	3.6	6.7	6.9

注) 「高校生等」は「高校生」、「各種学校・専修学校・職業訓練校の生徒」の合計である。

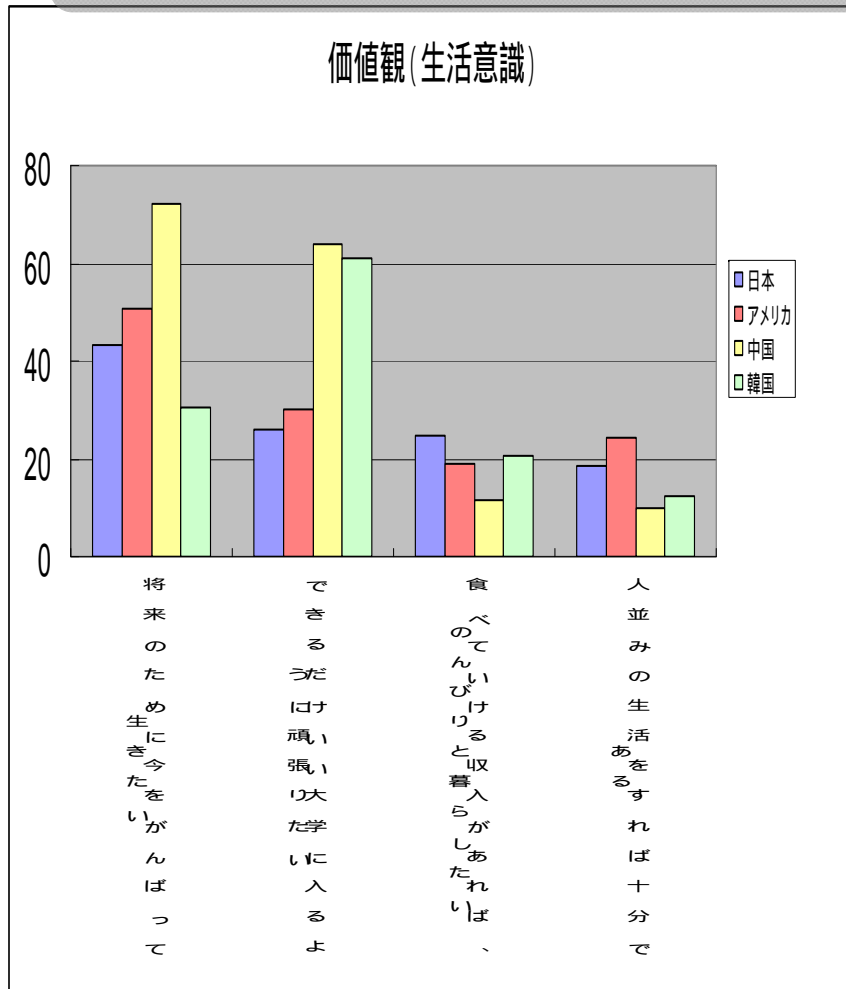
赤字は、「総数」における順位(割合の多い順)と、
男女別・学校段階別の順位とが、異なるところ。

(厚生労働省)平成16年度全国家庭児童調査

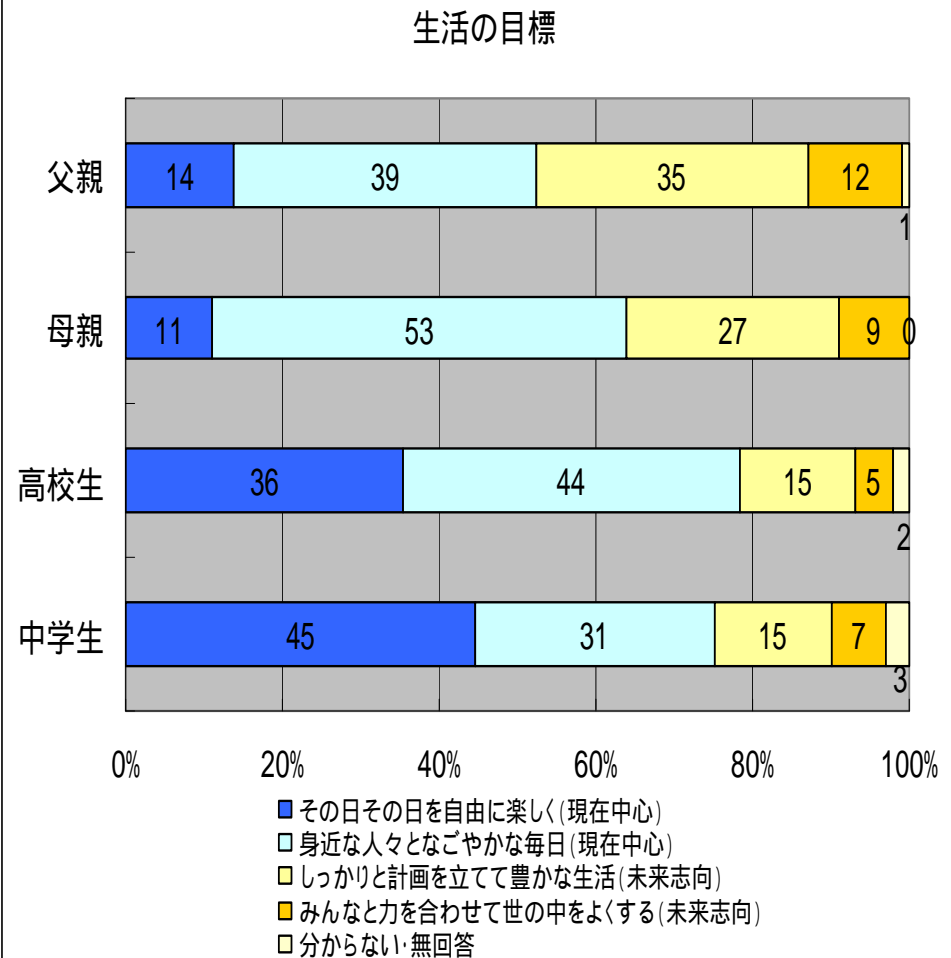
【5-14 価値観】

生活意識・生活の目標

日本の中高生は、諸外国と比較して将来志向の生活意識を持つ者が少なく、親世代と比較して将来よりも今の生活を重視する者が多い。



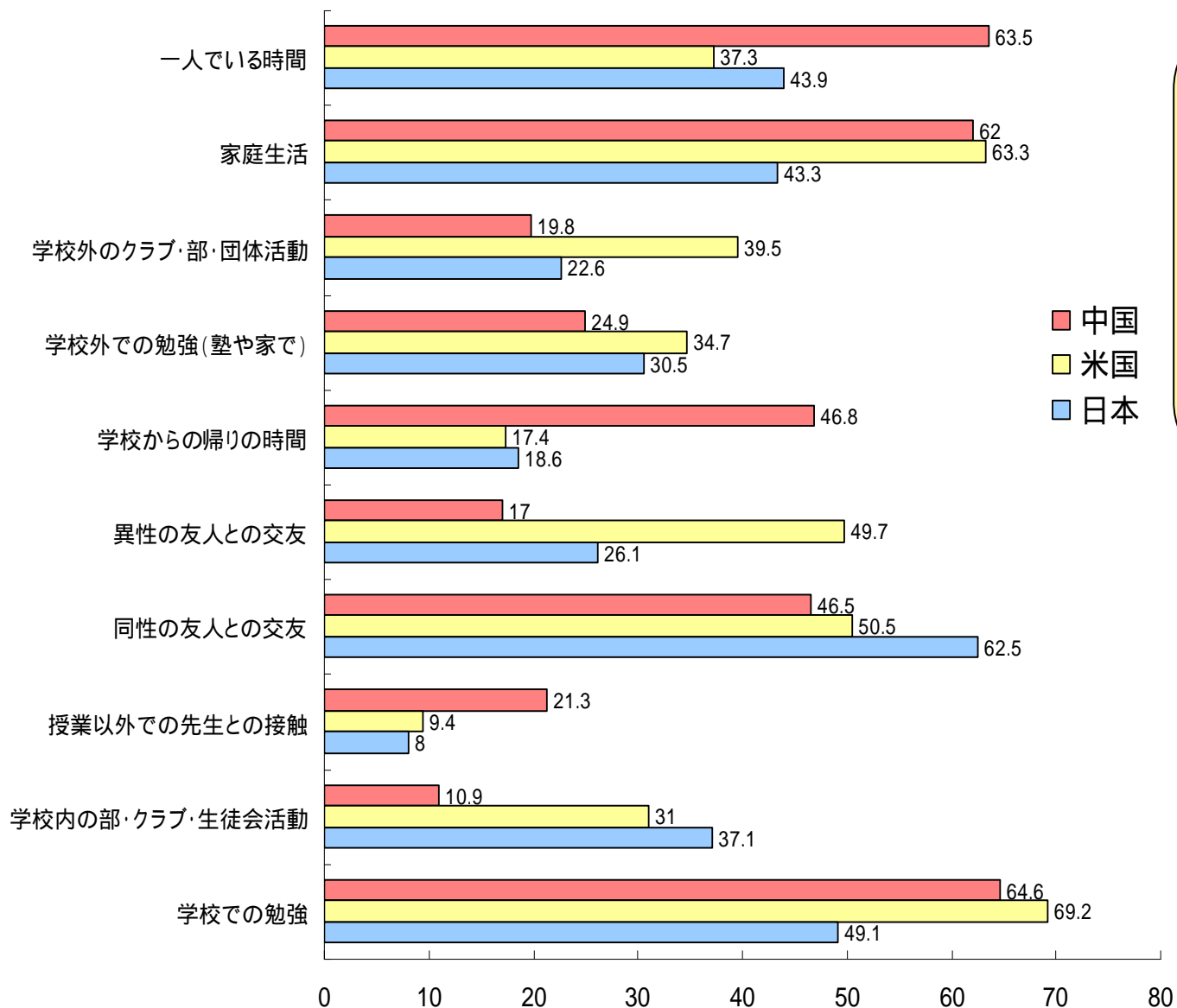
(財)一ツ橋文芸教育振興会、(財)日本青少年研究所
『高校生の友人関係と生活意識調査報告書』(平成18年)



NHK放送文化研究所
『中学生・高校生の生活と意識調査』(平成15年)

【5-14 価値観】

生活の中で重要なこと（国際比較）



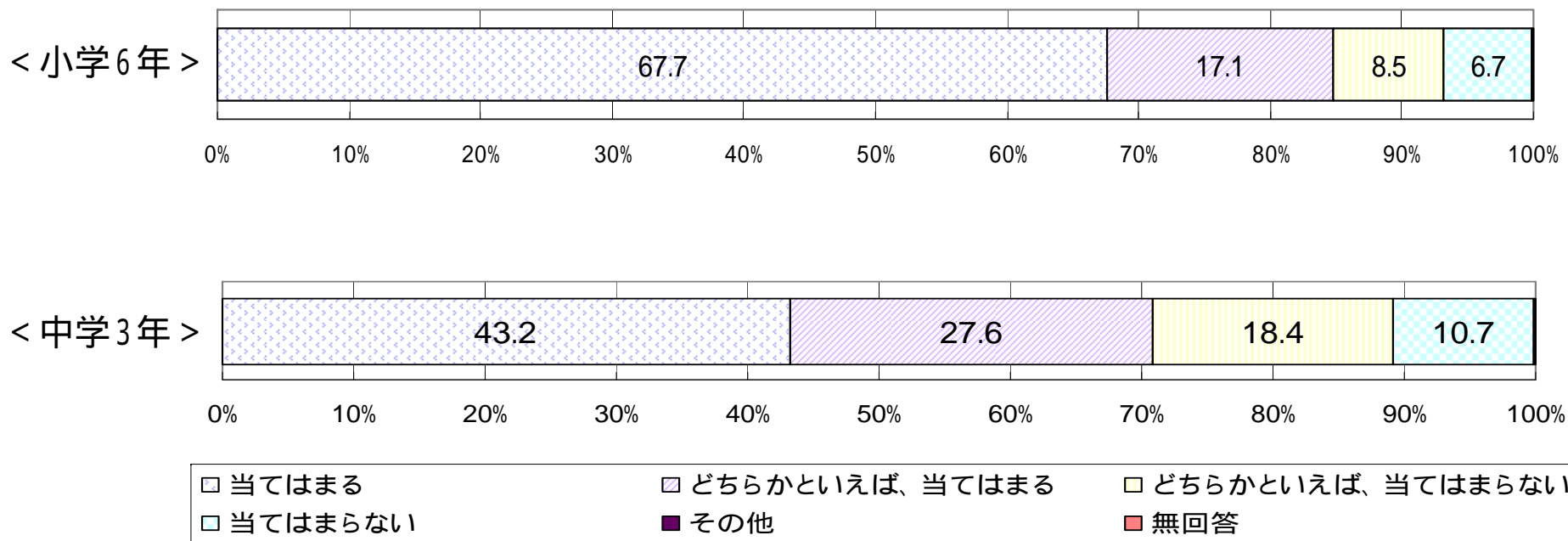
米・中の生徒は「学校での勉強」、「家庭生活」等を重要視する者が多いのに対し、

日本の生徒は「同性の友人との交友」を重要視する者が多い。

中学生の生活と意識に関する調査報告書
 一日米中の3カ国の比較(平成14年10月)
 (財)一ツ橋文芸教育振興会、
 (財)日本青少年研究所)

将来の夢や目標を持っているか（小・中学生）

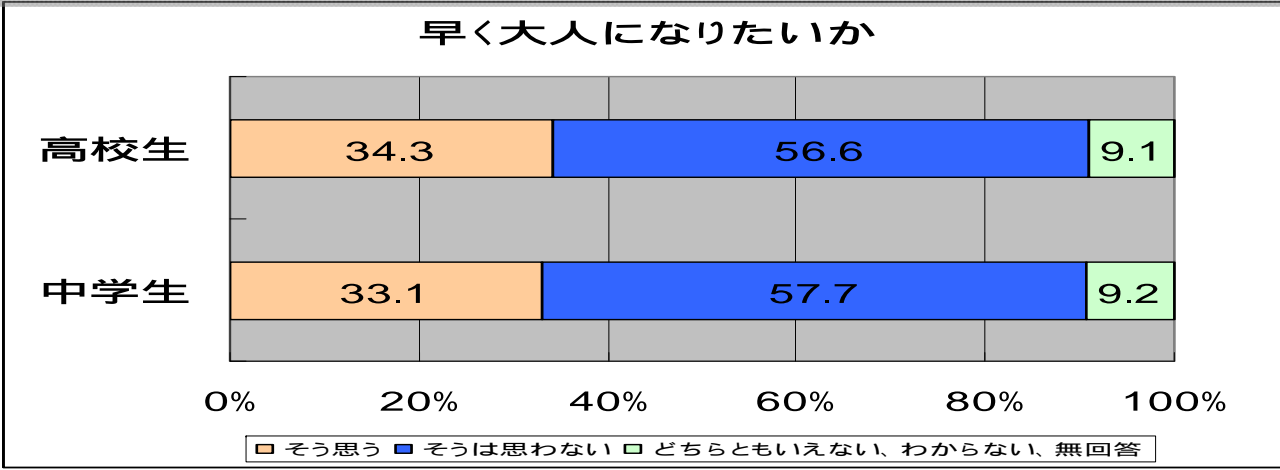
中学生より小学生の方が、将来の夢や目標をもっている子どもの割合が多い。



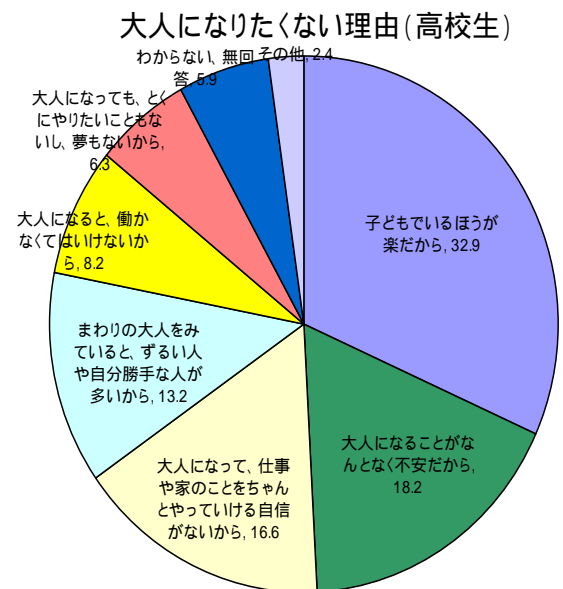
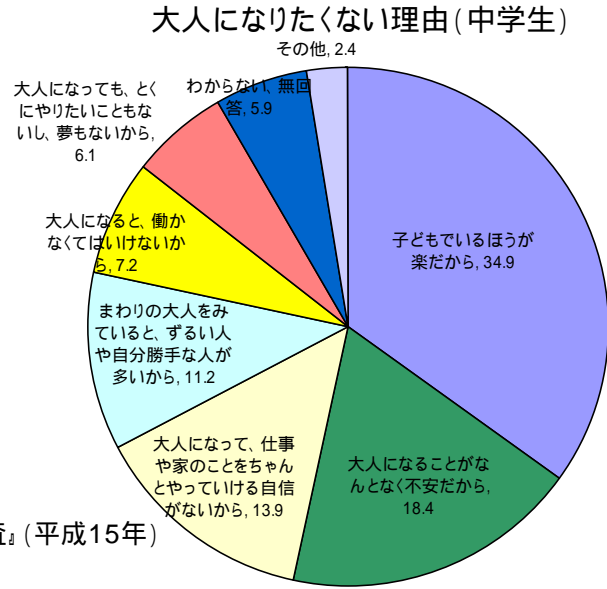
【5-15 大人になることへの思い・将来の希望】

早く大人になりたいか / なりたくない理由

中高生の半数以上は早く大人になりたいとは思わず、大人になることへの負担感や不安・自信のなさを感じている。



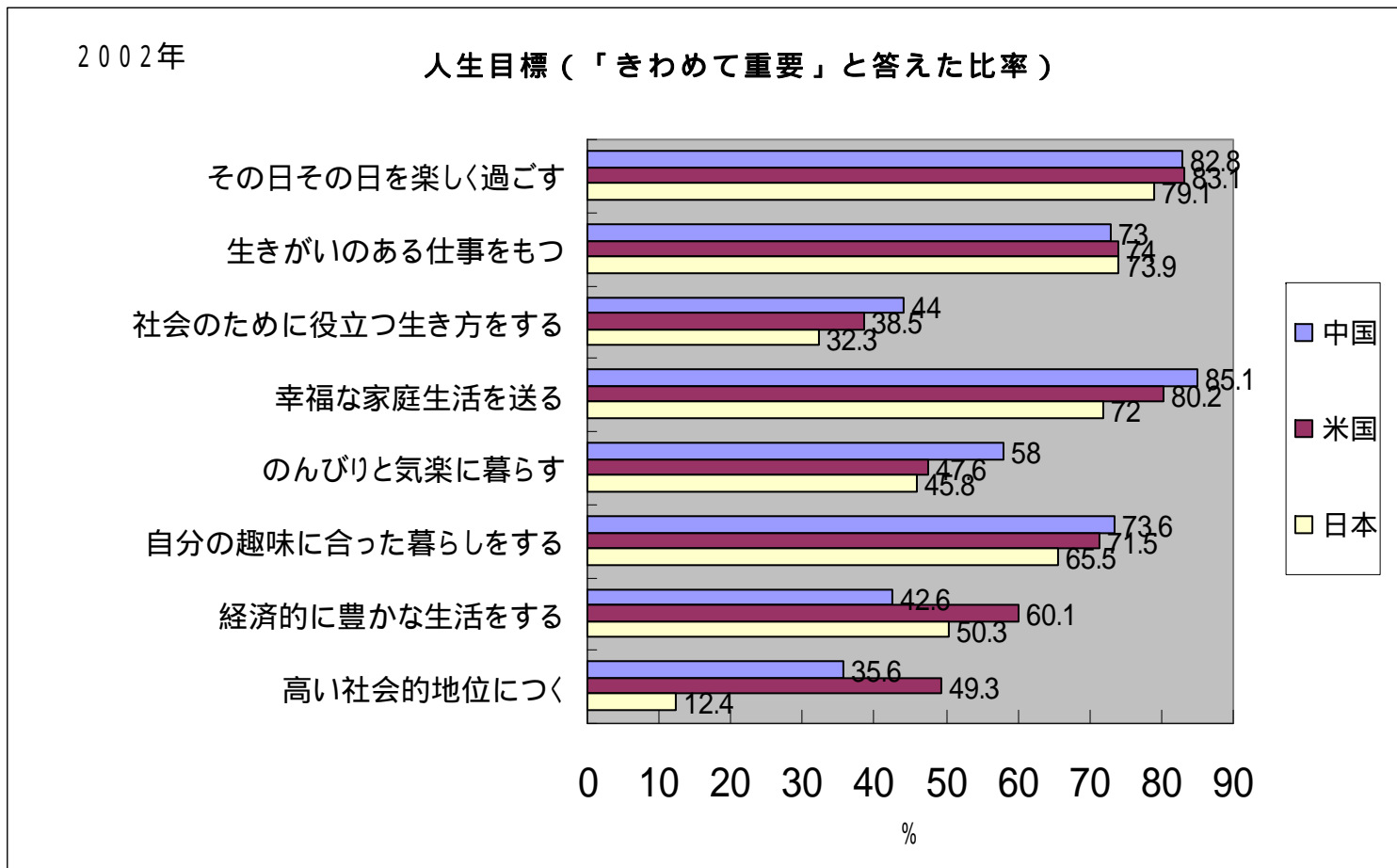
上図で「そうは思わない」と回答した者について



【5-15 大人になることへの思い・将来の希望】

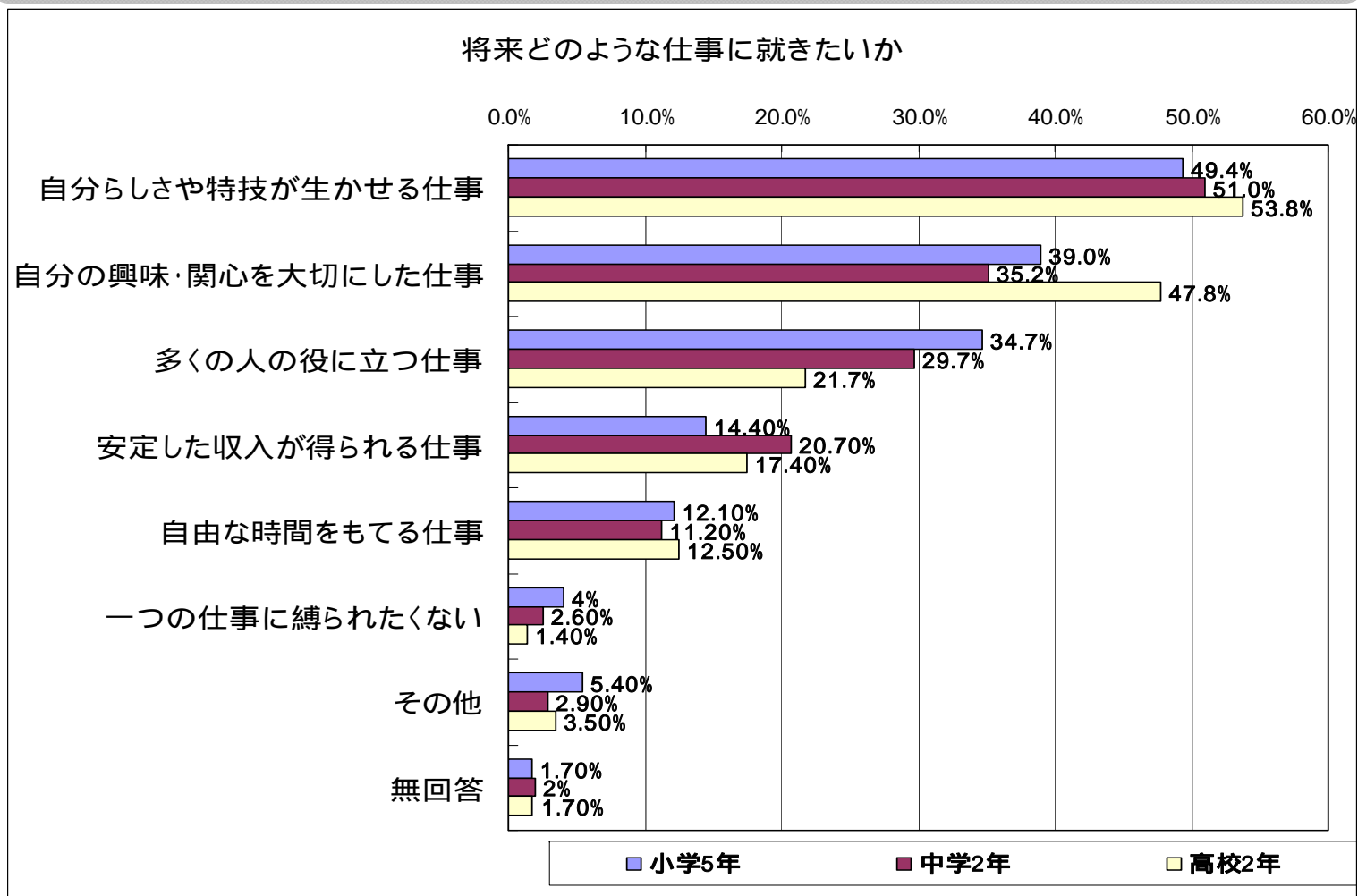
人生目標(国際比較)

人生目標については、日米中ともに「その日を楽しく過ごす」、「生きがいのある仕事を持つ」、「幸福な家庭生活を送る」ことを重視。



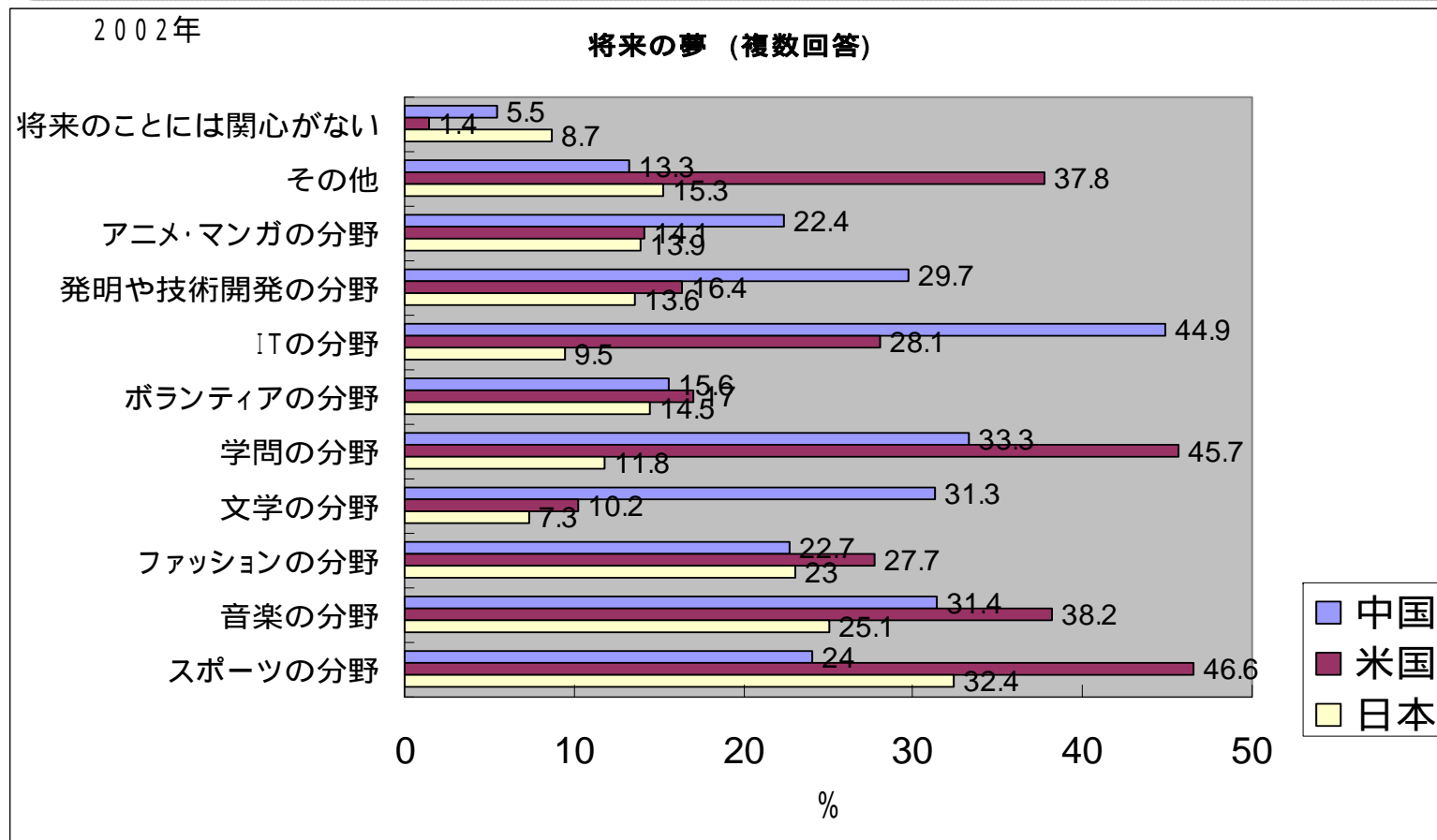
将来どのような仕事に就きたいか

小・中・高を通して「自分らしさや特技が活かせる仕事」に就きたいとする者が最も多い。



将来の夢 (国際比較)

将来、情熱を注いでやってみたいことについて、
 日本の中学生では、「スポーツ」、「音楽」、「ファッション」の分野が多いのに対し、
 米国では、「スポーツ」、「学問」の分野が、
 中国では、「IT」、「学問」、「文学」の分野が多い。

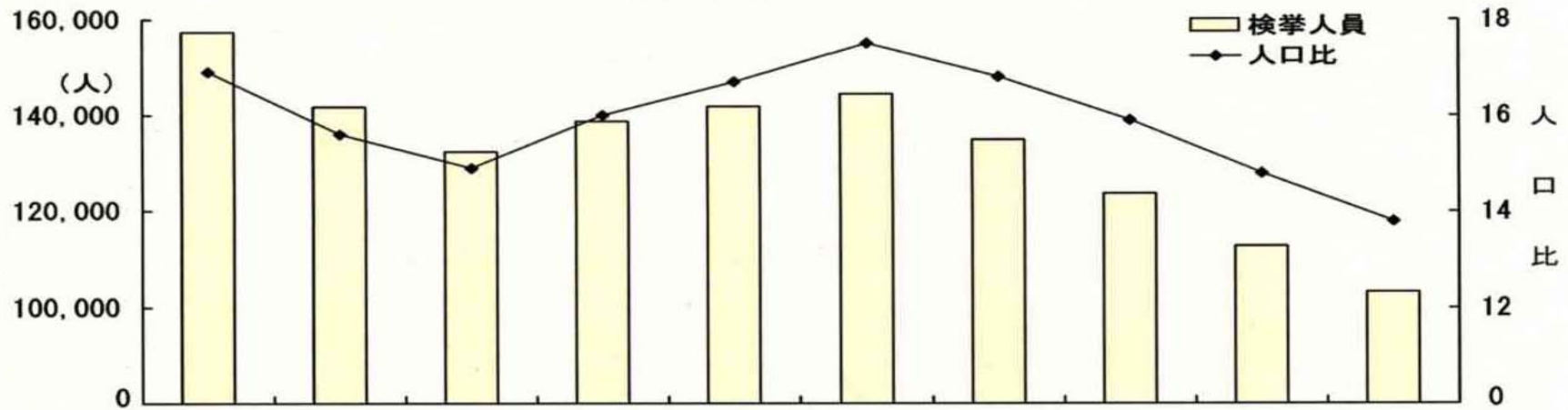


6 その他

6-1 刑法犯少年・触法少年の推移

刑法犯罪少年の検挙人員の数は平成16年以降4年連続で減少。
 (この10年では約1/3の減)

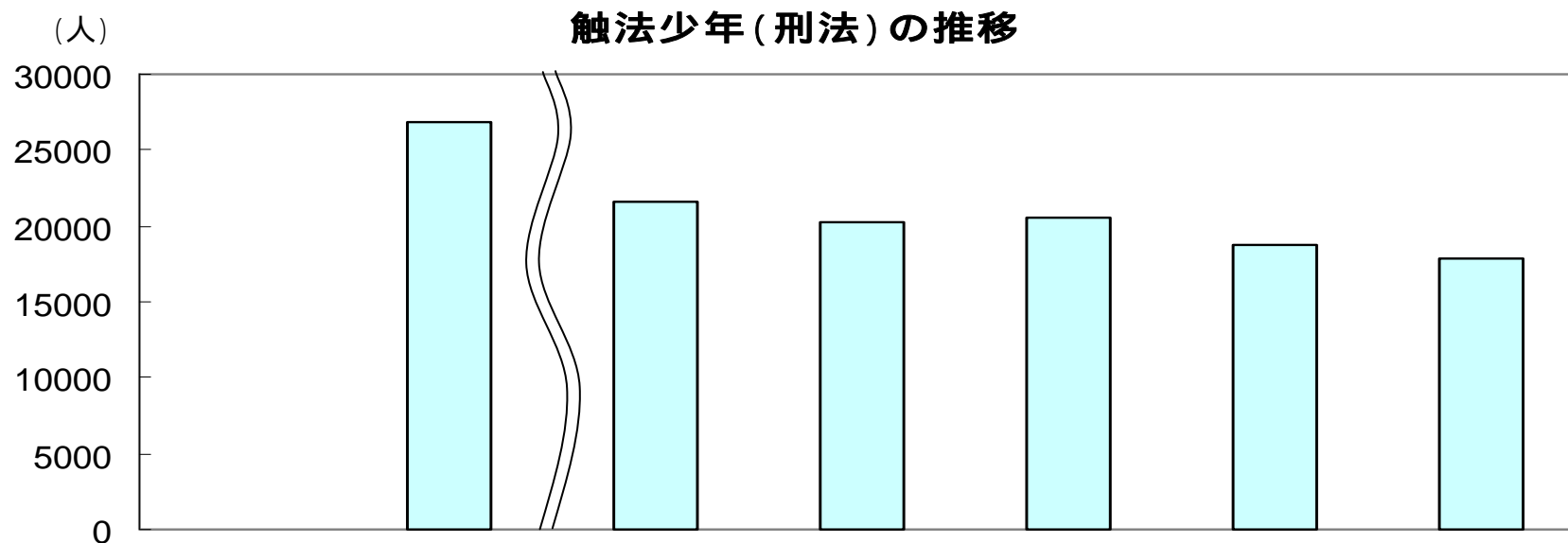
刑法犯少年の推移



年次	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年
検挙人員	157,385	141,721	132,336	138,654	141,775	144,404	134,847	123,715	112,817	103,224
(人口比)	16.9	15.6	14.9	16.0	16.7	17.5	16.8	15.9	14.8	13.8
凶悪犯	2,197	2,237	2,120	2,127	1,986	2,212	1,584	1,441	1,170	1,042
粗暴犯	17,321	15,930	19,691	18,416	15,954	14,356	11,439	10,458	9,817	9,248
窃盗犯	99,768	86,561	77,903	81,260	83,300	81,512	76,637	71,147	62,637	58,150
知能犯	715	561	584	526	632	784	1,240	1,160	1,294	1,142
風俗犯	434	409	429	410	347	425	344	383	346	341
その他の刑法犯	36,950	36,023	31,609	35,915	39,556	45,115	43,603	39,126	37,553	33,301
刑法犯総検挙人員に占める少年の割合	48.5%	44.9%	42.7%	42.6%	40.8%	38.0%	34.7%	32.0%	29.4%	28.2%

注) 「刑法犯罪少年」；刑法等に規定する罪を犯した14歳以上20歳未満の者

触法少年の補導人員の数は平成18年以降2年連続の減少。
 (この10年では約1/3の減)



年次	10年	15年	16年	17年	18年	19年
総数(人)	26,905	21,539	20,191	20,519	18,787	17,904
凶悪犯	182	212	219	202	225	171
粗暴犯	1,455	1,467	1,301	1,624	1,467	1,425
窃盗犯	21,493	14,448	13,710	13,336	11,945	11,193
知能犯	32	39	46	57	63	55

注) 「触法少年」; 刑罰法令に触れる行為をした14歳未満の者

資料: 警察庁「少年非行等の概要」(平成19年)